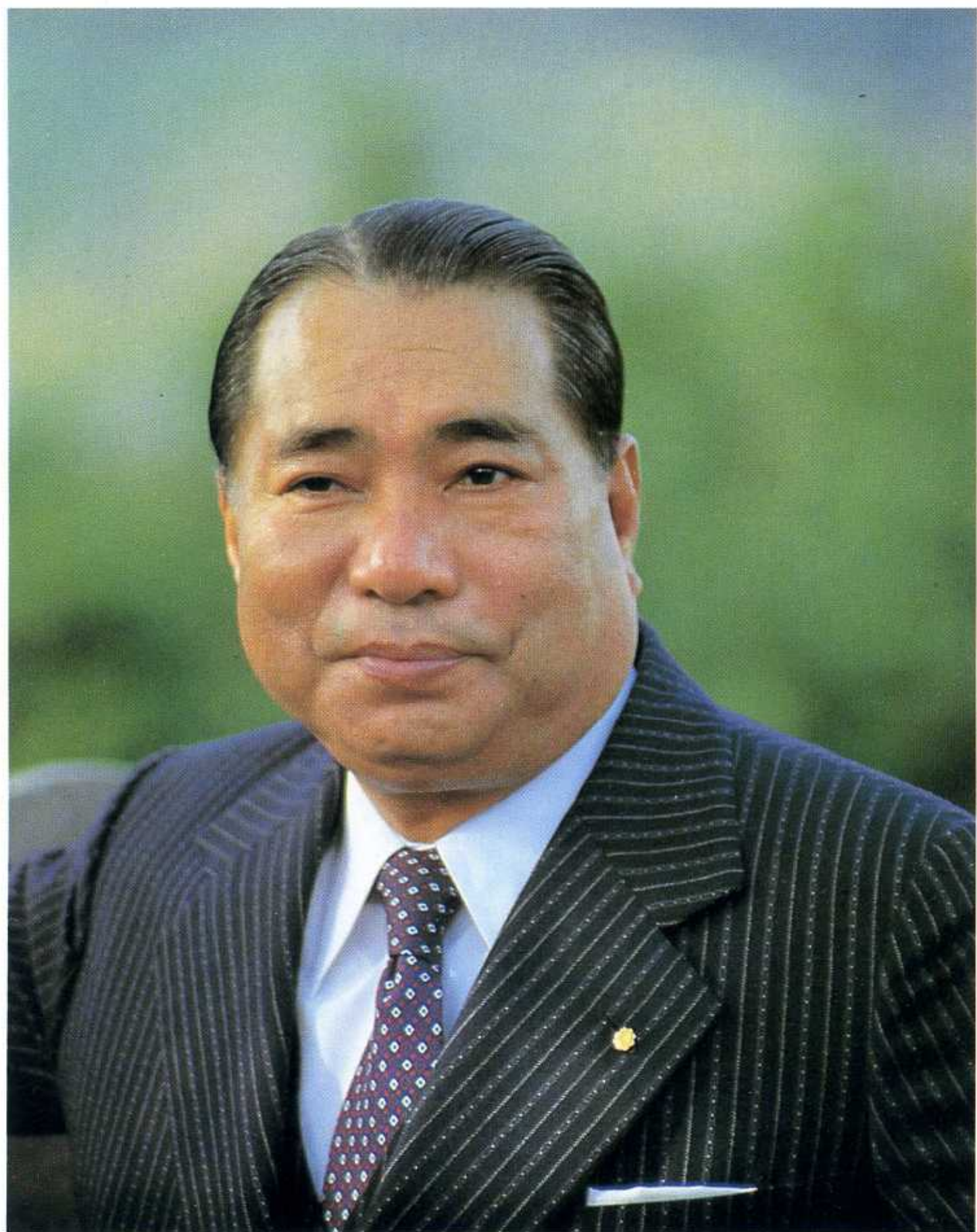


新版
池田會長全集

第十卷
講義編



著者近影

日々の教学

「報恩抄」

——仏法の要諦は「一人立つ」精神

515

「法門申さるべき様の事」——脈打つ閻浮第一の大確信

532

「撰時抄」——わが振る舞いこそ信心の結晶

551

「開目抄」——輝かそう生命の富を

565

「日女御前御返事」——尊き同志を信頼しあおう

573

「種種御振舞御書」——一切を包む御本仏の大慈悲

577

「祈禱抄」——祈りは願業成就の原動力

582

「御義口伝」——人間生命の諸悪に敢然と挑戦

588

索引

卷末

「諸法實相抄」講義

「生死一大事血脈抄」講義

「觀心本尊抄」講義

「佐渡御書」講義

「如說修行抄」講義

「經王殿御返事」講義

「一生成仏抄」講義

「富木殿御返事」講義

「兄弟抄」講義

「曾谷殿御返事」講義

新版池田會長全集

第十卷

講義編

「諸法実相抄」講義

大衆のなかで展開された仏教運動

「諸法実相抄」^{しよほうじつそうしやう}を拝するにあたり、仏教史上の一つのエピソードを申し上げたい。それは、いまから千数百年前、全中国に仏法研学の大きな潮流を巻き起こした、龜茲国^{きうしこく}の羅什^{らじき}の話であります。

鳩摩羅什^{くまらし}は、ご承知のとおり、不朽^{ふきゆう}の名訳といわれる「妙法蓮華經」を訳出^{やくしゆつ}した訳經僧^{やくきやうそう}であります。私が羅什にうたれるゆえんは、一生をかけて中国に渡り、仏教の真髓を伝えようとした情熱であります。波乱^{はんらん}の艱難^{かんなん}のすえ、中国の長安^{ちやうあん}へ入ったのは、五十歳を過ぎていたといわれています。そして彼のめざしつづけてきた戦いは、そのときから始まったのであります。それまで、力をためにためていたかのように、怒濤^{どとう}のような勢いで翻譯事業^{ほんやくじぎやう}が始まりました。中国の僧侶も、羅什の長安入りを伝え聞いて、続々と彼のもとに結集し、歴史にのこる翻譯をなしていったのであります。

羅什入滅まで、八年間とも十二年間ともいわれますが、その間、三百数十卷もの經典が翻譯されて

おり、一か月二巻ないし三巻という驚異的なペースであったことが推察されます。それは、翻訳という言葉からうけるイメージとは異なった、生きいきとした仏教研学運動であったことを象徴しております。

羅什^{ろし}が訳したさまざまな經典の序によると、その翻訳の場には、あるときは八百人、あるときは二千人というように、数多くの俊英^{しゅんえい}が集まっております。その聴衆を前に、羅什は經典を手に取り、講義形式で進めていったのであります。そして、なぜそう訳すのか、その經文の元意^{がんい}はどこにあるのかを話し、あるときには質疑応答のような形式をとりつつ、納得のいくまで解説していったのであります。

書齋に閉じこもり、辞書と首っ引きで、自分一人で何十年もかかって難解な訳業をするのではなく、大衆の呼吸をじかに感じながら、対話の場で仏法を展開していった羅什であったからこそ、あれほどの名訳が生まれたのではないかと思うのであります。

羅什の訳はひじょうになめらかで、かつ經典の元意をふまえた意識に優れたものがあつたというのも、このことを考えれば、なるほどと思われます。仏法は、それがいかに優れたものであっても、難解であれば、人々から離れたものになってしまう。人々と語り、生活のなかで実感するなかに、思想の光は輝いていくものであります。

もし、この羅什教団ともいべき人々の仏典流布の活躍がなければ、後の天台、伝教の昇華^{しょうか}へと、仏法の歴史が展開することはなかったにちがいない。それを考えると、いかにその使命が偉大であっ

たかがわかるのであります。

私はいま、この羅什の業績をうんぬんしようとするものではありません。大衆のなかに入り、大衆とともに語り合ったその姿に、仏法研学の真実の姿があると訴えたいのであります。また、ある意味で私たちも、現代における羅什の立場にあるといえましょう。昔の羅什は、ヨコにインドから中国へと經典を翻訳しました。現代の羅什は、タテに、またヨコにと、七百年前の不滅の末法の御本仏の御金言を、現代という時代に、生きいきと蘇^{よみがえ}らせる使命を担^たっております。

すなわち、私どもの教学運動もまた、羅什と同じ方式にのっとり、御書を手にし、講義形式をと^り、あるときは質疑応答の形式をと^り、あるときは個人指導のさいに、人々の呼吸を直接実感しながら、対話の場で仏法を展開していくのであります。

仏教の創始者たる釈尊も、その生涯は庶民の哀歎のひだにふれつつ、人生の苦との対決のなかから、珠玉のごとき教えが遺^{のこ}されていったことを知るべきであります。

ある仏教学者によると「釈尊は仏教を説かなかった」という極端な説もあるぐらいであります。もちろん釈尊が仏教を説いたのは当然でありますが、この一見矛盾^{むじゆん}する言葉も、ある意味で含蓄^{がんちゆう}に富んだ言葉であるといってよい。八万法蔵といい、五時八教ときくと、精密に体系だてた教理を思い浮かべ、釈尊もそのカリキュラムにそって、説法したかのように受け取りがちであります。しかし釈尊の説法は、貧苦にあえぐ庶民への激励であり、病^{やまい}に苦しむ老婆を背に負わんばかりの同苦の言葉であり、精神の悩みの深淵^{しんえん}に沈む青年へのあたたかな激励の教えであった。差別に悩み、カースト制度に

苦しむ大衆の側に立った火のような言々句々が、その一生の教化を終えてみれば、八万法蔵として残っていたということでありましょう。それは、経文が徹底して問答形式で説かれていることに、象徴的にあらわれている。庶民との対話、行動のなかに釈尊の悟りの法門がほとばしりでていったのであり、それが經典としてまとめられていったのであります。

日蓮大聖人も、また同じ立場を貫かれております。いつも申し上げていることでもあり、また昭和五十一年十月の本部総会でも述べましたので、詳しくはお話いたしません、あの膨大な御書も、生涯、激動の日々のなか、民衆一人ひとりの対話をつづけられ、朝に夕に救済の手をさしのべられた結晶であります。大聖人は、けっして書齋に閉じこもって御書をおしたためになったのではありません。戦いながら書き語り、書き語られながら戦われたのであります。

仏教ときけば、山野にこもり、静的なものと考えがちですが、その発生からすでに実践のなかに生き、民衆のなかで生きいきと語り継がれてきたのが、その正統な流れであることに刮目したいのであります。

信行学の要諦を教示

さて「諸法実相抄」は、日蓮大聖人みずから、この御抄の追伸のところに「ことに此の文には大事の事どもしるしてまいらせ候ぞ」、また「此の文あひかまへて秘し給へ、日蓮が己証の法門等かきつけ

て候ぞ」と明記されておりますように、比較的短い御述作ではありますが、仏法の肝要がことごとく集約してあらわされております。

執筆せられた文永十年五月といえ、法本尊開頭かいけんの書であり、受持じゆじ即観心くわんじんの、末法仏道修行の要諦ようていを示された「観心本尊抄かんじんのほんぞんしやう」を著された翌月であります。本尊抄が、文永十年の四月二十五日、本抄が翌五月十七日と記しるされております。

したがって内容も、法華經迹門しやくもん、在世衆生得脱とくだつのカギとされた、方便品の「諸法実相、十如是じゆしぜ」の文から説き起こされて、法華經哲理の真髓を示し、その当体が妙法蓮華經、即、御本尊であることを教えられております。これは、法本尊の意義を明かされたと考えられます。

ついで、この法華經の極理を明らかにし、かつ弘めるべき人こそ、地涌の菩薩の上首上行であることを示され、それを、まさに日蓮大聖人御自身が実践してきたと述べられるのであります。すなわち、一往、外用げゆうの辺からいえば、法華經弘通の上行菩薩の再誕さいたんであり、再往、内証ないしやうの辺からいえば、末法救済の大法を建立する御本仏であり、久遠元初の仏であることを、暗示されているわけでありま

す。これは、人本尊を明かされたと考えてよい。

このように、人法両面から、末法一切衆生の尊敬すべき根本を明かされたことは、人本尊開頭の書たる「開目抄」、法本尊開頭の書たる「観心本尊抄」の結論が、ともに、この一書のなかに包含ほうがんされていると、私には拝せられるのであります。

しかも、後半においては、未来広宣流布のまちがいないことを予言され、末法万年にわたる仏道修

行の要諦として、信行学のあり方を教示されて結ばれている。すなわち末法の仏法の正体が、その甚深の法体、修行のすべてを網羅して、しかも簡潔にあらわされているのが本抄なのであります。

ゆえに、日蓮大聖人の原点にかえることを根本精神とするわが創価学会は、数ある御書のなかでも、とくにこの「諸法実相抄」を根幹として、自己の信心の研鑽と、あらゆる指導、活動に取り組んできたのであります。

初代会長牧口常三郎先生も、つねに本抄をとおして指導されたとうかがっております。第二代会長戸田城聖先生が、法華経は別にして、まず、私たち数人に講義された御書は「諸法実相抄」でありました。私もまた、この講義を受講した一人であります。

さらに、高等部に対し、また本部職員の代表に対し、私はいくたびか、この「諸法実相抄」を講義してきましたが、拝するたびに、法門の深さに驚嘆し、大聖人の烈々たる氣迫に胸をうたれる思いがいたします。

創価学会創立四十六周年を記念して、再び私は、いままで何回となく講義したものに、新時代に相応して加筆添削をして掲載させていただくことにいたしました。

以上、前置きとして申し上げておきます。

いっさいの現象は妙法の姿

問うて云く法華經の第一方便品に云く「諸法実相しよほうじつそうないし乃至本末究竟等ほんまつくきやうとう」云云、此の經文の意如何こころいかん

「諸法実相」の文は、法華經迹門しやくもんの肝要であり、天台仏法においては一代仏教の要かなめとし、一念三千法門の依処えしよとしたものであります。

本抄をいただいた最蓮房日淨さいれんぼうにちじやうは、もと天台宗の学僧といわれております。おそらく天台家における肝要の法門として「諸法実相」については知っていたのでありましょう。しかし、天台の理の法門では十分に理解することができず、大聖人に、その深い元意をうかがおうとして、質問したものだと思われれます。

答えて云く下地獄じごくより上仏界ぶつがいまでの十界じっかいの依正えしやうの当体・悉ことごとく一法ものこさず妙法蓮華經のすがたなりと云ふ經文なり

難解な「諸法実相」の意義を、明快にズバリと答えられております。

「諸法」とは、この現実世界のなかに、さまざまな姿をとってあらわれているいっさいの現象といつてよい。「実相」とは、文字どおり実の相であります。

「諸法実相」とは「諸法」がそのまま「実相」であるということ、したがって、大宇宙の千変万化の姿が、すべて、妙法蓮華經のあらわす姿であるということになります。

換言すれば、地獄界という世界すなわち依報も、地獄界に住する衆生つまり正報も、その生命の究極のすがたは妙法蓮華經である。餓鬼界の依報ならびに正報も、妙法蓮華經である。畜生界も、修羅界も、さらに菩薩、仏もみな同じである。これが「諸法実相」の意味するところなのであります。

また、諸法の実相とは、諸法のなかに実相が含まれるのでもなく、逆に実相のなかに諸法がつつまれるものでもないのです。さらには、諸法の奥底にあって、万象を統一する実体を立てるのでもないのです。

たとえば、西洋の哲学や仏法以外の宗教では、諸法の奥底に、諸法を離れて、真理や実体、本質を求めてきた。キリスト教の場合、宇宙森羅万象を統一する根源の実体を「唯一絶対神」と立て、諸法から遠く離れたかなたに、究極の真理をおいたのであります。その結果、神と人間、神と万象とのあいだに断絶が生じ、そのあいだにあって仲介する人間の権力や教会の力が大きくなり、ついに民衆を隷属させることとなったことは周知の事実であります。

これに対して、仏法の偉大性は、現実そのものに即して、真理を見いだすところにある。あくまで、現実の一個の人間や事物を徹底的に凝視して、そこに真実を発見するのであります。それゆえ、諸法実相は、森羅万象の個々の事物や人間に即して、その実相を洞察していく哲理なのであります。

諸法に即して実相、実相に即して諸法、という相即の関係にあるのが、諸法実相という哲理の不可

欠な観点であります。この関係を見誤ると、諸法実相はわかりません。

さて、大宇宙のいっさいの現象、つまり太陽や月が昇り、また地平のかなたに沈みゆくのも、大海の潮が満ち干するのも、木々が風に揺れ動くのも、その真実ありのままのすがたは、仏法の眼でみていくならば、ことごとく妙法蓮華經の所作なのであります。

この「諸法実相」の説法を爾前經と相對して申し上げれば、「諸法」という現象面だけにとらわれ、差別觀に陥ったのが爾前經でありました。この諸法つまり差別相が、その究極においてそのまま共通の妙法という実相であることを明かしたのが、法華經の「諸法実相」であります。

ここに「行布を存する爾前權教」と「円融の法華經」との相違がある。このことはまた、一切衆生が差別なく成仏しうるという、仏法の平等大慧の法理に通ずるのであります。

しかし、この法華經迹門の、ただ平等普遍の実相を知っただけでは、いまだ「理」であります。法理を知り、これを実践化したのが、本門の「事」の法門なのです。

これを理解するために、一つの考え方として、ニュートンの万有引力の法則を例にとってみたい。

万有引力の法則は、物理学の法則であり、そのまま結びつけて考えることはできませんが、宇宙を貫く一つの原理であることにちがいはない。ニュートンが発見するといなとにかかわらず、万有引力の法則はあり、それに従って万物は運動している。太陽や月、星の運行も、潮の干満も、リンゴが木から落ちるのも、物理学の眼でみるならば、いっさいが万有引力の法則に従っているのであります。法則を知らない人から見れば、たんにリンゴが熟れて地面に落ちたとししか見えないとしても、物理学の

眼から見るならば、その実相は、地球という物体とリングという物体の間に働く力関係であると映ったのでありましょう。

この法則は、それを知っている人にも、知らない人にも、平等に働いているものでありますが、すべてに働いているというだけであっては、まだ「理」にすぎない。万有引力の法則を知らないで、大空を飛ばうとしても、落ちるだけであります。また、それを知ったとしても、知っただけにとどまれば、それもまだ理の段階であります。その法則を知って活用するところに、飛行機や宇宙ロケットのような価値創造が生まれてくる。これを「事」といってもよいであります。

仏法の眼からみるならば、宇宙のいっさいの運行の、その真実の相は妙法蓮華經であります。凡夫の眼には、木々が揺れ動いているのみであつても、仏の眼には、妙法の妙なる旋律であり、太陽の輝きも、生命をはぐくむ妙法の働きの一分であります。

したがって、私ども一人ひとりの生命も、いっさい妙法によって構成され、妙法のリズムに従って活動しているといつてよい。ただし、そのことのみにとどまればまだ理であり、それを知らず、妙法に冥合することを知らない人は、あたかも万有引力の法則を知らずに空を飛ばうとして落ちる人のごとく、不幸から不幸へと、暗きから暗きへとおもむくのみであります。

また、たとえ諸法実相の哲理を知ったとしても、たんなる観照の哲学に終われば、それも理の範疇にとどまる。

それを希望の方向へと向け、価値創造し、幸福へと蘇生させていく方法として、日蓮大聖人は御本

尊を顯されたのであります。すなわち、諸法は実相であるとの法理を、日蓮大聖人の魂魄をとどめて御本尊という当体のうえに具現化されたのであります。それは、もはや諸法実相という法理ではない。日蓮大聖人の御本仏の生命それ自体の諸法実相であります。御本尊を「事の一念三千」と申し上げるゆえんは、ここにあるのであります。

ゆえに、諸法実相とは、一往は、諸法は、そのまま妙法蓮華經という真実のすがたであるという觀照の哲學のようでありますが、再往、文底觀心のうえからいえば、御本尊こそ諸法実相という大宇宙の縮図であり、大聖人の仏法においては、諸法実相とは即御本尊の異名なのであります。

妙法の一法において依報も正報も連続

依報えほうあるならば必ず正報住すべし、釈しゃくに云く「依報正報・常に妙經を宣ぶ」等云云

「依報あるならば必ず正報住すべし」とは、すこし疑問に思うところであります。それは、私どもは法華經の教えによって、正報が根本で、それに応じて依報があると理解しているからであります。したがって「正報住するならば依報あるべし」といわれるべきところのように思える。

この点についてかんたんに申し上げると、仏法においては、とくに爾前經にぜんきやうでは一貫して、十界は、

十種の異なる世界として説かれてまいりました。十界という言葉自体、十種の世界という意味であります。

これについては、ご承知のように、たとえば地獄界は地の下一千由旬のところにありとされた。また、餓鬼界は地の下五百由旬、畜生界は水・陸・空といわれる。修羅は海のほとり、海の底とされ、人は大地によって住し、天は宮殿といいますが、須弥山の山腹から頂上、さらにその上方の空というふうに考えられております。

以上の六道のほか、いわゆる四聖についても、二乗は方便土、菩薩は実報土、仏は寂光土と、それぞれ、別々の世界に住すると説かれてきたのであります。

このように、種々の依報が説かれるということは、当然そこに住する衆生も、種々に異なるということです。しよせん、住する衆生すなわち正報と、それぞれの国土すなわち依報とが一体になっているのが、生命の真実のあり方であります。すなわち、爾前經においては、十界とは世界観であった。法華經において初めて、依正不二の生命観としてとらえられたのであります。

「釈に云く」とあるのは、妙樂大師の法華文句記のことですが「依報正報・常に妙經を宣ぶ」とは、この十種の依報、正報の生命は、いずれも妙法蓮華經をあらわしている、ということでもあります。

すなわち仏法においては、依報、正報ともにその奥深いところでは断絶がないと教えている。依報が妙法蓮華經の当体であるとともに、正報もまた妙法蓮華經の当体なのであります。妙法蓮華經の一法において、依報も正報も連続しているのであります。

あえていえば、妙法の根源の一法が、一方において正報とあらわれ、それと同時に依報となつてあらわれているということでもあります。すなわち生命という次元において、依報も正報も結合しているのです。ゆえに、ここから正報の生命の變革が、依報の變革に通ずるという仏法の卓越した原理が生まれてくるのであります。

この依報、正報ということに関連して、理解の参考のために澤瀉久敬博士（おもとひさゆき）の論文を紹介しておきたい。それは環境と生物との関連についてふれたものであります。博士はこう述べておられます。

「ひととはともすれば一定不變の環境を考えそこへすべての生物は置かれていると考える。しかし人間には人間の環境があり、魚には魚の、また鳥には鳥の環境がある。そうして、人間各自にとって環境はそれぞれ異なるようにすべての生物には各自の環境がある。一言にして言えば環境は無数である。生物を離れて環境自体というようなものはどこにもない。生物が生物として次第に自己を生み出してゆくように、そうしてそれによってさまざまな生物がそれぞれ自己の形を明らかにしてくるように、環境もまた次第に生物から分離して環境となるとともに、それぞれの生物に対応するさまざまな環境として自己を示してくるのである」

博士はこのように、生物と環境とが対応していることを述べ、さらに、この対応した両者の根源をたずねれば、同じ「原始存在」という一つのものに帰着すると主張しておられます。これは生物の世界への鋭い觀察から結論づけられた真理であります。仏法で説く依正不二の原理の一つの証言であるとも考えられるのであります。

仏は架空の抽象的存在ではない

又云く「実相は必ず諸法・諸法は必ず十如十如は必ず十界十界は必ず身土」

同じく妙樂大師の金埤論こんぺいろんの文であります。一念三千の構成について述べたものといえます。

実相は、すでに述べたように常住じやうじゆうの本体——妙法蓮華經であり、これは一念三千の「一念」ということができます。「実相は必ず諸法」とは、この妙法蓮華經、常住の一念は、かならず万法としてあらわれてくるということです。

つぎに「諸法は必ず十如十如は必ず十界十界は必ず身土」の文は、諸法、森羅万象しんらかはんしやうの眞実の相、すなわち実相を、十如、十界、身土に分析して述べたものであります。

まず、十如は諸法、万象の共通面をあらわしています。いかなる法といえども、かならず十如という十の側面をもっているということであります。

十如とは、相さう、性しやう、体たい、力りき、作さ、因いん、縁えん、果か、報ほう、本末究竟等ほんまつくきやうとうです。

この十如をともなつて顯現けんげんする森羅万象、諸法は、またかならず、地獄界から仏界にいたる十界の範疇はんちゆうにおさめることができます。

これは、諸法を差別面からとらえたものであります。

たとえば、地獄界にも十如是がそなわっている、仏界にも十如是がそなわっている。このように、十界のいかなる界であろうと、すべて十如是がそなわっているというのが、諸法に即する真実のすがた、すなわち実相なのであります。

さらに「十界は必ず身土^{しんど}」——これは、十界のそれぞれの世界は、かならず、身（正報）と土（依報）のうえにあらわれるということです。つまり、依正不二の原理をあらわしております。

以上のことを具体的に申し上げれば、たとえば、私たちの生命を考えた場合、その真実の相は妙法蓮華經の当体であります。それは私たちの、日々生きているこの命を離れてあるものではない。朝起き、昼働き、夜眠る。その「諸法」のなかに「実相」はあるのであります。妙法は幽霊のようなものではなく、実在するものであります。「実相は必ず諸法」なのであります。

また「諸法は必ず十如」についていえば、瞬間瞬間、動いている生命には、十如是がそなわっているということであり、生命といっても、如是相のない生命はない。このなかにも「私には如是相はありません」という人はいないはずであります。かならず顔があり、形がある。また如是性もある。石のように、存在しているだけということはない。いな、石でさえも如是性はある。如是体についても同じであります。

また、如是力、作、因、縁、果、報、すべてをそなえております。だれびとにも、その人でなければもっていない「力」がある。そして、それを周囲に及ぼしていく「作用」ももっているのであります。

自己のなかにある「因」、外界との関係である「縁」、そして、それらがもたらす生命内在の「果」、外界にあらわれる「報」と、いっさいを私たちはもっております。さらに、最初の相から終わりの報にいたるまで、一貫して等しい生命活動を展開している。これが本末究竟して等しいということです。

したがって、実相といっても、諸法、また十如をそなえていなければ、実相ではなく虚相といわざるをえない。たとえば、爾前経で説かれている仏にしても、大日如来などは、十如是がありません。だいいち如是相がない。いまだかつて、大日如来にお目にかかった方は、だれ一人いないはずです。相、性、体をそなえていない仏に、衆生を救う力や作用もあるわけがない。これはキリスト教のゴッドやイスラム教のアラーにしても同じであります。

本来、それらは、形あるものとしてあらわれるべきではないという考え方に立っているのであります。しょうが、諸法や十如のない実相はないというのが、法華経の主張であります。

釈尊にしても實在の人物であるし、日蓮大聖人は、現実社会の真ただ中で、人々の苦しみを分かちながら戦われ、御自身の悟りの境界を、全人類に本末究竟して等しく与えていこうとされた御本仏であります。

仏とは、また実相とは、けっして架空の抽象存在ではなく、諸法、十如を厳然とそなえるものであるということを強調しておきます。

「十如は必ず十界」——十如といっても、私たちの苦しみや喜びといった境涯と、けっして無縁のも

のではないということです。かならず十界のいずれかにあらわれてくる。逆にいえば、地獄界にも仏界にも、十如はあるということです。いままでは御本尊を知らず、苦しみの因、縁、果、報であった。そしてその人の生命も地獄の力、作であった。当然、その相、性、体は地獄でありましょう。喜びに満ちみちているのに、顔だけは恐ろしい形相で、ということもないし、悲しくてしようがないのに、顔だけは大口をあけて笑っている、などという手品みたいなことはできません。そのように本末究竟して地獄にいた人が、御本尊をたもって、幸福へ、喜びの人生へと変わっていく。因、縁、果、報も、如是力、如是作も、相、性、体も、ぜんぶ仏界に近づいていくのであります。ですから、如是相も福々しくなっていて、如是性も優しくゆうゆうとした境涯になっていき、家庭をしつかりと支えていく如是力、如是作となり、因、縁、果、報が、幸福へ幸福へと転回していく。どうか、そういう十如是の人生になっていくってください。

そして最後に「十界は必ず身土」、その十界は、わが身とわが土にかならずあらわれるということがあります。地獄界の生命であれば、その身もその土も地獄界である。逆に、仏界の人の身も土も、仏界となっていく。そこに人間革命の意義がある。御本尊を持っているのに、家庭はめっちゃくちゃ、隣近所のことも関係なし、というのでは「十界は必ず身土」にならない。皆さん方一人ひとりが、わが家を笑いさざめく金の城のごとくに築き、地域社会に清水のごとき潤いをもたらししていくとき、大きくは世界という土を仏国にしていくことが可能でありましょう。またそうなっていたきたい。それが「十界は必ず身土」ということであります。

さらに、日蓮大聖人の文底仏法から、この文を読むとき、三大秘法の御本尊それ自体をあらわしているのがあります。

諸法とは、これまで述べてきたように、十界三千の諸法です。それが大御本尊にそのまま実相として縮図されているのであります。

すなわち、十界三千の諸法が、南無妙法蓮華經の一法に具足した姿、これが御本尊の相貌であり、諸法実相なのです。具体的にいえば、中央の「南無妙法蓮華經 日蓮」が、十界三千の諸法の実相です。左右の十界は、大聖人已心の十界であり、南無妙法蓮華經の光明に照らされた十界の生命活動をあらわしています。

まず、左右両側の上のほうに釈迦牟尼仏と多宝如来とありますが、これは仏界をあらわし、同時に、御本仏の脇士となっており、その両わきには、上行、無辺行、浄行、安立行の四菩薩がしたためられています。これは菩薩界をあらわしている。それから、舍利弗、迦葉等は縁覚界と声聞界、大梵天王、帝釈天王、大日天王、大月天王、第六天の魔王等は天界、転輪聖王等は人界、阿修羅王等は修羅界、竜女等は畜生界、そして鬼子母神、十羅刹女等は餓鬼界、最後に提婆達多等は地獄界です。これらの十界の諸法に「必ず十如」を具していることはいうまでもありません。

さて、その十界が「必ず身土」とは、もったいなくも御本尊という一つの草木の掛け軸（身）になり、御本尊がましますところ、たとえば仏壇などは「土」にあたると考えられます。

又云く「阿鼻あびの依正は全く極聖ごくしょうの自心に処し、毘盧びるの身土は凡下ぼんげの一念を逾こえず」云云

同じく金埤論こんぺいろんの文であります。

無間地獄といつても、その世界も衆生もまったく「極聖」——仏の自心、本然ほんねんの生命のなかにある。逆に「毘盧」すなわち仏の尊極そんごくの生命もまた、身、土ともに、凡夫の一念の外にあるものではない。十界互具の原理を、地獄界と仏界を代表として示したものであります。「極聖の自心」も妙法蓮華經であり、「凡下の一念」も妙法蓮華經であるがゆえに、仏の生命に無間地獄もそなわり、凡夫の一念に仏の生命が具足する、と拝すべきでありましょう。

釈迦、多宝も妙法の力用の表現

此等の釈義しゃくぎ分明ぶんめいなり誰か疑網ぎもうを生ぜんや、されば法界のすがた妙法蓮華經の五字にかはる事なし、釈迦多宝の二仏と云うも妙法等の五字より用の利益りやくを施し給ふ時・事相に二仏と顕けんれて宝塔とうの中にして・うなづき合い給ふ

以上の妙樂大師の言葉の意味するところは明確であり、疑問をさしはさむ余地はない。したがって「諸法実相」の意義は、十法界の姿が妙法蓮華經であるということ、これを明かしたところに存するのである、とのおおせであります。

法華經は、この真理を、あるいは法説し、あるいは譬喩説し、あるいは因縁によって説いて、在世の聲聞の弟子たちを得脱せしめたのち、滅後の未来のため、多宝の塔が湧現し、虚空会の壮大な儀式が展開されていきます。「釈迦多宝の二仏と云うも」うんぬんの文は、この本門の虚空会において、多宝塔中に釈迦、多宝の二仏が並座しますが、そこにあらわされたものも、しょせんは妙法蓮華經にほかならないということです。

この御文は、ひじょうに深い含蓄のある表現になっています。一つは、釈迦、多宝の二仏といっても、妙法蓮華經の一法が衆生を利益するその働きを、具体的な仏という形によってあらわしたのであるということです。これはこのあとにでてくる「仏は用の三身にして迹仏なり」に対応するもので、經文に説かれる莊嚴な仏も、結局は、大宇宙に遍満する仏界という妙法蓮華經の働きを表現したものであるということです。

したがって、仏と同じく、十界すべて、妙法蓮華經のあらわす生命の働きであるというのが、ここにおおせの元意なのであります。

もう一つは「宝塔の中にして（釈迦、多宝の二仏が）うなづき合い給ふ」とあるように、虚空会の儀式によって、釈迦、多宝の二仏が説きあらわした法とは、妙法蓮華經であるということです。釈迦が

説き、多宝が合意し証明したことを「うなづき合い給ふ」とおおせられています。

こうした宝塔の儀式がなにをあらわしたものであるかについて、戸田先生はつぎのように講義をしています。

「釈迦は宝塔の儀式を以て、己心の十界互具一念三千を表しているのである。日蓮大聖人は、同じく宝塔の儀式を借りて、じゅうりょうもんていげしゆ寿量文底下種の法門を一幅の御本尊として建立されたのである。されば御本尊は釈迦仏の宝塔の儀式を借りてこそ居ゐれ、大聖人已心の十界互具一念三千——本仏の御生命である。この御本尊は御本仏の永遠の生命を御ご図ず顕けん遊ゆばされたので、末法唯一無二ゆいいつむにの即身成仏の大御本尊であらせられる」と。

末法の御本仏を宣言

かくの如き等の法門・日蓮を除きては申し出いす人一人いちにんもあるべからず、天台・妙楽・伝教等は心には知り給へども言に出し給ふまではなし・胸の中にしてくらし給へり、其れも道理なり、付みぞく属ぞくなきが故に・時のいまだ・いたらざる故に・仏の久遠くおんの弟子にあらざる故に、地涌じゆの菩薩ぼさつの中の上首唱導しょうどう・上行じやうぎやう・無辺行等の菩薩より外ほかは、末法の始の五百年に出現して法体の妙法蓮華經の五字を弘め給うのみならず、宝塔の中の二仏並座ひやうざの儀式を作り顕あらわすべき人なし、是れ

迹門方便品の諸法実相も、本門の虚空会の儀式も妙法蓮華經をあらわしているものであるということ
は、いまだかつて、だれもいったことがない。日蓮大聖人が、初めて述べられるのである、というこ
とです。

しかし、そこに法華經の元意があったがゆえに、天台、妙樂、伝教等の、法華經をほんとうに読み
きった人々は、内心では知っていたことは当然です。したがって「天台・妙樂・伝教等は心には知り
給へども言に出し給ふまではなし・胸の中にしてくらし給へり」といわれているのです。

では、なぜ天台、妙樂、伝教等は、心のなかでは知りながら、言葉にだしていわなかったか。言葉
にだしていわなかったということは、人々に教えることをしなかったわけです。それをしなかった理
由として、大聖人はここで三つあげられている。

一つは「付屬なきが故」です。付嘱とは、仏から使命を託されることであります。法華經の会座に
おいて、釈尊は、法華經の肝心の法門を弘通する使命を、本化地涌の菩薩に託した。ところが天台、
妙樂、伝教等は、その本地は迹化の菩薩である。ゆえに、その使命を受けていない、ということであ
ります。

第二は「時のいまだ・いたらざる故」であります。この法華經の肝心の法門が弘通されるべき時は、
藥王品にも「我が滅度の後、後の五百歳の中に、閻浮提に広宣流布して」とあるように、第五の五百

歳、末法の時代であります。

時とは、端的にいうならば、客観的条件のもっとも深い底流をなすものであります。委細に三世を知る仏にしてはじめて、この正しい時を知ることが出来るがゆえに、仏は明確にこの妙法を弘めるべき時を定めたといえましょう。だが、天台、妙楽、伝教等の出現した時代は、五の五百歳の区分のなかでは、第四の五百歳であつた。したがって、これらの人々は、法華經の肝心たる妙法を、言葉にだし、人に教えることをしなかつたのであります。

第三は「仏の久遠の弟子にあらざる故」であります。仏の久遠の弟子ということとは、師弟不二の原理からいって、仏と同じ心、等しい悟りの境地にあるということであり、經文にあらわれた地涌の菩薩は、この久遠元初の仏の弟子が、妙法流布のため、その付囑のため、垂迹して現じた姿であります。

仏の悟りの極理である妙法を説き、弘めるためには、みずからその悟りを得、仏と等しい境地にもともと住している人でなくてはならない。妙法を説き弘めることは「如来の使いとして、如来の事を

行ずる」ことになるのであります。

広宣流布の付囑は地涌の菩薩に

これに関連して一言、本化の菩薩と迹化の菩薩の關係について述べておきたい。

本化とは、いうまでもなく地涌の菩薩であります。この地涌の菩薩の住処について、法華經には「大地の下の中」と説き、天台はそこを「法性の淵底玄宗の極地」と表現しておりますが、日蓮大聖人は、さらに明確に「南無妙法蓮華經」であると示されております。すなわち、南無妙法蓮華經をわが生命と覚知し、南無妙法蓮華經の流布を自己の使命とし、本分としてるのが地涌の菩薩であります。

これに対して、迹化の菩薩とは、文殊、弥勒、藥王、普賢、観音、妙音等の諸菩薩であります。これらの菩薩たちは、社会の動向を察知する力で人々に利益をもたらし、妙なる音楽で心を喜ばし、慈愛の心をもって人々に尽くし、医学の力をもって病苦を除く等、その特性をぞんぶんに発揮して、人のために働く菩薩たちであります。

ゆえに世間においても、真に慈悲の精神に立って、おのおのの社会的立場にあつて、またその能力を発揮して人々のため、社会のために尽くす人は、迹化の菩薩の一分にあたるといってよいであります。しかしながら、南無妙法蓮華經という法体を弘めることによって、人々のために尽くしている人は、世間にはどこにもおりません。

なぜかならば、この仏法の流布こそ、地涌の菩薩の本分であるからであります。釈尊が法華經において、迹化の菩薩たちが滅後の弘經を誓うその誓いを「止みね善男子」と一言のもとに止めて、わざわざ地涌の菩薩を召しだし、付嘱をなしたわけも、この一点にあります。南無妙法蓮華經という根源の一法をもって、人々のため、社会のために尽くしていくことができるのは、本化地涌の菩薩のみ

であり、またそれこそ、末法の根本の実践なのであります。

したがって、私たちは、あくまでも南無妙法蓮華經に生きぬくことを本分とし、その流布をみずからの「この世の使命」と定めたうえに、社会のあらゆる分野において活躍していくならば、その活動は迹化と同じようであっても、その根本は総じての地涌の菩薩であります。

だが、反対に南無妙法蓮華經の根本を忘れてしまったならば、迹化の菩薩にとどまることすらできず、自己の才能や名声に酔い、日々生活におぼれて、三惡道、四惡趣あくしよの境界におちていくことでありましょう。

ゆえに深く探求していけば、広宣流布に励む同志は、あるいは一学生であれ、一主婦であれ、一学者であれ、一サラリーマンであれ、みな地涌の菩薩の眷屬が、それぞれの世界へと勇躍出現した姿であります。

たんに、一主婦が、一学生が、たまたまその悩みを解決するために信仰しているという自覚しかなければ、それはまだ一歩浅いところを彷徨ほうこうしている段階であるといわざるをえない。

われわれの奥底の一念——それは、地涌の菩薩の使命に立って、御本尊と、日蓮正宗創価学会と、広宣流布とにおくべきであると、申し上げておきたいのであります。

さて、天台、妙楽、伝教等が以上の三つの条件を欠くゆえに、法華經の肝心の法を説き弘めることができなかったのに対し、一往、地涌の菩薩として、再往、無作三身の仏むきさんじんとしての日蓮大聖人が、それをなすことができるというのが、つぎの文であります。

「地涌の菩薩の中の上首唱導・上行・無辺行等の菩薩」という文は、さきの「付属なきが故」に対応しておおせです。と同時に、この地涌の菩薩について涌出品ゆじゅつぽんで「我久遠より来このかた是等の衆を教化きやうけす」と示されている元意に照らすならば、「仏の久遠の弟子にあらざる故」にも対応していることは明らかであります。

また「末法の始の五百年に出現して」とは、「時のいまだ・いたらざる故」の文に対応していることも、いうまでもありません。日蓮大聖人のお振る舞いは、さきに示した三つの条件がすべて満たされたうえのことである、とおおせなのであります。

「本門の本尊」御図顕に出世の本懐

「法体ほつたいの妙法蓮華經の五字を弘め給うのみならず、宝塔の中の二仏並座ひようざの儀式を作り顕あらわすべき人なし」——この御文のなかに、本門の題目と本門の本尊を示されておりす。

「法体の妙法蓮華經を弘め給う」が、本門の題目を弘通くつうされていることでもあります。「宝塔の中の二仏並座の儀式を作り顕す」は、本門の御本尊を建立されることでもあります。

もし、大聖人が、たんに「南無妙法蓮華經」の題目流布のみをもって、本懐とされたとするならば「妙法蓮華經の五字を弘め給うのみならず、宝塔の中の二仏並座の儀式を作り顕す」とはいわれなかったであります。

むしろ「宝塔の中の二仏並座の儀式」すなわち御本尊を顕されたところにこそ、日蓮大聖人の出世の御本意があったことは、この文に明確にうかがわれるのであります。

ともあれ、この題目、御本尊をあらわし弘めることは、地涌の菩薩の上首上行等にしかできないことである。そのゆえは、これが本門寿量品の事の一念三千の法門だからであるとおおせです。迹化の菩薩は迹門の法門は弘めることができる。しかし、本門寿量品の事の一念三千は、本化の菩薩でなければならぬのです。

迹門の法は迹化の人、本門の法は本化の人でなくてはならないのであります。

この「地涌の菩薩の中の上首唱導・上行・無辺行等の菩薩」とは、日蓮大聖人御自身のことであり、人本尊をあらわします。また「本門寿量品の事の一念三千」とは、法本尊のことであり、人法一箇をあらわしております。

大聖人につらなる私どももまた、もともと末法の独一本門の南無妙法蓮華經に徹する使命をもって生まれてきたのであります。

ともかく釈尊も天台も伝教も、すべて帰着するところは妙法の大地であり、それら先人の出現はすべて日蓮大聖人の御出現の序曲であった。いにしえの先人たちが、生涯を賭けて求めぬいた一法が御本尊なのであります。

私どもは、いま大聖人の世界最高の太陽の哲理をもっている。ともあれ、光輝あるこの世の使命への自覚を新たにしたいのであります。

「神通之力」とは御本尊の働き

されば釈迦・多宝の二仏と云うも用の仏なり、妙法蓮華經こそ本仏にては御座候へ、經に云く「如来秘密神通之力」是なり、如来秘密は体の三身にして本仏なり、神通之力は用の三身にしておしむるなり、
て迹仏ぞかし

妙法蓮華經すなわち南無妙法蓮華經が、仏の生命の常住不滅の体であり、釈迦、多宝の二仏といつても、この南無妙法蓮華經という体があらわす働きにほかならない、とのおおせであります。

体は「本体」、用は「働き」であります。まさしく御本尊のお姿であります。御本尊における釈迦、多宝は「南無妙法蓮華經 日蓮」と中央におしたための脇士となっており、妙法の用の仏として位置づけられております。釈迦、多宝といえども、またあらゆる十方三世の諸仏といえども、妙法の働きであります。

南無妙法蓮華經とは、日蓮大聖人の御生命そのものであり、ゆえに大聖人は、十方三世の諸仏を動かしていく当体であられる。私どもも御本尊を受持することによって、あらゆる仏、菩薩を動かしていくことができるのです。なんと私どもには、偉大な境涯の海が開けていることでありましょうか。

ほんとうの信力、行力を貫いていけば、当体義抄文段に「我等、妙法信受の力用^{りきよう}に依って即蓮祖大聖人と顯るるなり」とあるごとく、大聖人の生命が渾々^{こんこん}とわいてくるのであります。

また本とは「本地^{ほんぢ}」で、本来の境地をいい、迹^{しやく}は「垂迹^{すいしやく}」で、影として映った姿をいいます。これを、もう少しわかりやすくいうと、本迹について天台大師は、天月と池月をもって示しております。空に輝いているほんものの月が「本」で、池の水面に映った月影が「迹」であるというのであります。

考えてみると、影は、池だけに映るわけではない。海の水面にも映りますし、湯飲みの茶の面にも映ります。ガラスの面にも映ります。すなわち、十分に光を反射するなめらかな面であれば、そこにはっきりとした影を映すことができます。こうした光を十分に反射する面は、現代的に言えば、スクリーンと呼ぶことができます。

したがって、法華經本門において、仏の本地を久遠実成^{くおんじつじょう}と明かしたということは、久遠五百塵点劫^{じんてんてう}成道の仏身が本地で、それ以前の始成正覚^{しじょうしやうかく}の釈尊は、当時のインド社会というスクリーンに映った影となるのであります。さらに、地涌の菩薩が、本地・久遠元初^{くおんげんじよ}の自受用報身如来^{じじゆうほうしんにょらい}であるということとは、久遠元初の仏が、法華經の儀式というスクリーンのうえに映した一つの影ということになるのであります。

地涌の菩薩ばかりでなく、釈迦、多宝の二仏も、久遠元初の自受用報身即南無妙法蓮華經という本地の仏が、虚空会^{こくうかい}の儀式のうえに映し、あらわした影である、とのおおせであります。

これを、立場は違いますが私どもの生命に約していえば（約すとは、立場からという意義）、私どもはさまざまな社会をスクリーンとして、さまざまな姿に影を映しております。家庭というスクリーンでは、一家の長という姿、会社というスクリーンでは、たとえば課長、学会の組織というスクリーンでは大ブロック長、国際社会というスクリーンでは日本人という影、そして生物の世界をスクリーンとしては、一個の人間という影を映しているといえる。

これらは「影」であるゆえに、スクリーンが揺れれば、影も揺れる。スクリーンはそのままでも、やがて消える影もあります。学生という影は、卒業によって消えるのであります。

では、消えないで、永続していく本体はいかなるものか。人間の過ちの根本は、かりにあらわれているにすぎない影を、みずからの不変の体であるかのごとく錯覚（さくかく）してしまうところにあるといっても過言ではないでしょう。さきにあげたうち、人間であるということは、比較的根元に近いし、生き、行動していくうえで忘れてはならない原点であります。

だが、それすら、より深く考えれば、生死流転（しやうじゐてん）する無常の存在にすぎない。ゆえに、この生老病死（しやうろうびやうし）という流転、変貌（へんぼう）の人間存在をみつめ、生死を超えて常住（じやうじゆう）の自己の真実の姿を見いだそうとしたのが、仏教なのであります。そして、結論的にいえば、南無妙法蓮華経こそ、真の常住不滅の体であり、それが自己はもとより宇宙万物の実相であると究め（きわ）め尽くしたのであります。

ゆえに、妙法蓮華経こそ「本仏」、それに対して、釈迦、多宝の二仏は「用の仏」「迹仏（しやくぶつ）」であるとおおせられるのであります。

つぎに「經に云く」と、寿量品の文をあげられております。「如来秘密」の「神通之力」で、「如来秘密」が体の三身をあらわし、これは本仏にあたる。「神通之力」は用の三身をあらわし、迹仏である、と。

いずれについても「三身」ということをいわれるのは、もとより、天台の「一身即三身なるを名けて秘と為し、三身即一身なるを名けて密と為す」との釈をうけておられるからであります。

この經文を文底から読めば、如来とは南無妙法蓮華經如来のことであり、秘密とは内緒にしておくということではなく、「三大秘法抄」に説かれているごとく、寿量文底の大御本尊そのものであります。神通之力とは、この南無妙法蓮華經如来、即御本尊の働きであります。

「神通之力」を用の三身とすることについても、天台の文句につきのようにあります。

「神通之力とは三身の用なり。神は是れ天然不動の理、即ち法性身なり。通は無壅不思議の慧、即ち報身なり。力は是れ幹用自在、即ち応身なり」——すなわち「神」は法身、「通」は報身、「力」は応身で、用の三身となるのであります。

「凡夫こそ本仏」と断言

凡夫は体の三身にして本仏ぞかし、仏は用の三身にして迹仏なり、然れば釈迦仏は我れ等衆生

のためには主師親^{しゅししん}の三徳を備へ給うと思ひしに、さにては候はず返つて仏に三徳をかふらせ奉るは凡夫なり

凡夫があくまでも「本仏」である。これに対して、釈迦仏をはじめ、經文に説かれるあらゆる仏は、妙法蓮華經の働きとしての「迹仏」にすぎない、ということであります。法華經の道理からいえば当然のことではありますが、それをこのように明確にいいきり、凡夫こそ本仏なりと断ぜられたところに、日蓮大聖人の教えが、末法万年の未来に投じた、不滅の力用と光明があるのであります。

ここに、凡夫とおおせられたのは、別して日蓮大聖人の御事であり、日蓮大聖人が御本仏であられることを示されております。

「御義口伝」に「末法の仏とは凡夫なり凡夫僧なり、……仏とも云われ又凡夫僧とも云わるるなり」(御書全集七六六頁)とあるとおりであります。

ともに、総じて私どもは、当然、凡夫であります。その凡夫が、もっとも尊く、偉大であることを、日蓮大聖人が、みずから凡夫の姿を示してお説きくださっているのであります。

あくまでも、日蓮大聖人の仏法は、人間が中心であります。

「御義口伝」上の方便品「唯^{ゆい}以^い一^{いち}大^{だい}事^じ因^{いん}縁^{ねん}の事^{こと}」に、法華文句を引用して「衆生に此の機有つて仏を感ず故に名けて因と為す、仏機を承^うけて而^{しか}も応ず故に名けて縁となす」(御書全集七一六頁)とおおせのごとく、大聖人の御出現自体、苦悩の衆生があつたればこそであります。

御本尊の威光勢力、福德も、迷える凡夫がいたればこそであります。また、その偉大な仏法を流布していくのも、社会の荒波にもまれながら戦う勇氣ある人々がいるからこそできるのであります。

過去のあらゆる宗教において、究極的に尊嚴であるとされたのは、神であり、超人格者としての仏でありました。人間の尊さは、この神の恩寵おんちゆうと、仏の慈愛につつまれているという条件のもとに、はじめて認められるものであったのです。

ゆえに、過去の宗教のほとんどは、神あるいは仏に直接仕える人々を特権的存在とし、世俗の間、一般庶民を卑ひしい存在としたのであります。さらに、世俗の人々についても権力者は特別の恩寵をうけるとして、王權神授説おうけんしんじゆせつのもとに、階級構造に宗教的權威を付し、これを固定化する結果となりました。

したがって、いずれの社会においても、民主化の過程は、即、宗教否定、宗教の無力化の過程でもあったのであります。

しかしながら、宗教の喪失そうしつ、信仰の消滅がもたらしたものは、人間精神の不安定であり、人間的信頼きずなの弱体化でもあった。このため、再び宗教的信仰の復活が心ある識者によって叫ばれはじめているのが、二十世紀後半の現代の状況でもあります。

だが、過去の宗教を復興することが、問題の解決につながるものでないことは、この歴史の推移をみれば明らかであります。

人間自身を妙法の当体として、いかなる人も尊嚴なる仏になることができるとする、日蓮大聖人の

仏法こそ、人類の求めはじめている問題に、真っ向から答えた大宗教なのであります。

西欧において、ある近代思想家は「神が人間をつくった」という聖書の教えに反対し、「人間が神をつくったのだ」と叫んだとききます。いま日蓮大聖人が「釈迦仏がわれら凡夫のために主師親三徳をそなえていると思っていたらそうではない。仏に三徳をこうむらせたのは、われわれ人間なのである」と断言されているのは、さらに近代的であり、革新的思想というべきではないでしょうか。

この一事をもっとしても、日蓮大聖人の仏法が、人間不平等の基盤となった過去のあらゆる宗教と一線を画する、未来永久に人類が根本としていくべき偉大な宗教であることを、強く信じきっていただきたいのであります。

迷いを悟りに転ずるのは「信」

其の故は如来と云うは天台の釈しやくに「如来とは十方三世の諸仏・二仏・三仏・本仏・迹仏の通号つうごうなり」と判じ給へり、此の釈に本仏と云うは凡夫なり迹仏と云ふは仏なり、然しかれども迷悟めいごの不同しやうぶつにして生仏しやうぶつ・異なるに依よって俱体くたい・俱用くゆうの三身と云ふ事をば衆生しらざるなり

天台大師の法華ほつげもんぐ文句の文をあげておられます。寿量品の「如来寿量」の「如来」を釈したもので、

この如来とは、十方三世の諸仏、二仏、三仏、本仏、迹仏の通号である、と。二仏とは、真仏と応仏^{おうぶつ}で、真仏とは、ありのままの仏、応仏とは、衆生救済のために応現^{おうげん}した仏ということでもあります。三仏とは、法身^{ほっしん}、報身^{ほうしん}、応身^{おうじん}の仏ということです。

如来とは、仏という意味であり、哲学的にいえば「如如^{にょにょ}として来る」ということで、瞬間瞬間の生命を、如来ともいい、仏ともいうのであります。

この生きている、瞬間瞬間の生命——それは、仏像でも絵像でもない。大宇宙の生命の律動を一点に凝縮^{ぎようしゆく}させつつ、現に発動している生命そのもの、これが如来なのであります。

南無妙法蓮華經如来とは、南無妙法蓮華經という元初の大生命を、瞬間瞬間に湧現^{ゆうげん}している仏のこととであります。

如来とは、一般的にいつて、仏の通号であり、それは、なにも釈尊一人ではない。經文には、迦葉^{かじやう}仏、阿閼^{あしやくどつ}仏等、たくさんの仏がでてきます。だが、別しては、久遠元初の自受用身如来のことをいうのであります。

さて、ここでこの釈を引かれた元意は、本仏、迹仏という点にあります。

「此の釈に本仏と云うは凡夫なり迹仏と云ふは仏なり」とおおせのように、凡夫が本仏であり、經文に説かれた仏は迹仏にすぎない、というのであります。

いま、この本仏、迹仏ということを、寿量品に即して考えれば、このように大聖人がいわれた意味は、おのずから明らかであります。

すなわち、寿量品では、釈尊が、インドに^{おうたん}應誕してはじめて成道した、いわゆる^{しじょうしょうかく}始成正覺の仏ではなく、じつは^{くおんごひやくじんでんどう}久遠五百塵点劫の昔に成道したのであると明かします。そして、この久遠成道の仏を「本仏」とすることは、ごぞんじのとおりであります。

してみると、釈尊は、インドに^{おうたん}應誕して、三十にして成道する以前、すなわち凡夫であったときも、仏であったことはまちがいない。むしろ、三十で成道したという仏としての姿こそ、かりに示した「迹」の仏といわなければならない。さらに、寿量文底の^{こころ}意でいえば、五百塵点劫で成道した仏というのも「迹」の仏であります。

「御義口伝」の「第一南無妙法蓮華經如来寿量品第十六の事」に「^{そつ}惣じて^{たぐやく}伏惑を以て寿量品の^{ごく}極とせず唯凡夫の当体^{ほんね}本有の^{さま}儘を此の品の^{ごくり}極理と心得^{こころうけ}可きなり、無作の三身の所作^{しよさ}は何物ぞと云う時南無妙法蓮華經なり」(御書全集七五二頁)とありますごとく、凡夫の当体、本有のまま、南無妙法蓮華經如来であられるのが、御本仏であられます。

ゆえに「本仏と云うは凡夫なり迹仏と云ふは仏なり」とおおせなのであります。

しかしながら、同じく凡夫といっても、衆生と仏とのあいだには、^{きと}厳然として相違がある。それは、^{きと}悟っているのと迷っているのとの違いである。「悟るを仏、迷うを凡夫」ということであります。もうすこし^{きと}厳密にいえば、悟っている凡夫が仏であり、迷っている凡夫が衆生ということになります。

日蓮大聖人は、御自身、南無妙法蓮華經の当体であられることを悟られている。私どもは迷いの凡夫であります。

この「迷い」を「悟り」へと転ずるものは何か、それは「信」の一字であります。

「俱体・俱用の三身と云ふ事をば衆生しらざるなり」とは、さきの御文に「凡夫は体の三身にして本仏ぞかし、仏は用の三身にして迹仏なり」とあったのと関連しております。

迷っている凡夫は、自身がじつは仏であると知らないために、經文等に説かれている仏がほんとうの仏だと思いこんでいる。したがって、凡夫が総じての体の三身の仏であり、「俱体・俱用の三身」であるということを知らないのであります。

この「俱体・俱用」ということではありますが、これは、体とともにかならず働きがあり、働きとともに体があるということであります。

仏法でいう「体」とは、「体」だけであるものではなく、かならず「用」をともなっているのです。 「用」を取り払って「体」だけ取り出すことはできないのであります。

たとえば、池田大作という「体」は、池田大作という所作しよさにしかあらわれないし、またその所作は、ぜんぶ池田大作という「体」の表現なのであります。

南無妙法蓮華經という「体」は、森羅三千しんろさんぜんの「用」をともなっております。

ゆえに、私どもが、南無妙法蓮華經という大生命をば、わが胸中に顕現けんげんしていくならば、いっさいを動かし、いっさいを働かせていくことができますのであります。

この俱体・俱用の「体」とは、諸法実相の「実相」ということであり、「用」とは「諸法」にあたります。

一切の衆生が妙法の当体

さてこそ諸法と十界を挙げて実相とは説かれて候へ、実相と云うは妙法蓮華經の異名なり・諸法は妙法蓮華經と云う事なり

したがって、凡夫の当体がそのまま妙法蓮華經であることを明らかにするために、諸法という言葉によって十界を示し、その諸法、すなわち十界の依正の当体が、そのまま実相であると説かれたのであるということであります。そして、実相とは妙法蓮華經の異名でありますから、諸法すなわち十界の依正の当体、ことごとく一法ものこさず妙法蓮華經のすがたなりということになるのであります。

地獄は地獄のすがたを見せたるが実の相なり、餓鬼と変ぜば地獄の実のすがたには非ず、仏は仏のすがた凡夫は凡夫のすがた、万法の当体のすがたが妙法蓮華經の当体なりと云ふ事を諸法実相とは申すなり

地獄は地獄のすがたそのままが実の相、実相であります。餓鬼と変じたならば、もはや地獄の実のすがたではない。仏は仏のすがた、凡夫は凡夫のすがた等々、万法の当体そのままのすがたが実相であり、妙法蓮華經であるということを「諸法実相」というのであります。

これは、過去の仏法觀を根底から打ち破るものといわなければならない。従来、仏教の思想は、仏や菩薩、あるいは二乗のみを尊しとして、他の衆生、とくに地獄、餓鬼、畜生にいたっては、卑しむべきもの、忌むべきものとして理解されてきました。そのあらわれが、餓鬼や畜生の名称が人を蔑んで呼ぶ名や、罵る場合に使われてきたという事実であります。

もっと現実的、社会的場面でいえば、貧窮し、みじめな生活を余儀なくされている人々を卑しみ、忌みきらう、冷酷な風潮を生みだしてきたことも否定できません。

法華經の「諸法実相」の原理は、これを真に向から打ち砕いて、地獄、餓鬼、畜生等の衆生も、仏、菩薩も、等しく妙法の当体であり、平等に尊極の存在であると説いたのであります。

さらに、仏法の真髓は、地獄、餓鬼、畜生等の九界の生命をいかにすれば、尊極の存在とすることができるといふ方途も説いているのであります。御本尊におしたための九界の衆生は、ことごとく妙法の光に照らされて、本有の尊形となっておりす。

この御本尊と私どもの生命が境智冥合すれば、仏界所具の地獄界、仏界所具の餓鬼界として、ゆうゆうと九界の生命を自在に操縦していくことができますのであります。

当然、悲しみも、苦しみも、欲望もある。それでありながら、それは仏界という大海の上にわき立

つ波として、最高の人間らしい生活をいろどる働きとなつてくるのであります。

ゆえに「諸法実相」を事実のうえで明言できるのは、御本尊を建立された日蓮大聖人の仏法にしまして、はじめてできうることなのであります。

実相の究極は南無妙法蓮華經

天台云く「実相の深理^{じんりほんぬ}本有の妙法蓮華經」と云云、此の釈の意^{こころ}は実相の名言^{みようごん}は迹門に主^{ぬし}づけ本有の妙法蓮華經と云うは本門の上の法門なり、此の釈能く能く心中に案じさせ給へ候へ

迹門方便品に「実相」の名で示されたものの本体は、本門寿量品にあらわれた妙法蓮華經にほかならないということを、天台の釈をあげて裏づけられたところであります。

「此の釈能く能く心中に案じさせ給へ候へ」とおおせのように、これは法華經の根本義にかかわる深い法門であります。というのは、天台は明確にはいつておりませんが、この釈を大聖人の觀心のうえで読めば、実相の究極はなにかといえ、寿量文底の南無妙法蓮華經を示しているからであります。

一往、法華經の經文の流れをみますと、法華經は、一切衆生の成仏のカギとなる、三世諸仏の悟^{さと}りの法を明かそうとしたのであります。方便品のはじめに「諸仏智慧甚深無量^{しよぶつちえじんじんむりやう}」とあるのがそれであ

り、方便品に示されたその法の内容が「諸法実相・十如是」だったのであります。

ゆえに、声聞しやうもんの弟子のなかでも智慧ちゐ第一と称せられた舍利弗しゃりふつは、ただこの「諸法実相」の説法で得脱とくだつし、他の中根、下根の声聞たちも、その後の譬喩説ひゆせつ、因縁説いんねんによって、つぎつぎと得脱したわけでありす。

この在世の弟子、声聞たちに対する説法のあと、法師品ほうしほん、宝塔品ほうとうほん以下は、仏滅後の未来に妙法蓮華經をだれが弘めるかと釈尊が呼びかけ、それにこたえて、迹化の菩薩たちが名乗りでる、しかしこれを釈尊は断り、大地から本化ほんげの菩薩を召しだして、この地涌の菩薩に法を付嘱する、という流れで展開されます。

したがって、法師品、宝塔品以下は、文のうえからみますと、滅後弘通ぐつうの人を定めることを目的として展開されたことは明らかであります。しかしながら、ただそれだけではない。再往これをみれば、そこには、滅後弘通の法体そのものが明かされている。これが「本有ほんゆの妙法蓮華經」であります。

在世の声聞の弟子たちは、過去に下種げしゆ・結縁けつえんがありますから、すなわち本有ほんゆ有善うぜんのゆえに、法華經の会座では「諸法実相」の説法、ないし「三車火宅さんしゃかたくの譬たとえ」、あるいは三千塵点劫さんぜんじんでんごうの結縁の説法を聞いただけで、種子を覚知することができたのであります。

これは、一つのたとえでいえば、かつて歩いたことのある道で、記憶が定かでなく、迷っている場合に似ています。大部分は思いだせるが、一つだけ曲がり角がどこだったかわからない場合、その一

か所だけ教えてもらえば、あとは迷わずに目的地へ行けるのです。舍利弗が「諸法実相」だけで得脱できたのは、これと同じようなものと考えてよいでしょう。

ところが、未来とくに末法の衆生は、過去に下種・結縁のない衆生、つまり本未有善の機でありま
す。かつて歩いたことのない道は途中のことをどのように教えても、目的地を思いださせることはできません。目的地そのものを示さなければならぬ。この目的地が「本有の妙法蓮華經」です。

法華經の儀式のなかで、法師品以後、とくに宝塔品で多宝の塔があらわれ、そこに釈迦と多宝の二
仏が並座し、さらに十方の諸仏が来至し、本化の菩薩が涌出して展開された、虚空会の儀式は、寿量
品で魂を得て、そのまま「本有の妙法蓮華經」を表現していたのであります。

とはいえ、釈尊の法華經二十八品は、本門といえども、この「本有の妙法蓮華經」にいたる道を図
に書いて示したようなものであります。

「本有の妙法」自体を具現化され、末代幼稚の凡夫に受持させてくださったのが、末法御本仏日蓮大
聖人なのであります。

このように、同じく「諸法実相」といっても、迹門、本門、文底独一本門の立場で、読み方が異な
ります。

文底独一本門に約せば、御本尊そのものが諸法実相であります。さらに信心に約せば、大御本尊を
受持しきったときに、妙法の生命が湧現し、幸福の諸法実相、人間革命の諸法実相として、わが人生
が建設されてくるのであります。

人法一箇の大法を建立

日蓮・末法に生れて上行菩薩の弘め給うべき所の妙法を先立て粗はばひろめ、つくりあらはし給うべき本門寿量品の古仏たる釈迦仏・迹門しやくもん宝塔品の時・涌出ゆじゆつし給ふ多宝仏・涌出品の時・出現し給ふ地涌の菩薩等を先まず作り顕はし奉る事、予が分齊ぶんさいにはいみじき事なり、日蓮をこそ・にくむとも内証ないしょうには・いかが及ばん

末法流布の三大秘法の題目を、ほぼ弘め、同じく三大秘法の御本尊を建立したことを述べられております。

それは、法華經の文の上からいえば、本化地涌の菩薩の上首じようしゅじようぎようぼ上行菩薩さつがなされるべきことであるが、凡夫僧である日蓮大聖人は、御自身がその上行再誕であるという表現は避けて、その先駆けとして「先立て粗はばひろめ」また「先作り顕はし奉る」といわれたのであります。

この御文は、まえに、天台、妙楽、伝教等は本化地涌でなかったために、題目を流布し御本尊を顕すことができなかったと述べられた文と比べ合わせてみれば、その元意は明瞭であります。

大聖人が、いま現実に題目を流布し、御本尊を顕されているということは「先まず」「先立て」等と断

られているにしても、資格なくしてできることではない。したがって、大聖人は、法華經との関連でいえば、本化地涌の菩薩の上首上行の再誕であり、いま末法という時に出現して、この大法を建立されているのであります。

しかしながら、上行再誕というだけでは、日蓮大聖人の本地ほんちを明らかにしたことはならない。いまこの文に「本門寿量品の古仏たる釈迦仏・迹門しやくもん宝塔品の時・涌出ゆじゆつし給ふ多宝仏」うんぬんとある御本尊の御図顕のもつ意味を知らなくてはなりません。

釈迦、多宝、さらに、久遠くおん元初げんじよの無作三身如来むさきんじんにょらいである南無妙法蓮華經という「仏」の生命をあらわすためには、御自身の内に、その「仏」の生命がなくてはならない。事実、日蓮大聖人御自身「日蓮がたましひをすみ墨にそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ」(御書全集一二四頁)とおおせられているのであります。人法一箇いっかの御本仏であるがゆえに、人法体一の御本尊を御図顕されたのであります。

そこに、大聖人の「内証——内なる覚り」がある。「日蓮をこそ・にくむとも内証には・いかが及ばん」とは、日本国の上下万人が、どのように大聖人を憎み、迫害を加えようと、末法御本仏としての、この御境界は、微動だにさせられるものではないということなのであります。

さればかかる日蓮を此の嶋しままで遠流おんるしける罪・無量劫むりやうじやうにもきへぬべしとも覚へず、譬喩品ひゆほんに云

く「若し其の罪を説かば劫を窮むるも尽きず」とは是なり、又日蓮を供養し又日蓮が弟子檀那だんなとなり給う事、其の功德をば仏の智慧ちゑにても・はかり尽し給うべからず、經に云く「仏の智慧を以て籌量ちゆうりやうするも多少其の辺を得ず」と云へり

日蓮大聖人を憎み、迫害する罪の大きさと、大聖人を供養し、その弟子檀那となる者の功德の大きさを示されているわけですが、このことは、とりもなおさず、久遠元初の仏であり、末法御本仏であるとの内証を示されているのであります。譬喩品の文は「斯この經を謗ぼうぜん者、若し其の罪を説かんに、劫を窮むとも尽きじ」とある文であります。

また、功德の依文えもんとされているほうは、藥王品やくおうほんの「若し人、此の法華經を聞くことを得て、若しは自らも書き、若しは人をして書かしめん。所得の功德、仏の智慧を以って多少を籌量ちゆうりやうすとも、其の辺を得じ」との文であります。

弘教の人は仏の使い

地涌の菩薩のさきがけ日蓮一人なり、地涌の菩薩の数にもや入りなまし、若し日蓮地涌の菩薩の数に入らば豈あに日蓮が弟子檀那・地涌の流類るるいに非ずや、經に云く「能く竊ひそかに一人の爲ために

法華經の乃至一句を説かば当に知るべし是の人は則ち如来の使・如来の所遣として如来の事を
行ずるなり」と、豈に別人の事を説き給うならんや

地涌の菩薩の先驅さきがけとして出現したのは、日蓮大聖人ただ一人である。あるいは地涌の菩薩のなかに入っているかもしれない、もし大聖人が地涌の菩薩の数に入っているならば、師弟不二の原理からいって、大聖人の弟子檀那も、地涌の流類すなわち眷属けんぞくでないわけがない、とおおせくださっているのであります。

地涌の菩薩とは、人からいわれて動くものではない。宇宙本然ほんねんの妙法に生ききるがゆえに、大地から草木が本然的に生長していくように、みずから題目をあげ、社会のために、平和のために貢献していく生命なのであります。

そして、大聖人の弟子が地涌の菩薩であるとの証拠としてあげられているのは、法師品ほっし ほうんの文であります。

多少、前後を補って申し上げれば「若し是の善男子ぜんなんし、善女人ぜんによにん、我が滅度の後、能く竊ひそかに一人の爲にも、法華經の、乃至一句を説かん。当に知るべし。是の人は則ち如来の使なり。如来の所遣しよけんとして如来の事を行ずるなり。何に況いかんや、大衆の中に於いて、広く人の爲に説かんをや」との文であります。

すでに申し上げたように、法師品は、仏滅後の弘通を勧めて説かれたものであります。この文は、

まさにこれを勧めて述べた言葉なのであります。そして、この釈尊の言葉にこたえて迹化の菩薩たちが名乗りでたけれども結局、断られ、地涌の菩薩が、これにこたえる資格、力ありとして付嘱を受けたわけであります。

したがって、末法今時、この法師品の文のごとく、妙法を説き、広宣流布に戦っている人は、地涌の菩薩の眷属である、また、そうでなければなりません。『日蓮が弟子檀那は、そのとおり実践しているではないか』——こうおおせられているのであります。

さらに一步掘り下げて「如来の使・如来の所遣しよけんとして如来の事を行ず」ということが、すでに総じて仏と同格であり、無作三身むささんじんの仏であることの証文であります。

そのことを明らかにするために、「使い」ということについて一言しておきたい。

一般的にいっても「使い」とは、使いを出した人の意思を代弁し、同じ資格において振る舞うという意義をもっております。

たとえば国と国とが平和条約を結ぶ場合、お互いに使いを出します。双方の合意によって条約文ができあがると、署名が行われる。そこに記しるされるのは使いの人の個人名であっても、それは一国の国民の総意を含んでいるのであります。

仏法においても、同じであります。妙法を説き弘通していく人は、仏の使いであり、仏と同じ資格において行動していることになる。ゆえに、法華経では、仏の久遠の弟子にのみ妙法弘通の使命を託したのであります。

このことは、逆にいうならば、末法今時に妙法を弘めている人、すなわち折伏している人は、仏の久遠の弟子である、ということになります。

なお「能く竊かに一人の爲めに」が、こっそりと説くことをすすめたという意味ではなく、たとえばそのような弘め方であっても、ということであり、望ましい、より偉大な実践の姿が、堂々と説いていくことにあることは、法師品の文から明らかであります。

時代により、また環境によって、公に実践し、弘教することができない場合もあります。しかし、つねに折伏弘教の精神を忘れず、随力弘通していく人こそ、真の地涌の菩薩の流類であり、御本仏日蓮大聖人の本眷属であることを、強く確信していただきたいのであります。

“覚悟の人”を諸天も賛嘆

されば余りに人の我をほむる時は如何様にもなりたき意の出来し候なり、是ほむる処の言よりをこり候ぞかし、末法に生れて法華経を弘めん行者は、三類の敵人有って流罪死罪に及ばん、然れどもたえて弘めん者をば衣を以て釈迦仏をほひ給うべきぞ、諸天は供養をいたすべきぞ。かたにかけせなかにをふべきぞ。大善根の者にてあるぞ。一切衆生のためには大導師にてあるべしと。釈迦仏多宝仏・十方の諸仏・菩薩・天神・七代・地神五代の神神・鬼子母神・千羅刹

女・四大天王・梵天・帝釈・閻魔法王・水神・風神・山神・海神・大日如来・普賢・文殊・日月等の諸尊たちにほめられ奉る間、無量の大難をも堪忍して候なり、ほめられぬれば我が身の損ずるをも・かへりみず、そしられぬる時は又我が身のやぶるをも・しらず、ふるまふ事は凡夫のことはざなり

日蓮大聖人が凡夫のお立場で、流罪、死罪等の大難に遭いながら、それをものともせず今日まで弘教に励んでこられたのは、なぜであったかを述べられたところであります。

それは、ひとことでいえば、法華経で、釈迦、多宝以下、仏、菩薩、諸天らが、最大限の言葉で、末法に法華経を弘める者を賛嘆してくれているからであるというのであります。別ないい方をすれば、いっさい法華経に身を任せたということです。

釈迦、多宝以下がほめた言葉とは「末法に生れて法華経を弘めん行者は……」から「……一切衆生のためには大導師にてあるべし」までです。カッコをつけて拝読していただければ、わかりやすいと思います。

この言葉のなかで「衣を以て釈迦仏をはひ給うべきぞ」とは、真の仏弟子としての資格を与え、さらにいえば、仏の子として大慈悲をもって包容してくださるということでもあります。諸天が供養し、肩にかけ、背中に負ってくれるとは、周囲の条件についてあらわれてくる変化の功德であります。

「大善根」とは福德を積むことであり、「一切衆生のためには大導師にてあるべし」とは、智慧が豊

かになる、社会のなかにあつて、真実の民衆の指導者、智慧者になっていくであろうということです。

これは、折伏の功德をおおせられた御文と拝すべきであります。

このあと「釈迦仏多宝仏・十方の諸仏・菩薩・天神・七代・地神五代の神神・鬼子母神・十羅刹女・四大天王・梵天・帝釈・閻魔法王・水神・風神・山神・海神・大日如来・普賢・文殊・日月等の諸尊たち」がほめる、とあります。これについて、少々申し上げたい。

まず、一言にしていえば、妙法をたもつ人にとっては、宇宙であれ、自然であれ、人であれ、すべてその人を守り働く運行、リズムになるということであります。

「釈迦仏多宝仏・十方の諸仏」のおほめがあるとは、全宇宙の仏界、諸仏が法華經の行者を守るということであります。まことに頼もしいかぎりであります。その人の行くところ、すべて妙法のリズムにかなった人間革命の世界が開かれていくのであります。またすべての人々が、その人の仏界の生命に感応して心の底から味方となり、呼吸を合わせて、見事なハーモニーを奏でていくことができるということです。

なかでも「釈迦仏」とは、自身の生命に仏智が湧現することを意味しております。また「多宝仏」とは客観世界で、その人の生活、環境に、福德に満ちみちた実証が示されていく姿をあらわしております。「十方の諸仏」とは、周りのいっさいの人々の仏界をあらわしております。

また「菩薩」とは、自然、社会を含めた慈悲の働きがあらわれて、その人を守るといことです。

その人自身の生命にそなわった、人々を救い楽しませてゆく菩薩界のいっさいの力があらわれることはもちろんのこと、慈悲を根底とする社会的指導者たちも、賛同をし、その人のもとに喜んで仕えていくということです。

「天神七代」とは、くたのとこたちのみこと国常立尊、くたのさつちのみこと国狭槌尊、とよくむねのみこと豊斟淳尊の独化神三代と、夫婦一組で一代である泥うい土煮尊・沙土煮尊、おおと のじのみこと大戸之道尊、おおとまべのみこと大苦辺尊、おもだるのみこと面足尊・かしこねのみこと惶根尊、いざなごのみこと伊弉諾尊・いざなみのみこと伊弉册尊の耦生神四代です。

「地神五代」とは、あまてらすおおみかみ あめのおしほみのみこと天照大神、あまつ ひこひこほのに にぎのみこと天忍穗耳尊、ひこほ ほ でみのみこと天津彦彦火瓊瓊杵尊、う がやふ きあえずのみこと彦火火出見尊、いっはしら五柱の神です。これらは人王の以前の神々とされていますが、それら天地の神々も、すべてが諸天善神として働くとおおせです。

「天も知る、地も知る、人も知る」という、いにしえの言葉にも通ずる内容であります。

「鬼子母神・十羅刹女」は有名であり、説明の必要もないでしょうが、法華経以前は悪鬼であったものが、法華経では善鬼としてつらなっています。善の生命を食う働きが、悪の生命を食って善を助ける働きへと転じているのであります。したがって、妙法をたもった人々にとっては、不幸を滅する働きとしてあらわれてくる。

「四大天王・梵天・帝釈・閻魔法王」等はすべて、宇宙、自然、社会の秩序を守る働きに名づけられたものです。社会でいえば、いわゆる世間の指導者、ないしはその人たちのもっている力をさしています。

「水神・風神・山神・海神」等は、自然の恵み、働きです。水にも、風にもそれぞれの独自の使命と力があります。山には山の生命があり、海には海の生命があります。そして、それらもすべて、妙法の生命活動としてのあらわれであります。したがって、それらもすべて、妙法を行ずる人を守る方向へ、守る方向へと動いていく。風強く、波高き日々であっても、妙法をたもった人が厳然と守られていくことは、かずかずの体験が証明するところであります。

また「大日如来」とは、法華經に座した大日如来であり、いわば生命力の一分の表現でありましよう。「普賢」は学理、「文殊」は智慧をあらわしております。学理と智慧の光にもつつまれていくのです。「日月」は日天、月天であり、太陽の生命力、月の働きであります。日天は、万物を成長させ、人々に燃える生命力を与えます。月天は、万物の安らぎの象徴であり、人々に安定と静かな光を投げかけます。

このようにして、いっさいの生命活動、森羅万象が、妙法をたもつ人を支え、守り、包容し、また手足となって働いていくとおおせであります。

なお「無量の大難をも堪忍して候なり」とありますが、「堪忍」とは堪え忍ぶことです。娑婆世界にあつてなにかをなそうとすれば、堪え忍ばなければならない。それほどたいへんな世界でもあります。したがって、同じく堪え忍ぶのであれば、妙法流布のための堪忍であっていただきたい。一時はそれこそたいへんな、生命がけのときもあるかもしれない。しかし、妙法の堪忍であれば、かならず諸仏、諸天の加護があらわれるのは絶対にまちがいないというのが、御本仏日蓮大聖人の悟りの御説法

なのであります。

また「ほめられぬれば我が身の損ずるをも・かへりみず、そしられぬる時は又我が身のやぶるをも・しらず、ふるまふ事は凡夫のことはざなり」との御文は、日蓮大聖人の御一身にあてはめられて述べられておりますが、凡夫というものの人情の機微を、じつに鋭くとらえられております。

ほめられても、そしられても、わが身を傷つけ、痛めていくのは、凡夫の習いであるようでありま
す。ほめられて一生懸命になるのは「我が身の損ずるをも・かへりみず」のほうであります。これは、骨身を惜しまない気持ちになるということです。「我が身のやぶるをも・しらず」というほうが、愚かのゆえに、そしられてみずからを破滅にいたらしめるということであります。

これを敷衍ふたんしていえば、誤解があつてはなりません、私どもの広宣流布という戦いであっても、人を賛嘆し、その努力、功績を心からたたえていくことが、より以上の勇氣と自信をもって前進していくために、大事な点であるということもいえるでありましょう。

貫こう「日蓮が一門」の生涯

いかにも今度・信心をいたして法華經の行者にてとをり、日蓮が一門となりとをし給うべし

この段から以下は、弟子の信仰のあり方、化儀の広宣流布への方軌と実践方法を説かれています。まずここは「法華經の行者」「日蓮が一門」となりとおしなさい、と根本的な決意をうながされているのです。

あまりにも有名な御文であります。成仏の要諦も、日蓮正宗創価学会の根本精神も、この一文のなかにあるといっても過言ではありません。

「いかにも今度・信心をいたして」とは、なんとしても、この一生涯、信心を貫きなさいということです。この「いかにも」という表現に、大聖人は万感の思いを託されているように思います。というのは、私どもは、無始以来、生死流転の回数もまた数えきれないほどであります。元品の無明におおわれた生死の流転は、闇中の遠征のごときものであります。

いま「妙法」に巡りあい、久遠の御本仏にお会いできたということは、これまでの闇につつまれた生死流転を転換し、燦たる妙法の太陽の光明に照らされた、晴れわたった常寂光の空のもと、美しい花の咲き乱れる楽園を常樂我淨と遊戯しゆく「本有の生死」へと開く希有の機会なのであります。ゆえに「いかにも今度」といわれ、たとえなにがあっても、どんな事態に遭遇しても、この一生を信心しぬいていくことを強調せられているのです。どうか「いかにも今度」という一句を、深く胸におさめていただきたい。

「法華經の行者にてとをり」とは、「法」を中心にした立場であり、「日蓮が一門」とををし給うべし」は、「人」を中心にした立場でおおせられております。別して「法華經の行者」とは、日蓮大聖

人お一人であり、大聖人の御一身のために法華経は説かれたといつて過言ではないのです。そして、大聖人お一人が法華経のいっさいを身に読みきられて、正像二千年の釈尊の仏法に区切りをつけ、末法万年の闇を晴らす御本仏とあらわれたのであります。

この御本仏日蓮大聖人の魂魄こんぱくをとどめられた御本尊を受持しきることが、私どもにとって総じての「法華経の行者」としての実践を貫くことになるのです。しかし、その根底は、あくまで「日蓮が一門」という自覚でなくてはならない。そうでなければ、真実の「法華経の行者」でもない。

「日蓮が一門」の自覚に立つということは、具体的な私どもの実践に約して申し上げれば、わが同志の、広宣流布への異体同心の世界に生ききることであります。なぜかならば、日蓮正宗創価学会は、御本仏日蓮大聖人の生命である御本尊を根本にした、広布実践の団体であるからであります。日ましに種々の障魔の厳しき現象をみても、御書のとおりなのであります。ゆえに「日蓮が一門となりとをす」とは、日蓮正宗創価学会と運命をともしていくことに通じていくのです。

しかも、この「日蓮が一門」という根本が欠けては、たとえ御本尊を護持してもなんにもならないのです。「生死一大事血脈抄」という重大な書にも「信心の血脈なくんば法華経を持つとも無益なり」(御書全集一三三八頁)とおおせのとおりであります。信心は即実践であります。ゆえに、行躰即信心とも述べられている。また、この「日蓮が一門となりとをす」の「なりとをす」ということが大事です。じつはこれ自体が、即、成仏に通ずるからであります。

成仏というと、なにか特別な理想人格になるように思われがちですが、それは色相莊嚴しきそうしょうごんの釈尊の仏

法の範疇^{はんちゆう}です。日蓮大聖人は、凡夫即御本仏であられるから、この仏法は偉大なのです。

そこに仏法の真実がある。ありのままの人間性のなかに、偉大な光をはなつ仏法であるがゆえに、私どももそれにつらなっていくことができるのです。私たちにあって成仏とは、この世でもっとも尊^{とうと}い御本尊を受持しきって人生を全^{まこと}うしきることが、即、仏の生命とあらわれるのです。さらにいえば、なにがあっても「日蓮が一門となりとをす」と決めきった人生そのものが、すでに仏界に住した生き方があります。

大聖人と同じ精神で折伏弘教

日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか、地涌の菩薩にさだまりなば釈尊久遠の弟子たる事あに疑はんや、経に云く「我久遠より来^こかた是等の衆を教化^{きやうけ}す」とは是なり、末法にして妙法蓮華経の五字を弘めん者は男女^{なんによ}はきらふべからず、皆地涌の菩薩の出現に非^{あら}ずんば唱へがたき題目なり

「日蓮と同意」とは、大聖人と同じ心、同じ精神ということであります。「法華経の行者にてとをり、日蓮が一門となりとをし」たとき、その身口意の三業^{さんごう}によってはじめて、御本仏日蓮大聖人と同意と

なることができるのであります。

これは師弟不二の原理でもあります。不二とは、而二不二の義で、一往は二である。すなわち師と弟子という立場の相違は厳然としてある。だが、再往、その奥底においては、不二、すなわちまったく同じであり、等しいということです。

この師弟不二が、仏法の師弟観の真髓なのであります。ゆえに、日蓮大聖人のお心をわが心とし、大聖人の御精神を自己の生命をかけた使命としていく「日蓮と同意」の人こそ、真の日蓮大聖人の弟子であります。口先や形式などは、やがては大聖人のお叱りをうけることでしょう。

「上野殿御返事」には「日蓮生れし時より・いまに一日片時も・こころやすき事はなし、此の法華經の題目を弘めんと思うばかりなり」(御書全集一五五八頁)と述べられております。「日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか」とは、この大聖人と同じく、広宣流布の使命に立ち、責任をもっていく人こそ、地涌の菩薩であるという御文であります。

そして、もし地涌の菩薩であることが決定的であるなら「釈尊久遠の弟子」であることも、また疑う余地はない。なぜかならば、法華經涌出品に、地涌の菩薩が出現したとき、驚いた弥勒菩薩の質問に答えて「我久遠より来かた是等の衆を教化す」、すなわち久遠の昔から教化してきた弟子であると述べられているからであります。

この「釈尊久遠の弟子」の「釈尊」とは、一往は法華經本門の教主釈尊であります。再往の辺を拝すれば、久遠元初の自受用報身如来であり、末法御本仏日蓮大聖人でもあります。日蓮大聖人は、久

遠よりこのかた、私たち地涌の菩薩を教化してこられたという意味です。

以上のことを結論づければ、日蓮大聖人と同意ならば、地涌の菩薩であることは決定的であり、それはそのまま日蓮大聖人の本眷属ほんけんぞくなのであります。

この御文を、現実社会において読まれた方が、初代会長牧口先生であり、二代会長戸田先生であつた。戸田先生は、獄中において、みずから地涌の菩薩の眷属であり、御本仏日蓮大聖人の本眷属であるとの自覺に立たれたのです。

私たちは、この戸田先生という偉大な人格をとおして日蓮大聖人の仏法を知り、広布の道を進むことが出来るようになったのです。この妙法広布に生きる人がいかに尊いかは、あまりにも明瞭であります。またそうした人々に対して、いかばかりか御本仏の御称賛があることでしょうか。

さて、この「釈尊久遠の弟子」ということを生命論のうえからいえば、「釈尊」とはわが生命の内なる釈尊であり、南無妙法蓮華経如来であります。地涌の菩薩が、釈尊の久遠の弟子であるということは、上行、無辺行、浄行、安立行等の地涌の生命が、奥底の南無妙法蓮華経如来という本源に根ざした働きであることをあらわしているのであります。

「末法にして妙法蓮華経の五字を弘めん者は男女なんによはきらふべからず、皆地涌の菩薩の出現に非あらずんば唱へがたき題目なり」

この末法の世に妙法蓮華経——三大秘法の南無妙法蓮華経を弘める人が地涌の菩薩の眷属である、

とのおおせです。したがって、いかなる立場の人であれ、どのような境遇の人であれ、みずからの使命のままに仏法弘通に挺身する人は、みな平等に最高の人生を歩んでいるのであります。仏法を弘める人こそ尊いのであります。經文には「当に起って遠く迎えて当に仏を敬うが如くすべし」とあるとおりであります。ゆえに、仏法弘通に活躍する人をへいげいしたり、非難、中傷することは、もつとも罪が重いといわなければならない。

「男女はきらふべからず」とは、いうまでもなく、男性であろうと女性であろうと、等しく地涌の菩薩であるということにおいて、まったく差別はないとおおせであります。

男女の差別という問題は、社会的次元で、その役割と待遇の差別としてあらわれます。たしかに、男性にしかできないとまではいなくても、男性に向いていて、女性向きでない仕事もありました。待遇は、その仕事に対して決定されるべきもので、男性だから、女性だからという理由で差をつけられるべきものではありませんが、それを前提としたうえでの個人差は、当然あってもやむをえないでありましょう。

しかし、もつとも根本的な問題は、人格の尊厳にかかわる次元で差別がつけられている場合に起こってくるものであります。そこに関係してくるのが、宗教のもっている男女観であります。

過去の多くの宗教は、原始的諸宗教は別にして、共通して男性中心であったといわざるをえない。キリスト教もイスラム教も、その神は男性であると考えられる。

仏教もまた爾前經を根本とした諸宗派は、男性が中心であった。これらに対し、日蓮大聖人は「男

女はきらふべからず」とおおせられ、妙法を弘める人は、すべて等しく地涌の菩薩の眷属であると断定されているのであります。

すなわち、宗教的使命と資格において、男女のあいだにまったく差別はないとされることにより、人格的価値の真実の平等觀を打ち立てられているのであります。ここにも、日蓮大聖人の仏法の内包する近代性と、人間の尊嚴を裏づける偉大な原理があることを、どうか深く確信していただきたいのであります。

「皆地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目なり」とは、いかに、題目を唱えることがむずかしいか、ということであります。地涌の菩薩でなければ、題目を唱えられないのです。

まず、人身を受けるということさえまれであります。人間についての、仏法上の一つの定義は「しやう聖道正器」ということでもあります。人間であればこそ、聖道（みずからの成長をめざす四聖、究極するところ仏界、すなわち成仏への道＝宗教）を歩んでいくことができます。まさしく、宗教は、人間生命の核心であります。この核心を失えば、人間ははつらつたる生命の光を失い、硬直化し、化石化するにちがいない。

しかし、そのなかにあって、ほんとうに偉大な宗教に遭遇（そうぐ）することも、なかなか困難であります。私どもは、その意味で、まことに「唱へがたき題目」を唱えていることに、感謝の気持ちが入み上げてきます。

ともに「地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目」とは、たとえば、いかなることがあっても

「但南無妙法蓮華經なるべし」の御金言のままに、題目を唱えきっていくことであります。

さらに、菩薩の本領は「誓願」ということにある。そして、地涌の菩薩の誓願とは「法華弘通」にあります。ゆえに、われわれも地涌の菩薩の眷属である以上、心から周囲の人々を幸せにしきっていくという誓願の唱題が大切です。厳しくいえば、誓願なき唱題は、地涌の菩薩の唱題ではないのであります。

広宣流布実現への大確信

日蓮一人はじめは南無妙法蓮華經と唱へしが、二人・三人・百人と次第に唱へつたふるなり、未来も又しかるべし、是あに地涌の義に非ずや、あまつき剩へ広宣流布の時は日本一同に南無妙法蓮華經と唱へん事は大地を的とするなるべし

妙法流布の原理を示され、広宣流布実現への大確信を述べられた、有名な御文です。

南無妙法蓮華經は、日蓮大聖人まずお一人が唱えはじめられ、そこから二人、三人、百人と「唱へつたふる」ようになった。未来においても、同じ原理である、とのおおせであります。

この御文は、ひじょうに深い意味がこめられております。

一つは、このまえの「皆地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目なり」をうけて、総じては、題目を唱える人は、すべて地涌の菩薩であるけれども、その広まっていく原理は、まず一人が立ち上がって唱えはじめ、そこから二人、三人、百人と広がっていく。かならずそこに総、別があるということであります。

この別してのお一人が、いうまでもなく御在世においては、日蓮大聖人御自身であります。しかし、それは御在世のみならず「未来も又しかるべし」とおおせであります。

次元が異なりますが、創価学会においても、初代会長牧口先生が入信し、折伏に立ち上がられたところから二人、三人と「唱へつたえ」、約三千人にまでなった。

戦後は、第二代会長戸田先生が、東京の焼け野原に立って、折伏弘教を決意し、そこから二人、三人、百人と「唱へつたえ」で、現在の一千万人以上にまでなったのであります。

私どもは、この「一人立つ精神」を正しく受け継いでいくことを絶対に忘れてはならない。

ともかく、最初の一人が肝心なのです。それがいっさいの淵源えんげんとなって広がっていくというのは、広布の絶対のあり方と確信していただきたい。

「新池殿御消息」にも「抑因果そもそものことはりは華はなと果このみとの如し、千里の野の枯れたる草に螢火ほたるびの如くなる火を一つ付けぬれば須臾しゆゆに一草・二草・十・百・千万草につきわたりてもゆれば十町・二十町の草木・一時にやけつきぬ」(御書全集一四三五頁)とあるとおりです。

たった一本のマッチが、大火となっていくきます。その一本が問題なのです。

つぎに「唱へつたふる」ということであります。「唱へ」とは自行であり、「つたふ」とは化他^{けた}であります。

「三大秘法抄」に「末法に入て今日蓮が唱る所の題目は前代に異り自行化他に^{わた}亘りて南無妙法蓮華經なり」(御書全集一〇二三頁)といわれるように、自行と化他の両方をかねそなえた実践でなければ、大聖人門下の正しいあり方とはいえないことを知っていただきたい。

また「唱へつたふる」を自行、化他に分ける意義については、「御義口伝」の「涌出品一箇の大事^{だいじ}・第一唱導^{しょうどう}之師の事」に、つぎのようにあるのに照応しているのであります。

「御義口伝に云く涌出の一品は悉く本化^{ほんけ}の菩薩の事なり、本化の菩薩の所作^{しよさ}としては南無妙法蓮華經なり此れを唱と云うなり導とは日本国の一切衆生を靈山淨土^{りやうぜんじょうど}へ引導する事なり」(御書全集七五一頁)うんぬんと。

「唱へ」は唱導の「唱」であり、「つたふ」は「導」に対応します。みずから唱えるときともに、これをいっさいの人々に伝え、導いていこうとする人こそ、地涌の菩薩といえるのであります。

「未来も又しかるべし」——いつの時代にあっても、絶對に変わらない根本原理が、これなのであります。

どうか、日蓮大聖人の仏法を信じ、学会精神を継承した皆さん方も、おのおのの立場で、一人立つて「唱へつたふる」真実の地涌の菩薩の眷属であっていただきたい。

「一人立つ」とは、自分の家庭、職場、地域等、自分自身がかかわっているいっさいの世界で、妙法

の広宣流布に全責任をもっていくことです。もともと身近な、そして地味な活躍に真の仏法があり、広布があることを忘れないでください。御本仏日蓮大聖人の御使いとして、いまここに、自分はいるのだと自覚することです。

どのような立場であれ、一人ひとりが自分自身だけの、他のだれとも交代することのできない人間関係をもっておりまます。家族、職場、さまざまな友人関係等々、すべてについて、かならずその人独自の世界を形づくっている。それが、妙法のうえからみれば、自身の国土であり、自身の眷属であります。そこに、妙法流布の責任と資格とをもっているのは、その人一人だけであるということです。ゆえに、一人立つという原理が大事なのであります。そして、おのおの世界、国土にあって、そこから立ち上がっていくのが「地涌の義」であります。

なお、この御文は、広宣流布は、かならず民衆の大地から盛り上がって成就していくことを述べられたものです。広宣流布は、けっして権力によるものではない。「未来も又しかるべし」の強い御確信の金言を深く拝すべきであります。

「^{あまつさ}剩へ広宣流布の時は日本一同に南無妙法蓮華經と唱へん事は大地を^{まこと}的とするなるべし」

「大地を的とする」とは、絶対に外^{はず}れるわけがない、ということです。したがって、この御文は、かならず広宣流布し、日本のあらゆる人々が、日蓮大聖人の三大秘法の南無妙法蓮華經を唱える時がくるとの御確信であり、予言であります。

「日本一同に」とは、あらゆる立場の、あらゆる仕事にたずさわる人々ということです。

政治家も、教育者も、あらゆる職業の人々、家庭の主婦、学生も、すべての人が妙法を信受し、仏法を研鑽^{けんさん}して、人生に価値を創造し、社会に貢献していくようになる。この総体革命の姿を「日本一同に」といわれているのであります。

ただし「日本一同に」といわれたからといって、日本だけにかぎって他の国へは弘めないということではありません。それは「一閻浮提^{いまたんぶだい}に広宣流布して」と、法華經の文にも、大聖人の諸御書にも述べられていることから、明らかであります。

しかし、強い意識をもって広宣流布のために取り組んでいく対象は「日本」であるという御教示が、とくに「日本一同に」といわれるお言葉のなかに含まれているとも考えられます。その意味で、私どもとしては、日本の広布実現こそ、世界の平和と人類の幸福のために、妙法の力が利益^{りやく}していく源泉であると確信していくべきであります。

「法華經に身をまかせる」人生を

ともかくも法華經に名をたて身をまかせ給うべし、釈迦仏・多宝仏・十方の諸仏・菩薩・虚空^{こくう}にして二仏うなづき合い、定めさせ給いしは別の事には非ず、唯^{ただ}ひとへに末法の令法久住^{りようほうくじゅう}の故なり、既に多宝仏は半座を分けて釈迦如来に奉り給いし時、妙法蓮華經の膺^{はた}をさし顕し、釈

迦・多宝の二仏大將としてさだめ給いし事あに・いつはりなるべきや、併しかしなら我等衆生を仏に
なさんとの御談合なり

信心の究極の姿勢は、法華經に名を立て、身をまかせることです。

「ともかくも」というお言葉に、いっさいを究められた日蓮大聖人の、無限の慈悲を感じます。この御心境は、痛いほど胸に迫ってくるのです。凡夫である私どもに対し、浅智せんちや、邪智じやちや愚かさのために、退転していくことを強く戒められているのです。

戸田先生が「私の悩み」と題して、つぎのように書かれたことがありました。

「この私の悩みは、信心に強く立つものが少ないことである。また、初信の者が、大御本尊のご威徳を信ぜずに、退転することである。これらの者は、なんと浅はかな者であろうか。清水のごとく、こんこんとわき出る功德の味を、味わいきれずに、死んでしまうのである。なんと、かわいそうなことではないか。私の胸のなかは、キリで、もみこまれる思いで一杯である」(巻頭言から)と。

少々の人生の荒波に、敗北しゆくほど悲しむべきことはない。現代的に言えば、月へ行くにも軌道きどうがある。その軌道をふみはずしたならば、永久に帰ってこられないのです。同じく、生命にも宇宙に通ずる根本軌道というものがある。それをふみはずせば、永劫えいごうに闇やみの流転となってしまう。＼ともかく私のいっていることを信じて、法華經に身をまかせなさい＼との御心境が、この「ともかく」の文字ではないでしょうか。

「法華經に名をたてる」とは、この妙法の広宣流布に生きることを、なによりの誇りとしていくことであります。それぞれの仕事において名を立て、信頼される人になっていくことは、もとより大事であります。だが、永遠の生命觀に立った場合、もっとも根本的かつ永続的な榮譽とは、仏法の広布のために、どれだけの仕事をし、貢献したか、ということなのです。その榮譽のみが、時とともに永遠に輝いていくのです。

「法華經に身をまかせる」とは、わが人生の究極の依拠えきよを御本尊におくということです。それは具体的に、日々の勤行、広宣流布のための活動を実践しぬいていくことです。「法華經に身をまかせ」た人生ほど強く、偉大なものはない。宇宙大の法理と力のうえに、わが人生をおいていくことになるからです。

なぜ「法華經に名をたて身をまかせ」るべきか——それを、つぎの「釈迦仏・多宝仏」以下に述べられております。

一言にしていえば、法華經の儀式と説法の目的は、末法の私どものためである、ということです。でなければ、仏法は空論になり、觀念の世界の遊戲ゆうぎに終わってしまふ。仏法究極の哲理といえども、しよせん、私ども一人ひとりのために説かれたものです。

さきにも申し上げましたが、法華經は、在世衆生の代表である声聞じゆんへの授記じゆきのあと、法師品ほつし、宝塔品ほうとう以下は、釈尊滅後の弘通をだれがするかを主テーマに展開されております。

すなわち、宝塔品、提婆品だいばでの釈尊の諫曉かんぎやう——呼びかけに応じて、勸持品かんじ、安樂行品あんらくぎやうで迹化しやつけの菩薩

たちが名乗りをあげますが、涌出品ゆじゅつぽんで釈尊は「止みね善男子せみなんし」としりぞけ、本化地涌ほんけじゆの菩薩を召しだす。そして、この本化の菩薩についての弥勒みろくたちの疑問に答えて、久遠成道くおんじやうどうの寿量の説法があり、神力品じんりきほんで本化への付嘱ふしよく、嘱累品しよくるいほんで総付嘱が行われるのであります。

したがって、この一往の文上の流れでみれば、法師品のあとの宝塔品で多宝の塔があらわれ、釈迦、多宝二仏並座びやうざのもとに行われた法華經の儀式は、地涌の菩薩に末法の妙法弘通の使命を託すためであったといえます。これが「唯ひとへに末法の令法久住りやうぽうくじゆうの故なり」といわれている一往の義です。

これは、しかし、一往文上の辺であり、化儀の側面であります。再往文底からみれば、じつはこのなかに、末法の衆生を成仏せしめるべき、末法流布の法体ほつたいが明かされている。すなわち、家の設計図と家そのものとの関係のごとく、この法華經の二仏が多宝塔中たつちゆうに並座し、虚空会こくうかいにおいて「妙法蓮華經の幡はたをさし顯し」「さだめ給」うた儀式が、そのまま「三大秘法の御本尊のお姿をあらわしている」のであります。この本文では「妙法蓮華經の幡」といわれているのがそれでありす。

この御本尊こそ、末法に流布される法体であり、一切衆生を末法万年尽未来際にいたるまで即身成そくしんじやう仏させる秘法であります。「末法の令法久住」の文の元意がんいはここにあります。ゆえに「併しかしたら我等衆生を仏になさんとの御談合なり」とおおせられているのであります。

すなわち、この御本尊こそ、八万法蔵の仏法の結論であり、法華經という宇宙根本の法理を事実のうえに作動させた当体であり、この大仏法のコースを歩んでいくなれば、成仏はまちがいないといわれているのです。

なお、御本尊の相貌（せうみょう）に約（やく）していえば「妙法蓮華經（はつぽうれんげ）の應（おう）」とは、中央の「南無妙法蓮華經 日蓮」をさし、「釈迦多宝の二仏大將として」が、その左右にしたためられている仏界の代表を意味しております。

生命の姿あらわす「虚空会」

日蓮は其の座には住し候はねども經文を見候に・すこしもくもりなし、又其の座にもや・ありけん凡夫なれば過去をしらず、現在は見へて法華經の行者なり又未来は決定（けつじよう）として当詣道場（とうけい）なるべし、過去をも是を以て推するに虚空会にもやありつらん、三世各別あるべからず

ここは、日蓮大聖人のお振る舞いが法華經に説かれているとおりであり、したがって、未来はまちがいなく仏であると、深い御確信を述べられたところであります。

示同凡夫（じどうぼんぶ）のお立場ですから、あの法華經の「虚空会（こくうかい）」の儀式に、地涌の菩薩としてつらなっていたかどうか、という過去のこととはわからない。ただ、經文をみれば、そのときの様子はハッキリしているし、いまの御自身の振る舞いが「法華經の行者」として、地涌の菩薩の振る舞いであることも、だれ一人として否定できない事実の問題である。

したがって、このことから過去を推察するに「虚空会にもやありつらん」——おそらくつらな

いたであろう、とおおせであります。

大聖人は、けちみやくしよ血脈書、あるいはそれに準ずるような御抄——たとえば「三大秘法抄」などにおいては、まちがいなくりようせん靈山において、虚空会において付嘱を受けた等といわれておりますが、一般の御書では、あくまで客観的に論じられております。

過去にどうであったか、ということとは、凡夫の知ることのできない問題であって、いたずらにそういう論議をすると、かえって神秘主義におちいり、誤解させてしまう。本抄のように、経文にどうあるか、そして大聖人の現実のお振る舞いがどうであるか、その照合から過去を推測する、このいき方は、今日の科学や実証的な歴史学のとる方法と相通ずるものといえましよう。

「三世各別あるべからず」——過去と現在、現世と未来が、まったく無関係で、バラバラであるわけではない、ということです。「過去の因を知らんと欲せば、その現在の果を見よ。未来の果を知らんと欲せば、その現在の因を見よ」と、仏法は教えております。現在の、だれも見ることのできる事実を根本にして、そこから過去を知り、未来を知っていく——これが仏法のいき方です。

その根底には、いかなる原因が、いかなる結果を生ずるかという、厳然たる法則性に対する透徹した眼がある。ゆえに、仏は三世を知っているとされるのであって、けっして神秘的な、超能力的なものではない。「仏法は道理なり」という御教示を、深く胸に刻んでいただきたいのであります。

ここで、もう一つ申し上げておきたいのは虚空会の儀式ということ事です。

経文のうえでは、まえにも述べたように、法華經のけんぽうとうほん見宝塔品第十一からぞくろいほん嘱累品第二十二まで、虚空

に浮かんだ多宝塔中に釈迦、多宝の二仏が並座し、大衆もみな、虚空に住在して説法が行われたことをいいます。

だが、これが三千年前のインドで、現実起こった事実であるということとは、とうてい納得できない。大勢の人々がそのまま空中に浮かぶということ自体、あまりにも非現実的であるし、多宝の塔についても、高さ五百由旬、タテ、ヨコ二百五十由旬と記されている。五百由旬とは、計算の仕方によっても違いますが、小さいほうでとっても、地球の半径の長さになる。

では、法華經に説かれていることは、空想の産物であって、ただの作り事にすぎないのかといえ、それは大きい誤りであります。これを、どのように考えるべきか、という問題であります。

端的に言えば、釈尊がみずから悟ったところのものを説くのに、虚空会の儀式という形でしか表現することができなかったがゆえに、このような超現実的ともいえる形式をとったのであります。

戸田先生が、法華經の莊嚴な儀式をさして「釈尊己心の儀式である」といわれたのは、この意味であります。

虚空会の儀式が、釈尊の悟ったものをあらわしているということは、虚空会の儀式自体が仏の悟りの当体、すなわち、法体をあらわしているということでもあります。この仏の悟りの法体を、釈尊は虚空会の儀式としてあらわし、天台は一念三千の法理として示し、日蓮大聖人は、御本尊として、末代幼稚の凡夫が、即座に受持できるようにしてくださったのであります。

したがって、大聖人はここで釈尊の法華經について論じられているので「過去をも是を以て推する

に虚空会にもやありつらん」とおおせられておりますが、さらにわれわれの立場にあてはめて拝すれば、御本尊を受持し、日々、勤行し、唱題していること自体、日々、虚空会につらなっていることに通ずるのであります。

さらに、生命論からいえば、わが生命そのものが虚空会であります。わが色心の作用を起こしている根源は、まさしく虚空であります。しかし、その虚空とは、たんなる「無」ではない。無限の創造性と力感に満ちみちた生命の場であります。

また、永遠の生命そのものが虚空会であります。靈鷲山会が、虚空会の儀式とあらわれたということとは、まさしく、生命の永遠であることを説こうとしたものです。

御本仏の境界を吐露

此^かくの如く思ひつづけて候へば流入なれども喜悅はかりなしうれ^嬉しきにも・なみだ・つら^痛きに
もなみだなり涙は善惡に通ずるものなり

法華經を身をもって読みきられた、御本仏の絶対的な境界を吐露^{とろ}された御文であります。

まことに日蓮大聖人の御文は、名文であります。読むたびに、私たちの胸中に、慈父の響きと、広

布の大感情が込み上げてまいります。しかも大聖人の文章は、いわゆる机上に作られた美文ではない。文は生命なり、文は境涯なり——としみじみと痛感させられるのであります。

あの流罪の地・佐渡において、地獄のどん底と思われるような御生活にあって、なお全宇宙をもつつむであらう境涯で、お手紙をおしたためになる御心境は語るすべもないほどです。

いにしえの天平時代より、江戸時代にいたる一千余年間にわたり佐渡へ流罪された人は、無数でありましょう。そのすべては、悲哀と激憤と苦痛と忍従と——さらには呻吟しんげんの聲が大地に刻まれてきたといってよいでしょう。しかし、ただ一人、澄みきった秋の青空のごとく、また陽光を浴びた春の大海のごとく、淡々たんたんたる御心境で「喜悅はかりなし」と叫ばれた人がいるでありましょうか。

世にいう哲人、賢人、文人の人々も、ひとたび悲惨な生活におかれるや、天を仰いでうらみを隠し、地に伏して嘆きを深くしたのであります。だが、もっとも悲哀のなかにあっても、もっとも強く生ききったその人格は、まさしく生命の革命劇を、歴史のうえに燦さんたる光をもってとどめたものといえると思います。

この大聖人の御心境を深くかみしめながら、何回も何回も繰り返しながら拝読し、私たちは、大聖人の叫びを胸中に響かせていこうではありませんか。

「此かくの如く思ひつづけて候へば」とは、法華経が、せんずるところ、日蓮大聖人お一人のために説かれたものであったということであります。あの荘嚴な虚空会こくうえの儀式、釈迦、多宝の二仏並座びよりうざ、十方分身の諸仏ちいじゆふの来集等々すべて「末法の令法久住りようぽうくじゆうの故」であり、「我等衆生を仏になさんとの御談合」

であった。すなわち、一往は上行再誕、再往は本地久遠元初の自受用報身としての日蓮大聖人御自身のために行われた儀式であり、諸仏の来集であった。ゆえに、これほどうれしく、ありがたいことはない、とのお言葉なのです。

「なみだ」とは、崇高なる大感情の表現です。抑えても抑えられない、また外的条件がどんなであれ、それを突き破って湧きあがってくる偉大な感情の噴出を「なみだ」によってあらわされているのであります。

「流人なれども」——いま、大聖人のお立場は、流人という、まことに厳しく、つらいものである。これは、相対的次元の幸、不幸の現象です。その次元では、この世でもっとも不安定な、不幸な姿であられる。しかし、内心の胸中に確立された境界——絶対的幸福の次元では、この世でだれよりも豊かで、広大かつ不動の幸福を満喫まんきつされているのであります。

この相対的幸福と絶対的幸福という点について一言、申し上げておきたい。

それは、絶対的幸福とは、相対的幸福の延長線上にあるものではない、ということ。これを、もう少しわかりやすくいいますと、経済的に豊かになり、健康で、周りの人々からも大事にされ……等々の、いっさいの幸福の条件が満足しているのが、絶対的幸福ではないということです。

相対的には、いくら不幸であっても、絶対的幸福を確立することはありうる。逆に、相対的な幸福の条件は、どんなにとのっていても、絶対的幸福にほど遠い人も少なくありません。相対的に幸福

の条件をもっている人は、私どもの周囲をみればたくさんいるでしょう。仏法を信仰していない人で、私たちより幸せそうに見える人々がたくさんいるのはこの例です。相対的には不幸でも、絶対的幸福を確立した例が、いまここで述べられている大聖人の境界なのです。

相対的なものは、どこまでいっても相対的です。どんなに資産家であれ、有名人であれ、社会の激変によって、一夜にして貧乏のどん底に陥る場合も少なくありません。また、どんなに健康であつても、事故にあえば、一瞬にして重体となることもある。なにもなくとも、しだいに年をとってくれば、だれしも、さまざまな病氣が出てくるものです。

ゆえに、相対的幸福を形成しているものは、自己と環境的条件との相関関係にすぎないのです。かんなんな例でいえば、なにかを食いたいという自己の欲望と、それに対応するご馳走が出てきたという環境的条件、このお互いの関係によって生ずるのが、相対的幸福なのです。

これに対し、絶対的幸福とは、自分が心に決めた使命感、目的観と、それを実践しているという事実とのあいだの関係で出てくるものであり、生命自体の充実感、満足感です。これは、有為転変する周りの条件に支配されるのではなく、みずからの意志で決定できるものです。したがって、絶対的となりうるのです。

さらに、これを掘り下げていえば、その自分の定めた目的観、使命感が、宇宙とともに不変常住の法に合致していることが、絶対的幸福の完璧な要件であります。

したがって、無始以来、常住不変の妙法を堅く信じ、広宣流布というみずから決めた目的観、すな

わち大願に生き、実践しぬく心にこそ、真実の絶対的幸福が築かれることを、どうか皆さんは強く確信してください。とともに、それこそ、人間としてもっとも尊い生き方であることを、最大の誇りとしていただきたいのであります。

彼の千人の阿羅漢・仏の事を思ひいでて涙をながし、ながしながら文殊師利菩薩は妙法蓮華經と唱へさせ給へば、千人の阿羅漢の中の阿難尊者は・なきながら如是我聞と答え給う、余の九百九十人はなくなみだを硯の水として、又如是我聞の上に妙法蓮華經とかきつけしなり、今日蓮もかくの如し、かかる身となるも妙法蓮華經の五字七字を弘むる故なり、釈迦仏・多宝仏・未来・日本国の一切衆生のために・とどめをき給ふ処の妙法蓮華經なりと、かくの如く我も聞きし故ぞかし

ここは、經典結集のありさまを述べられたところですが、「如是我聞」ということについて申し上げたい。

この言葉は、あらゆる經文の冒頭にあり、その經文の骨髓をあらわした題目を受けた言葉です。「是くの如く我聞きき」と読みます。私は釈尊の説法をこのように聞いたという意味です。

文殊師利が妙法蓮華經と唱え、阿難が如是我聞と答え、他のすべての人が妙法蓮華經如是我聞と書

きつけたということは、そこにいたすべての人々が、釈尊の説法の真髓は妙法蓮華經であり、妙法蓮華經を如是我聞したと一致して述べたということです。

この如是我聞ということは、ただたんに聞いたというような簡単な言葉ではない。もっとずっと強い主張が込められています。天台大師は法華文句ほっけもんぐで「我聞とは能持の人」であると述べている。つまり「仏法の教えの真髓はこうだと私は確信する。したがって、この經文のとおりには仏法を實踐し、身をもってこの經文を証明していきます」といった決意が込められた言葉です。

日蓮大聖人も「釈迦仏・多宝仏・未来・日本国の一切衆生のために・とどめをき給ふ処の妙法蓮華經なり」と如是我聞されたとおおせられております。ゆえに妙法流布のために、種々の大難を受けて法華經を証明され、末法万年の一切衆生のために、御本尊をお遺のこしくくださったのです。

この日蓮大聖人の仏法を、私たちのためにとどめおかれた人間革命と世界平和の根本法であると、信徒の立場で如是我聞されたのが、まさしく牧口初代会長であり、戸田二代会長でありました。如是我聞されたがゆえに、広宣流布のために亡くなられ、また生きぬかれたのであります。これこそ、学会精神の骨髓中の骨髓であることを生命に刻み、染めていただきたいのであります。

さらに、釈尊なきあと、文殊師利、阿難をはじめ弟子たちが、涙をながして仏の教えを繰り返して、涙をもって經文に記したということは、仏の大慈悲に対する無量の感慨をあらわしております。そして、この弟子の大感情が、仏法を未来へ流れ通わしむる原動力となったということでもあります。

大聖人もまた、釈尊、法華經に対する報恩感謝と、一切衆生への大慈悲の涙をもって、末法万年弘

通の大白法を建立されたのです。「日蓮が慈悲曠大こうだいならば南無妙法蓮華經は万年の外・未来までもながるべし」(御書全集三二九ページ)とおおせられているのは、この意味であります。

私どももまた、御本仏日蓮大聖人が忍しのばれた苦難に、心から報恩感謝を申し上げ、偉大な仏法に巡りあえた大歡喜をもって、仏法を語り、未来へ、全人類に流れ通わしめていこうではありませんか。

現在の大難だいなんを思いつづくるにもなみだ、未来の成仏を思うて喜ぶにもなみだせきあへず、鳥と虫とはなけどもなみだをちず、日蓮は・なかねども・なみだひまなし、此のなみだ世間の事には非ず但偏ひとへに法華經の故なり、若しからば甘露かんろのなみだとも云つべし、涅槃經ねはんぎょうには父母・兄弟・妻子・眷屬けんぞくには別かれて流すところの涙は四大海の水よりもををしといへども、仏法のためには一滴をも・こぼさずと見えたり

「現在の大難」とは、佐渡流罪です。一つにはつらい。しかし再往、この大難は法華經の行者として受けている大難である。「未来の成仏」は、現在こうして法華經の行者であることから、絶対にまぢがいはない。いずれにせよ、それを思うにつけ、涙がとめどもなく溢あふれてくるのおおせです。

涙は、奥深い心の思いをあらわすものです。この一つをとってみましても、日蓮大聖人がどれほど甚深無量の思いで、一瞬一瞬を過ごしておられたかが推察されるのであります。

「鳥と虫とはなけれどもなみだをちず」——鳥や虫は、さまざまな音色で鳴き、その幾種類かは鳴き音で有名です。しかし、そこには鳥自身、虫自身の深い思いといったものはない。「日蓮は・なかねども・なみだひまなし」——たいへん有名な御文ですが、この一節こそ、御本仏日蓮大聖人の大慈悲をあらわしているところです。

「此のなみだ世間の事には非ず但偏ひとえに法華經の故なり」と述べられています。日蓮大聖人の涙は、つらいとか、苦しい、悲しいといった世間のことで流す涙ではない。ただ法華經を流布して末法万年の一切衆生を救おうとして流す涙である。「若しからば甘露かんろのなみだとも云つべし」——甘露とは、古代中国の伝説で、理想的な世の中で天が降らせる甘い露といわれ、そこから、あらゆる人間の苦悩をいやし、不老不死をもたらすものとされています。日蓮大聖人の流される涙が三大秘法の大御本尊として結晶し、人々の生命をうるおし、悩みを除き、不老不死の生命を与えてくださっていることは、私どもが身をもって知っている事実であります。

涅槃經ねはんぎょうの文は、三世の生命觀のうえから、われわれが永遠の生命の流転のなかにあって、世間のことでは、いやというほど涙を流すけれども、仏法ゆえに涙を流したことは一度もないというのです。これは仏法に巡りあうことが、いかにむずかしいか、また、たまに巡りあっても、眞実の大信仰心を起こす人が、いかにまれであるかを述べたものです。

日蓮大聖人の御一生は、仏法ゆえの涙の連続であられた。私どもも、仏法のために涙する尊い一生を送ろうではありませんか。

法華經の行者となるは過去の宿習

法華經の行者となる事は過去の宿習なり、同じ草木そうもくなれども仏とつくらるるは宿縁なるべし、
仏なりともこんぶつ權仏となるは又宿業なるべし

いまこうして法華經の行者、実践者となったということは、今世において、たまたま法華經に巡りあつたといった浅い縁ではない。過去世において法華經を行じていたがゆえに、その宿習によって、いままた法華經の行者になっているのだとおおせです。

たとえば、非情の草木であっても「仏とつくらるる」——御本尊とつくられる草木もある。牢獄の格子となる草木もある。宿縁なりと表現されたのは、草木の場合、みずから意識し、働きかけることはできません。どういう人に巡りあうかという、それ自体に宿した縁によって、なにになるか、つくられるかという、それぞれの立場をあらわしてくるのです。

すべて、過去、現在、未来にわたる因果の理法で、一つの結果には、かならずそれをもたらす原因がある。同じ仏といっても、小乗教の仏もあり、權大乘教の仏もありというように、みな使命が違ふ。仏としての力が違ふ。これもぜんぶ宿業、すなわち過去世における行為によつてもたらされたも

のであるということです。

私どもは、いま、このように日蓮大聖人の本眷属^{ほんけんぞく}として、南無妙法蓮華經の広宣流布に励んでいます。この確固たる人生にくらべ、世間の生き方は、相対的なものです。

たとえば、淡雪^{あわゆき}は、太陽の光にたちまちとけてしまう。蜃気楼^{しんきろう}もまた、すぐ消え去るでありました。根無し草の波のまにまにただよう姿も、あまりにも不安定であります。有為^{うゐ}転変^{てんぺん}の無常の人生のなかに、埋没しゆく生き方は、なんと弱く、幻^{まぼろし}のごとく、はかないものでありましょうか。

有名の二字に酔いしれた人の、ひとたび名聞の皮がはがれたあとのみじめな姿、権力の座から一転して脱落していった人のなんと小さな、一瞬の「修羅^{しゆら}のおごり」のごとき姿などを見るたびに、その根の浅さ、底の浅さがあまりにも悲しい。これらの有為^{うゐ}転変^{てんぺん}の、無常の諸相の奥底を流れる妙法の淵^{ふち}源^{げん}に、わが身をすえた人生こそ、もっとも光輝につつまれたものである、と確信すべきでありましょう。われは地涌の菩薩の眷属なり、との自覚に立たれた戸田先生の叫びのなかに、無量の恩師の思いが、私の胸にこだましてくるのであります。

私どももまた、こうした自身の使命に目覚めれば、無限の力がわいてくるはずです。私が頂戴^{ちやうたい}した戸田先生のお歌に「古^{いにしえ}の奇^くしき縁^{えん}や萌^もえ出^いでて 咲けや雄々しく大和桜と」という一首があります。今日の創価学会を築いてきた先輩たちは、皆「古^{いにしえ}の奇^くしき縁^{えん}」を強く自覚して戦ってこられました。

皆さんも、いまこうして、日蓮正宗創価学会の一員として活躍していることは、過去の宿習であると決めて、自己の使命を果たすため、しっかりと励んでください。そこにのみ、所願満足の人生があ

ることを確信していただきたい。

生きよう折伏弘教の尊い生涯

此文には日蓮が大事の法門ども・かきて候ぞ、よくよく見^解ほどこせ給へ・意得^{こころえ}させ給うべし、
一閻浮提^{いちえんぶだい}第一の御本尊を信じさせ給へ、あひかまへて・あひかまへて・信心つよく候て三仏の
守護をかうむらせ給うべし、行学の二道をはげみ候べし、行学^{ぎょうがく}たへなば仏法はあるべからず、
我もいたし人をも教化^{きょうか}候へ、行学は信心よりをこるべく候、力あらば一文一句なりともかたら^談
せ給うべし、南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經、恐^{きょう}恐^{きょう}謹言。

「日蓮が大事の法門」ということについては、講義の最初で述べたとおりです。仏法の肝要であり、
末法流布の大法は何かということ、大聖人が末法の御本仏であること、さらに大聖人の弟子の信心の
あり方はいかにあるべきか等、まさしく大聖人の仏法の大事が凝縮されております。ゆえに「よくよ
く見ほどこせ給へ・意得^{こころえ}させ給うべし」と念をおされているのです。

「よくよく見ほどこせ給へ」とは、深く理解していきなさいということです。「意得させ給うべし」
とは、生命に刻んで、この御書とおりの振る舞い、実践をしていきなさいとの御教示です。「一閻浮

提第一の御本尊」です。大聖人の仏法が一閻浮提第一であり、大御本尊がその肝要中の肝要であることは、絶対にまちがいありません。

あとはわれわれの信心です。ゆえに「あひかまへて・あひかまへて・信心つよく候て」です。

信心は、なりゆきでいつか深まってくるものではない。「あひかまへて」とは、発心をなさいという事です。なにがあらうとも、よし、これを転機に御本尊根本で一步前進していこう、という勇敢な信心が大切です。その信心のあるところ、釈迦、多宝、十方の諸仏の守護が、厳然と働きをあらわしてくるのです。

自身にあっては、仏界の湧現という、もっとも根底的な生命の変革がなされるというのが、釈迦仏の守護にあたります。功德に満ちあふれた生活の実証が多宝如来の守護です。十方の諸仏の守護とは、周囲の人々が正法に目覚め、相互に尊敬しあっていく、理想的な人間共和の社会が現出するという事です。

「行学の二道をはげみ候べし、行学たへなば仏法はあるべからず」以下は、しっかり暗記していただきたい。この御文の「行学」ということについては、さまざまな機会に申し上げてきました。そこでここでは、ただ一点だけ申し上げておきます。

それは「行学たへなば仏法はあるべからず」ということです。仏法は行学のなかにある。行学の実践をする人間の振る舞いのなかにあるということです。経文や書物や文字のなかにあるのではない。仏法は、御書を学び、大聖人の教えどおりに実践する一人ひとりの生命のなかにあられるのです。

その仏法の大運動を展開している人間と人間、信心と信心の鍊磨れんま向上のなかにこそ、現実における
仏法直道の脈搏みやくはくがあることを知らなければなりません。

「私もいたし人をも教化候へ」——自行化他の信心です。自分だけ信心していればいいというのは、
大聖人の仏法の本格派の実践者ではない。自分も実践し、人にも教え、伝えていくのです。

「行学は信心よりをこるべく候」——行学の基もととなるのは信心です。逆にいえば、信心はかならず行
学とあらわれる。この信・行・学の三つが、大聖人の仏法の実践の永遠の規範なのであります。

「力あらば一文一句なりともかたらせ給うべし」——随力演説で、自分の境遇で、自分の全力を出し
て折伏し、一文一句でも仏法を語っていきなさい、ということです。

「一切衆生を救う」との大確信

追つい申候、日蓮が相承そうじょうの法門等・前まへ前まへかき進まいらせ候き、ことに此の文には大事の事どもしるして
進すすまいらせ候ぞ不思議なる契約なるか、六万恒沙ろくまんじょうしやの上首・上行等の四菩薩へんがの変化か、さだめてゆ
へあらん、総じて日蓮が身に当あたての法門わたしまいらせ候ぞ、日蓮もしや六万恒沙の地涌の菩
薩けんぞくの眷属けんぞくにもやあるらん、南無妙法蓮華經と唱へて日本国の男女なんによを・みちびかんとおもへばな
り、經に云く一名上行いちみょうじようぎやう乃至唱導之師とは説かれ候はぬか、まことに宿縁のをふところ予が弟

子となり給う、此の文あひかまへて秘し給へ、日蓮が己証こしやうの法門等かきつけて候ぞ、とどめ畢おわんぬ。

冒頭の部分については、講義の最初にふれておきました。最蓮房に対しては、「生死一大事血脈抄」「草木成仏口決」「祈禱抄きとう」等、ずいぶん重要な法門をしたため、与えられております。なかでもこの「諸法実相抄」は、もっとも肝要な法門をしたためた、とおおせです。そして、こうしてみると、あなともずいぶん不思議な人であるとおおせです。末法御本仏である日蓮大聖人の身に当たあつての法門、御本仏の御境界、実践をそのまましたためた御書をいただいている。きっと、地涌の菩薩の一員として、末法広宣流布に重要な使命を担たなっている人であろう、ということなのです。

「日蓮もしや六万恒沙の地涌の菩薩の眷属けんぞくにもやあるらん」とは、御謙遜けんそんのお言葉です。この背後には、外用は「一名上行乃至唱導いもみようじようぎやうないししょうどうし之師」であり、本地は久遠元初くおんがんじよの自受用身如来じじゆゆうしんにょらいであり、末法の御本仏であるとの御確信が込められております。

「南無妙法蓮華經と唱へて日本国の男女なんによを・みちびかんとおもへばなり」——日本国とおおせであります。意こころは一閻浮提であり、未来永遠の衆生です。末法において南無妙法蓮華經によって、一切衆生を救わんとされた方は、日蓮大聖人しかおられない。ゆえに、大聖人が地涌の棟梁とうりやうであり、末法の御本仏であられる。

「まことに宿縁のをふところ予が弟子となり給う」——かさねて宿縁の不思議を述べて、使命の自覚

をうながされております。

最蓮房さいれんぼうに与えられた他の御書に、つぎのような一節があります。「只今の御文に自今じこん以後は日比ひごろの邪師ひとえしやうしを捨て偏ひとえに正師しょうしと憑たのむとの仰おほせは不審ふしんに覺おぼへ候」(御書全集一三四二頁)——すなわち、最蓮房が日蓮大聖人にお手紙をさしあげて「これから以後は、これまでの邪師をすてて、ただひたすら日蓮大聖人を正師とたのんで、仏道修行に励んでいきます」と誓いの言葉を述べたのです。これに対して大聖人は「不審に覺へ候」——あなたは、おかしなことをいいますね、といわれている。

なぜ、このようにいうのかということについて、続いて述べられているのですが、要約すれば「あなたとは、もともと師弟だったではないか。いま初めての契ちぎりではない。偶然の巡りあいではない」と述べられているのです。

じつは、この「不審に覺へ候」ということに、重大な仏法上の意味があります。最蓮房の表現は、表面的、常識的に考えれば、当然すぎるほど当然なのです。しかし、大聖人は三世にわたる仏法の達観のうえから、深く掘り下げられて、仏法の師弟を論じられたのです。

私どもの立場においていえば、今世においてたまたま大聖人の仏法に巡りあえたと思うべきではないのです。もともと日蓮大聖人との師弟きふなの絆によって結ばれた私たちなのです。私たち仏法兄弟もまた久遠よりの同志であり、兄弟でありました。それが、さまざまな姿、形をとりながら、この世に再び集いきたって、日蓮大聖人の末弟として広宣流布へと使命の道を歩んでいるのです。

さらにいえば、久遠は今にあり、今は久遠であります。ゆえに、現在に久遠の契ちぎりを結ぶわれら

は、永遠に仏法兄弟の道を歩んでいくことを自覚したい。さきの御文にも「三世各別あるべからず」とありましたごとく、現在の姿は久遠を映しだし、未来の私どもの姿を生命の鏡に浮かばせていることを確信します。

ゆえに、ともどもに尊敬しあい、学びあい、励ましあい、異体同心の輪を広げていこうではありませんか。

したがって、皆さん方も「まことに宿縁のをふところ」信心できたのです。それだけの力があり、それだけの責任があります。「この世で果たさん使命あり」です。

「此の文あひかまへて秘し給へ、日蓮が己証の法門等かきつけて候ぞ、とどめ^{おち}畢んぬ」——「秘し給へ」とは、一つには、当時の人々には大聖人の仏法の真髓がわからない。いたずらに不審を起こさせてはならないとの御配慮です。またしっかりと生命に刻み、とどめなさい、ということであります。「己証の法門」——大聖人の己心に悟った法門を書きつけた重書であることを、最後に述べられて、本抄を終わられております。

(昭和五十二年一月「聖教新聞」掲載)

「生死一大事血脈抄」講義

信心の骨髓明かす一書

本抄は、恩師戸田先生が何度も講義してくださった懐かしい御書であります。

戸田先生は「この生死一大事血脉抄を読むのは、とても面倒です。スラスラ読んでわかったとも思うが、またわからなくなってくる。境涯が深まるたびに、読み方が深まってくる」という意味のことを、何回となく語っておられた。

また戸田先生は「日蓮門下にとって信心の骨髓の御書であり、これを離れて広宣流布もなければ信心の核心、仏法の骨髓にふれることはできない」とまでいわれていました。そして、また「地涌の菩薩の実践の明鏡ともいふべき書である」とも述べられておりました。

私も、文証、理証、現証のうえから、それを確信しております。また、私自身、種々の会合で、再三再四、講義をし、思索を重ねてもまいりました。そのたびごとに一節一節の凝縮された内容に驚き

もし、感激を新たにしていまいりました。まことに不思議な一書としかいいようがありません。

今回は、「教学の年」の意義にもちなんで、本抄をめぐるこれまでの思索の集大成として発表しておきます。これもひとえに未来の広宣流布への展望のうえから、本抄によって仏法の原点を深く掘り下げ、信心の血脈という源流を確認しておきたいと願うからであります。

本抄は比較的短い御書であります。じつはたいへん深い内容を含んでおります。「生死一大事の血脈」という仏法の究極の課題をただちに取り上げておられるゆえであります。この課題こそ、釈尊をはじめ仏法三千年の歴史に登場した実践の人々が、^{えいち}叡智の限りを尽くし、情熱のすべてをそそいで考察し、体得しようとして取り組んだ一点であります。

八万四千の法蔵も、また大地微塵^{みじん}ほどの論釈も、そのことごとくが、この「生死」という一つのモチーフをめぐって展開されたものといえます。

最蓮房^{さいれんぼう}は、当時の仏法哲理の最高峰に位置してきた天台の学僧であったゆえ、鋭くこの哲学的課題の原点に迫り、日蓮大聖人の教えを仰いだのであります。本抄は、日蓮大聖人がこのテーマに対して、末法御本仏としての観心の立場から結論を与えられ、さらに一切衆生の成仏のための実践論を明示された御書です。

「諸法実相抄」が、広く諸法と実相、十界と妙法、凡夫と仏という総体的課題を論じ「日蓮と同意」に妙法流布に立ちゆく地涌の菩薩の使命を教えられたのに対し、本抄は、正しく成仏、不成仏という仏道修行の根本目的を論じられ、その成仏への血脈がいかなる実践のなかに流れ通うかを明かされた

御書でもあります。

また「諸法実相抄」が、人本尊開顯かいけんの「開目抄」と、法本尊開顯かんじんのはんぜんしやうの「観心本尊抄」の両書の内容を含んだ御著作であることは、その講義のなかでふれておきましたが、本抄は、御本仏日蓮大聖人御証得の法門自体を明かされたともいえる重書であります。まさしく「境涯の書」というべきでありましょうか。日蓮大聖人御内証の法門をしたためられた書であるゆえに、何回も拝読し、わが生命に刻んでいっていただきたいことを、まず最初に申し上げておきたいのであります。

本抄は、文永九年二月十一日、佐渡・塚原つかはらにおいてしたためられた書であります。対告衆たいどうしゆは「諸法実相抄」と同じく、最蓮房日淨にちじやうです。この人については「諸法実相抄」講義に述べたとおりです。で、対告衆についての解説は略させていただきます。

もとよりこれは御消息文であり、題号の「生死一大事血脈抄」は後世に付されたものであります。冒頭ぼうとうから「夫れ生死一大事血脈とは……」と説き起こされておりますゆえに、まず、この「生死一大事血脈」ということから述べていききたいと思います。

「生死」とは、生まれては死に、死んではまた生まれてくる、すなわち生死を繰り返すこの生命をいいます。

「一大事」とは、もともと根本の肝要という意味であります。「二」とは、たくさんあるなかの一つということではなく、これ一つ以外にないという意味の「一」であります。その唯一無二ゆいいつむにの根本の大事ということが「一大事」なのです。

したがって「生死一大事」とは、生命における最重要の大事ということであり、生命の極底ごくていの法をさすのであります。

「血脈」とは、師匠から弟子へ法が伝えられることを、人間の身体の中で血脈が絶えることなくつらなっていることにたとえていわれたものであります。

仏法における師弟の関係は、師としての仏が覚知した生命の極理を、そのまま弟子の生命に伝えることにあります。ゆえに、師がみずからの悟さとった法を、そのまま弟子に伝えていくことを「血脈」と称するのであります。

したがって「生死一大事血脈」ということを一言に要約して述べれば、生命の究極の法がいかにして仏から衆生に伝えられ、生死を繰り返す衆生の生命に顕現されていくか、ということであります。これこそ仏法のもっとも肝要であり、たんなる観念ではどうしようもない、実践の哲理、感応かんのうの哲理たるゆえんがここにあるわけであります。

「生」は顕在化「死」は潜在化

以上、概説しましたが「生死」「一大事」ということについて、少々私の考えるところを述べてみたい。なお血脈については、本文に入って詳細に論じてまいります。

まず「生死」とは、生と死ということであり、大きく二つの意味があります。一つは、生老病死の

四苦を略して「生死」といい、苦しみをあらわす場合と、いま一つは、永遠の生命観に立って、生まれては死に、死んではまた生まれにくるという、生死を繰り返す当体をあらわす場合とであります。

ここでの「生死」は、いうまでもなく生命を意味しているのであります。生と死は、生命の変化の姿であり、逆にいえば、生と死にしか生命はあらわれないのであります。

凡夫の眼には、生命は生で始まり、死で終わるとしか映らない。しかし、仏法の視点は、この限界を打ち破って、生とあらわれ、死として持続している全体を貫く「生命」そのものをとらえたのであります。

この観点から、仏法では、生命の変化相としての生と死を、どうとらえているのでしょうか。

法華經壽量品に「若退若出」——もしは退き、もしは出ずる、と説かれております。（正しくは「生

死の、若しは退、若しは出有ること無し」と説かれている）この「退く」というのが「死」にあたり、「出

ずる」というのが「生」にあたります。また壽量品では、永遠の生命観から、生命は、退いたり、生

じたり、生まれたり、死んだりするものではない、という説き方をしておりますが、日蓮大聖人の

「御義口伝」では、さらに深く本有の生死、つまり本来もとの生死であり、退出（退く、出ずる）

ととらえるのが、ほんとうの正しい生命観であると説き明かしております。

ゆえに、生命が顕在化した状態を「生」とし、潜在化した状態を「死」ととらえ、しかも、その生

死を無限に持続しているのが、生命そのものなのであります。

生を顕在化、死を潜在化ととらえる仏法の究極の哲理は、なんと、悠久、偉大な生命をみてとって

いることでしょうか。

しかも、その生と死は不二であると説いているのです。生を働かしているものは潜在化した妙なる力であり、また、潜在化した生命は、やがて縁にふれて顕在化し、ダイナミックな生を営み、色彩豊かに個性を発揮していきます。やがて、その生は静かに退き、死へとおもむく。しかし、その潜在化は新しいエネルギーを蓄えつつ、新しいつぎの生を待つのであります。

いわば、生は、それまで休息し、蓄えた生命の力の爆発であり、燃焼であり、やがてその生涯の一卷の書を綴り終えて、死におもむく。その、宇宙それ自体に冥伏し、潜在化した生命は、宇宙生命の力をそこに充電させながら、生への飛翔を待つのであります。

これが、本来の生死であり、この宇宙本然のリズムの根源が、南無妙法蓮華経であります。ところが、その本然のリズムとの波長が合わず、偏向性をおびた生命は、その生死の繰り返しの中に、主として地獄、餓鬼、畜生界等に偏りつつ、ぎごちない運命をたどっていきます。いわゆる宿業といわれるものが、それであり、重々しい鉄鎖にしばられつつ生まれ、また死んでいくのであります。

この偏向した生死を、本有の生死へと転換していくものはなにか。まさしく、それは、南無妙法蓮華経の一法に帰し、その一法から発していくしかないのであります。

一瞬に永遠が凝縮

なお、これは生死を三世という巨視の眼でとらえたものでありますが、私どもは瞬間瞬間にも生死を繰り返しつつ、一生という、より大きな生死を形成しており、小さな生命の生死が大きな生命の生死を支えていることも、知らなければならないと思うのであります。

空間的な尺度で生死をみていった場合でも、たとえば星雲が生々流転を遂げるのは、個々の星の成住壞空の集積であり、その星も、さまざまな生物や山河の生死のうえに、その一生をつくりゆくのであります。

人間の一生をみても、生まれたときに受けた色法を、最後までたもつのではない。大部分の細胞は、生まれては死に、生まれては死んでいく。その生死が新陳代謝をして身体へ若々しい活力を与え、全体としての生命を支えていくのであります。またわれわれの生命に生死が同居している場合もあります。たとえば、爪や髪は非情であります。死といってもよい。その根源は生でありましょう。生から死への移行は水の流れるごとく自然であり、また新しい髪や爪が伸びてくる。この生死の累積が一個の生命となるのです。

このように、生命は個別的、無統一的に存在するのではなく、重層的、統一的存在であり、小さな生命がより大きな生命を形成し、小さな生死の支流が大きな生死の流れに注ぎ込んでいき、やがては宇宙生命という大海に流入していくのであります。生命というものの不思議さを感じざるをえない。

また、時間的な眼でみれば、一瞬一瞬、私どもは生死を体験しているといえる。いまこの一瞬の生命が地獄界であれば、地獄界が「生」で、他の九界は「死」の状態である。ところが病気で苦しんで

いたのが、病氣が治ったとする。うれしくてうれしくてしょうがない。天界です。そうすると、一瞬前の地獄界は、どこにもない。地獄界の死であります。すなわち、地獄界は他の境界とともに死となり、そこには天界の生命が生きいきとあらわれる。病氣が治って、さあ、この歡喜を皆に伝えていこう、信心を教えてあげようというふうに変わっていけば、天界の死で、菩薩界の生というふうに移っていくでありましょう。

瞬間瞬間、十界のいずれかが生、他の九界は死となっており、つぎの瞬間には他の生死と変わっていく。その積み重ねとして一生があるのです。

このように瞬間に生死がそなわるのも、けっして天界が生るときに他の九界が「無」になっているということではない。冥伏^{みょうふく}しているからこそ、つぎの瞬間に「生」となってあらわれるのは、いうまでもないことであります。

したがって、生死といっても、現在の一瞬をどう生きるかの積み重ねであります。永遠も一瞬の連続であり、一瞬に永遠が凝縮されてくる。瞬間の一念が生死の根源となっていくのであり、大きくは宿命転換の原理もそこにあると考察できるのであります。

現在の一瞬を大切にし、立派に生を輝かせ、さわやかにつぎの一瞬の生へと移っていけば、還滅門^{げんめつもん}の生死となり、六道のなかを、暗き生死から暗き生死へと落ち込んでいく生死は、流転門^{りゅうてんもん}の生死であります。そのゆえにこそ、生死の二法を貫く南無妙法蓮華經の仏法によって、一瞬を永遠に生きる生死の転換が必要となってくるのであります。

一大事とは生命の究極

つぎに「いまだいじ一大事」とは、究極ということであります。

この一大事ということの意義に関して、「御義口伝」には「ゆい いまだいじ いんねん唯以一大事因縁」をめぐって詳しく述べられていきますので、参照しておきたいと思います。

まず、一大事の「一」とは、もともと根本の肝要という意味であります。「一」とは、三、五、七といった数字に相對していわれる「一」ではなく、絶対的な意味における「一」であります。いいかえれば、これ一つ以外にはないという意味の「一」であります。

また「大」とは、根本唯一の法、すなわち妙法は、人間生命のみならず、宇宙森羅万象のしんちはんしやういっさいを貫いていることを意味しています。小は微細な微塵みじんから、大は大宇宙の運行にいたるまで、妙法のあらわれである。

この妙法が万法の根源として普遍的な広がりをもっていることを「大」といったのであります。さらに、宇宙と生命の根源である妙法蓮華経は観念ではなく、事実の活動それ自体であります。私たちが生命活動を営んでいるのも、また、春夏秋冬の四季がめぐるのも、すべて妙法蓮華経である。この厳然たる事実としてあらわれていることを「事」というのであります。

この「一大事」とは、また、空仮中のくうけちゆう えんゆうさんたい円融三諦にも開かれます。

「御義口伝」には「一とは中諦・大とは空諦・事とは仮諦なり此の円融の三諦は何物ぞ所謂南無妙法蓮華經是なり」（御書全集七一七頁）とあります。

「一」とは、妙法それ自体をさし、中道となります。

「大」とは、宇宙と生命の根源たる一法が、普遍的に万象をつつみこむ虚空のごとき雄大な広がりをもつことをあらわすゆえに空諦となり、「事」とは、根源の一法といっても、具体的に事実のうえで千変万化する万物のうえに顕現するのであり、仮諦となるのであります。

しよせん、「一大事」とは円融三諦の南無妙法蓮華經になるのです。

すなわち、南無妙法蓮華經とは宇宙と生命の根源であると同時に、全宇宙の森羅万象をことごとく包含する。そして、それは、けっして観念でも、抽象でも、茫漠としたものでもない。現実のうえに具体的な姿をもってあらわれるのであり、この生命の融通無礙な実相を「一大事」というのであります。

さらに、「御義口伝」には「一とは一念・大とは三千なり此の三千ときたるは事の因縁なり」（御書全集七一七頁）とも説かれています。

「一」たる一念を、「大」たる三千万法に、事実のうえに作動させる根本の力を「事」というのであります。この事の一念三千を「一大事」というのです。しよせん、妙法の電源体ともいべき御本尊こそ、一大事であるとおおせられているのであります。

妙法は久遠以来の血脈

御状委細披見せしめ候い畢んぬ

最蓮房、あなたからのお手紙は委しく読ませていただきました、ということです。

ところは佐渡流罪の地であります。客観的には厳しい不自由の地にありながら、日蓮大聖人は、門下一人ひとりの便りを逐一御覧になられ、全生命をかけた指導をされていらっしゃるわけでありま
す。まさしく佐渡の流罪地をも、日蓮大聖人は激闘の地とされ、仏法実践の道場としきっておられる
のであります。

御本仏日蓮大聖人の広大な御境界のまえには、なにものも妨げとなりえない事実を、この一節から
私は実感するのであります。

夫れ生死一大事血脈とは所謂妙法蓮華經是なり

「生死一大事血脈」とは妙法蓮華經、南無妙法蓮華經そのものである、と、まず結論を明示されておられます。

本来、生死一大事血脈とは、天台仏法で論じられた法門であり、それがいったいなんであるかを、最蓮房は大聖人にご質問したのでありましょう。冒頭に「御状委細披見」とおおせられているのは、最蓮房が天台学僧として学んだこと、そして、それが結局、どういうことかわからなくなってしまった経緯などが、縷々述べられてあったにちがいありません。

そうした繁雑な論議に対して、大聖人は一言のもとにこの奥義を明かし、迷妄を打ち破っておられるのであります。

結論だけみれば簡単なようではありますが、そこにいたる過程は、たいへんな哲理を経なければならぬ。それを、以下に示されていくのであります。

其の故は釈迦多宝の二仏宝塔の中にして上行菩薩に譲り給いて此の妙法蓮華經の五字過去遠劫より已来寸時も離れざる血脈なり

なぜ妙法蓮華經をもって「生死一大事血脈」の体とされるか。その理由の第一は、法華經の儀式において末法に流布すべき法体として説かれたのが妙法蓮華經である。そして、この付嘱を受けて末法

に弘通する上行菩薩にとって、久遠本地の生命が妙法蓮華經であるとのおおせです。

したがって、この御文は「釈迦多宝の二仏宝塔の中にして上行菩薩に譲り給いて」が一往の教相の立場であり、「過去遠遠劫より已来このかた寸時も離れざる血脈なり」が再往の觀心の立場という、二重の構造になっているわけであります。

上行菩薩は、一往文上の辺では、法華經の虚空会こくうえで釈迦、多宝の二仏から妙法蓮華經を譲り受けるという儀式をふみます。しかし、再往文底からみれば、上行菩薩の本地は久遠元初の自受用報身如来じじゅうほうしんにょらいです。本来、妙法の大地に住し、人法体一である、もっとも根本の仏なのであります。ゆえに「過去遠遠劫より已来寸時も離れざる血脈」なのです。

むささんじん無作三身如来の内に脈打っているその生命こそ、妙法蓮華經——南無妙法蓮華經にほかならないのであります。

「妙は死、法は生」と解明

妙は死法は生なり此の生死の二法が十界の当体なり

つぎに、総じて十界の一切衆生、いいかえれば私ども凡夫の、この生命の根源の体——すなわち、

われわれの「生死一大事血脈」もまた、妙法蓮華經にほかならないことを示されるのであります。

「妙は死法は生なり」とは、生死の二法は即妙法なり、ということです。生まれる、死んでいく、この生死という生命のあらわす姿は、そのまま妙法なのです。

生まれては死んでいくこの現実の生命をはなれて、別に妙法があるのではない。この生命自体が妙法です。そして、この生死の二法を現ずる妙法の生命がまた、十界の当体でもあります。

つぎになぜ「妙」を死、「法」を生とされるかといいますと、死の状態にある生命を、私どもは思議することができません。どこに、どのようにして存在しているのか。宇宙のなかに溶け込んで存在しているのだときかされても、容易に理解しがたいことであります。ゆえに、死が「妙」になるのです。「妙」とは不可思議ということです。

これに対して、生きている状態というのは、さまざまな働き、形、姿をもってあらわれます。しかも、その働きは、十如是の法によって示されるように、法則性をもっています。長いあいだ、食事をとっていなければ、なにか食べる物が欲しくてたまらないという餓鬼界の状態を示します。人にバカにされればハラが立つ。当然の、生命の法則です。したがって、生は「法」になるわけです。

「法」という漢字は「サンズイ」に「去る」と書く。水が流れるという意味になる。水は平らかで悠久であり、公平にして全宇宙に普遍的な意味をもっており、「去る」は久遠の過去から永劫えいごうの未来への流れを象徴しているかのようにあります。また、悪を去らしめるための存在という意味を含んでいるとの古文書もあります。

山深き溪流からほとばしる飛沫^{ひまつ}も、とうとうたる大河のうねりも、瞬時としてとどまることなく、上流から下流へ、そして大海へと、注ぎ込んでいく。仏法の眼は、起きては滅し、隠れては顕れる森羅三千の現象を、因果の法でとらえております。したがって、事物の流れのなかで「法」をみているということになる。静止した、抽象的な法をみるのではないのであります。そのゆえに、法を水の流に象徴してとらえたのでありましょう。現実生活に即し、生命の実感のなかに法はある。「諸法」を現象と訳すのはそのゆえであります。

一般的な感覚からいえば「法」はむしろ「死」ととらえられるかもしれない。万有引力の法則とか、相対性原理であるとか、経済学の法則という「法」は、現実的な生活における事象を総合、抽象化したものであり、それ自体は外にあらわれないものと考えるからであります。

しかし、仏法における考え方は、現象に即して法をとらえているところに特質があり、また抽象的で現実から遊離した哲学に陥^{おち}るのではなく、生活法として定着していくゆえんもここにあるのであります。この考え方に立ったとき「法は生なり」というおおせが明らかになってくると思う。

さて、この「現象」そのものをみるだけでは、なんら他の学問と変わるところはない。川の流れを調べるのは科学の分野であります。川の流れを起こしている根源の力を知ることこそ、宗教の意義がある。その根源の力は、けっして現象から遊離したものではない。しかし、姿や形としてとらえられるものでもありません。「思議」できないものであります。それを「妙」と表現したのであります。

又此れを当体蓮華とも云うなり、天台云く「たま当に知るべしたしやう依正の因果は悉く是れ蓮華の法なり」と云云此の釈に依正と云うは生死なり生死之有れば因果又蓮華の法なる事明あきらけし

生死の二法をあらわして存在している十界の当体を「当体蓮華」ともいうのであります。生死が「妙法」で、それを現する体が当体の「蓮華」ですから、十界の生命は、そのまま「妙法蓮華」であります。

これを天台の法華ほつげけんぎ玄義の釈を引いて、その証文とされております。すなわち「依正の因果は悉く是れ蓮華の法なり」と。「依正の因果」とは、依報、正報によって成っているこの生命のあらわす因果、ということであります。すなわち、現実に存在する生命——いいかえれば、十界の衆生をいうのであります。

現実に存在する生命を、タテに時間の流れのなかでとらえれば、かならず生まれては死んでいきますから「生死の二法」になります。一方、ヨコに空間的な広がりの中でとらえれば、依報、正報のかかりあいとなります。ゆえに、大聖人は、天台の場合は、ヨコに依正としてとらえているけれども、それはタテに生死としてとらえてもまったく同じであるとして「此の釈に依正と云うは生死なり」といわれているのであります。

この依正とも生死ともとらえられる現実の生命は、因果の法をあらわしていく。そして、この生命

の因果の法はかならず「因果俱時^{ぐじ}」であって、したがって「蓮華の法」となるわけであります。

ここで「蓮華の法」「因果俱時」ということについて、申し上げておきたい。

蓮華は、華^{はな}と同時に実を生ずるところから、因と同時に果があるという原理を象徴することは、よく知られているとおりであります。

しかしながら、では因果俱時とは、いったい、いかなる場合をいうのか、という点を正しく理解しておく必要があります。通常の物理・化学的現象、あるいは社会的事象においては、原因と結果はかならず異時であります。

因果俱時とは、生命事象、それも法華経がはじめて明らかにしている生命の法に認められることなのです。「観心本尊抄」に、十界について述べられた御文があります。いわゆる「瞋^{いか}るは地獄・貪^{むさば}るは餓鬼・癡^{おろか}は畜生・諂^{てんこく}曲なるは修羅・喜ぶは天・平^{たいら}かなるは人なり」(御書全集二四一頁)等とおおせられているところであります。

これは「瞋^{いか}る」というその生命の働きが因であり、それが地獄界であるという果をもたらすというのである。しかし、瞋^{いか}るを起こして、のちにいつか地獄という果を生ずるというのは爾前経の説き方です。法華経は、瞋^{いか}るにとらわれているそのときに、地獄という果を得ているというのであります。これが因果俱時です。

この場合、瞋^{いか}るというのが正報の働きであるのに対し、その境涯が地獄界であるというのは依報の面からとらえたことになります。正報が因で、依報が果であり、ゆえに天台は「依正^{えしやう}の因果」と表現

しているわけでありませう。

同様にして、妙法を信ずるということが因となって、その瞬間、仏界であるという果を生じているのです。ここに、成仏ということにおける因果俱時の原理があるのであります。

生死の二法は一心の妙用

伝教大師云く「生死の二法は一心の妙用・有無の二道は本覺の真徳」と文、天地・陰陽・日月・五星・地獄・乃至仏果・生死の二法に非ずと云うことなし、是くの如く生死も唯妙法蓮華經の生死なり、天台の止観に云く「起は是れ法性の起・滅は是れ法性の滅」云云、釈迦多宝の二仏も生死の二法なり

伝教大師は、天台法華宗牛頭法門要纂のなかに、こういつている。

——生まれるのも、死んでいくのも、一つの心のあらわすところの不可思議な働きである。この世界に生命として存在するのも、死んで、無の姿になるのも、仏のもともとの覺りのあらわす特質である——と。

ここで伝教大師のいつている「一心」とは、妙法蓮華經のことであります。また「本覺」とは、こ

の妙法を覚知した仏の境界をさします。生死の二法とは、生まれてくる、死んでいくという働き、変化をいいます。これに対して「有無の二道」とは、この世に有る、この世に無いということであり、存在の仕方をいいます。

あえていえば、生によって「有」となり、死によって「無」となるわけです。しかし、この「無」とは絶対無ではない。仏法では「空」の意味であります。

ともあれ、ともに妙法蓮華經のあらわすところの働きであり、妙法蓮華經のとり二つの存在の仕方といえます。このことは、逆にいうならば、万物は生死の二法、有無の二道を示していくけれども、その体は、常住不変の妙法蓮華經そのものであるということなのであります。

以上が、あくまでも、この御文の基本的把握となりますが、これをふまえて、信心、生活のうえに約して「生死の二法は一心の妙用・有無の二道は本覺の真徳」の文を論じてみたい。

「一心」とは信心の一念であり、御本尊と境智冥合し、南無妙法蓮華經と唱える私たちの一念であります。この妙法を信行する強い一念によって、生死の二法を支配しきっていけるということであり、す。生死の大海におぼれているわれわれの生命を、妙法によって確立するならば、その生死の大海を悠然と泳ぎきっていくことができるということです。また、有無という現象界も、妙法の一念を確立することによって、思う存分に乗りきっていけるということです。

私たちが「一心の妙用」によって生死の二法を転換するといっても、生死そのものがなくなるわけではない。不老不死の仙人のような存在になるのではないのです。あくまでも一介の市井の人として

の一生は、なんら変わることはない。しかし、暗きから暗きへと煩悶する生死ではなく、本有の生死を樂しんでいけるのが、生死の二法を支配するということであります。

「御義口伝」にいわく「自身法性の大地を生死生死と転ぐり行くなり」（御書全集七二四頁）と。

私たちの三世にわたる人生は、車に乗って大地を生死、生死とめぐっていくようなものである。しかし、泥沼のなかや岩のゴロゴロした道をガタガタの車で苦しみながらめぐっていくのか、ハイウエーを軽快にさわやかに走っていくのか、そこに同じく生死といっても違いがある。前者が無常断滅の生死であり、後者が本有の生死であります。私たちは本有の生死を送っていくことができる。それが一心の妙用なのであります。そのためにまず、勤行の実践が必要となってくるのであります。

すなわち、実践的立場からいえば、いかなる生死の二法を現出し、いかなる有無の二道を歩みゆくかを確かに決定づけるものこそ、自身の妙法への一念の姿勢いかなであり、御本尊への信の強弱です。現象の世界には現象の世界の法があり、因果律があることは当然であります。その生死、有無という現象世界にあらわれた自身の総体を、福德に満ちた当体へと回転させるか、暗やみの淵へと沈没させるか。その、いわば舵をとり、方向を与えるものこそ、自己の信心の一念であります。

「命已に一念にすぎざれば仏は一念随喜の功德と説き給へり」（御書全集四六六頁）と説かれるように、

妙法にめぐりあって歓喜する一念、広宣流布という未曾有の仏事に喜び勇んで邁進していく信心実践のなかに、無量の功德が開かれ、人間としての勝利の人生が開かれていくことを知るべきであります。勇んでなす一念と、受け身の一念と、その差はほんのわずかですが、結果としては、現実

世界において莫大な開きとなつてあらわれるのであります。

「天地・陰陽・日月・五星・地獄・乃至仏果」うんぬんとは、この世界に存在するあらゆる存在も、この世界が刻々とあらわしゆく変化相も、生死の二法を現じないものはない、ということです。天と地、すなわち私どもの生きているこの大地も、限りなく広がる宇宙の空間も、やはり生死の二法をあらわしています。太陽や月も、生じ、やがて死滅していくのです。

五星とは、現代的に言えば、地球と同じく太陽の周りをまわっている兄弟の星たち、いわゆる太陽系の惑星です。歳星、熒惑星、太白星、辰星、鎮星を五星といい、「立正安国論」では五緯という呼び名を用いられております。

太陽に近いほうからいえば、水星にあたるのが辰星、金星が太白星、火星が熒惑星、木星が歳星、土星が鎮星です。今日、天体望遠鏡によってその存在を知られている天王星、海王星、冥王星は、當時は知られていなかったもので、でてこないのです。

ともかく、こうした万物、万象の体が妙法蓮華経ですから、これら万物の示す生死は、しよせん妙法蓮華経の生死なのです。

天台大師が摩訶止観に「起は是れ法性の起・滅は是れ法性の滅」といつているのも、まったく同じ意味であります。法性とは妙法蓮華経ということですが。森羅万象の起、滅——すなわち顕れてくるのも、滅していくのも、すべて妙法蓮華経の起滅にはかならない、との意であります。

「釈迦多宝の二仏も生死の二法なり」——釈迦は生をあらわし、多宝は死をあらわしております。法

華經の虚空会こくうかいの儀式において、宝塔の中に座している釈迦、多宝の二仏自体、生死の二法をあらわしているのだとのおおせであります。

境智の二法に約せば、釈迦は智、多宝は境であります。ゆえに、能動的主体の智の表象にあたる釈迦は生、所証の境の表象である多宝は死となるのです。

大聖人の弟子檀那の肝要

然しかれば久遠実成くおんじつじょうの釈尊かいじょうぶつどうと皆成仏道の法華經と我等衆生との三つ全く差別無しと解とくりて妙法蓮華經と唱え奉る処ところを生死一大事の血脈とは云うなり、此の事但ただ日蓮が弟子檀那だんな等の肝要なり法華經たもを持つとは是なり

これまでのところをうけて、結局、いかにすれば、仏法の極理であり、仏の悟達ごだつの法であり、しかもわれわれの生命の体でもあるこの生死の一大事が、衆生のなかに脈々と湧現ゆげんしてくるか、という実践法を述べられるところであります。

ここでは、そのなかでももっとも根本となる、信心の姿勢をいわれていると考えるとよいでしょう。すなわち「久遠実成の釈尊」——これは本果の立場の仏であります。久遠実成の釈尊自身の生命の体

も「妙法蓮華經」である。

「皆成仏道の法華經」については、この本果の仏が己心の悟達をそのままに説いた法であり、十界の衆生は皆、この法を信受することによって、己心の妙法を覚知し、成仏することができる。この「皆成仏道の法華經」の体もまた「妙法蓮華經」にほかなりません。

「我等衆生」もまた「天地・陰陽・日月・五星・地獄・乃至仏果・生死の二法に非ずと云うことなし」とお示しの個所に対応しております。凡夫である「我等衆生」の体もまた「妙法蓮華經」であることを、明確に教示されたところであります。

したがって、この「久遠実成の釈尊と皆成仏道の法華經と我等衆生との三つ」という表現は、一往、法華經本門の五百塵点劫成道の釈尊と、二十八品の法華經と、「我等衆生」とみられましょうが、再往、元意の辺は、久遠元初の自受用報身如来即日蓮大聖人と、文底独一本門の大御本尊と、そして私どもの生命とがともに南無妙法蓮華經であり、この三つはまったく差別はないと「解りて」と拝すべきであります。これを、差別があると思っていくのは、真実の仏法ではありません。

仏は、すばらしい特別な存在であるとし、われわれ衆生は、卑しく醜い存在であって、とうてい仏になどなれるはずがないと考えるのは、大なる誤りであります。

また、法華經は、架空の儀式、説法であり、今日のわれわれの生活や人生とはまったく無縁のものであるとするのも、この御文のお心に背いているといわなければなりません。

いわんや、文底の立場で、日蓮大聖人とわれわれのあいだに、越えることのできない隔絶があるよ

うに考えたり、御本尊をよそにみていくこともまた、みずから「生死一大事の血脈」を途絶していることになるのであります。

しかしながら、この「三つ全く差別無しと解りて」といっても、それを事実のうえで「解る」——理解するということろまでは達していないのが凡夫であります。その場合「解りて」とはどういうことかといえ、いしんとくにゆう「以信得入」「いしんだいん以信代慧」と示されるごとく「深く信心をとって」ということになるのであります。

ともかく、御本仏日蓮大聖人の御生命も南無妙法蓮華経であり、その大聖人の御生命をそのまま「すみにそめながしてかきて候」(御書全集一一二四頁)とおおせられている御本尊も南無妙法蓮華経である。

そして、もったいないことでありますが、私ども一人ひとりの生命もまた、同じ南無妙法蓮華経であると、こう信じて、南無妙法蓮華経と唱えるとき、私どもの生命に生死一大事の血脈、すなわち南無妙法蓮華経の大生命が脈々と湧現してくるのであります。

これこそが、日蓮大聖人の弟子檀那だんな——すなわち日蓮大聖人の仏法を實踐する者にとっての肝要である。「法華経を持つとは是なり」——これ以外にないということなのであります。

「臨終只今にあり」と自覚

しよせんりんじゆうたいたい
所詮臨終只今にありと解りて信心を致して南無妙法蓮華經と唱うる人を「是人命終為千仏授
手・令不恐怖不墮惡趣」と説かれて候

「臨終只今にありと解りて」ということは、たんに肚を決めるというのではない。「解りて」とは、
事実がそのとおりであることを前提にし、この生命の眞実の姿を見極めるという意味であります。

だれしも、まだまだ、自分の人生は先があると思つてゐる。だが、いつ死がおそつてくるかは、だ
れも知らない。一瞬の後には死んでゐるかもしれないのです。これが、生命の眞実の姿です。

いわんや、かりにまだ二十年、三十年、あるいは五十年と寿命のあることが確かであるにしても、
永遠からみれば瞬時であるといわざるをえないであります。これもまた「臨終只今」です。

この事実を理解したとき、心ある人ならば、いま生きて仏法を受持してゐることの重みを、ひしひ
しと感ぜずにはいられないはずです。目先の榮華、今生の名聞名利は問題ではない。永劫の未来のた
め、死してなお消えることのない福運を積むため、眞実の人生の目的を凝視しながら、信心いぢずに
励まざるをえないであります。

これが、信心の究極の姿勢であります。といつて、では、仏法者であり、社会人であるわれわれ
も、文字どおり、いっさいをかなぐり捨てなければならぬかというところ、そうではありません。広宣
流布という大目的に向かつて、信行に励みゆくとき、すべてが妙法のもとに生きてくるのでありま

す。それが、私どもの「臨終只今にあり」と解きった生き方があります。

瞬間瞬間、この決意の持続に生きていくとき「千仏授手・令不恐怖不墮惡趣」となるのです。千仏が手を授けてくれたように、安心立命の境地になり、地獄、餓鬼、畜生、修羅などの惡趣に墮おちることもなくなるのです。

「是人命終為千仏授手」のこの文は、一往は一生の終わり、死の瞬間において、このようになるということでありますが、再往は、生きているあいだの、瞬間瞬間の境涯についていわれたものであることを知るべきであります。

「所詮臨終只今」ということは、只今に全生命をかけていくということにはかならない。日々を懸命に生きていく、広宣流布に、一生成仏へ、わが生命を燃焼させながら、戦いぬいていくということがあります。

一人の人に仏法対話をしていくにも、今を逃のがしたら、いつまたじっくり話せるかわからない、また、この人の宿命転換は今しかない、と真剣に接していくならば、その人生はすでに臨終只今の精神に通じているのではないでしょうか。御本尊への唱題にあっても、教学を学ぶにしても、激励の手紙を書くにしても、一瞬一瞬、真剣に取り組んでいくことがなによりも大切なのです。

思うに一生といっても、現在の一瞬の積み重ねであります。きょうを充実させられない人に、あすの開花はありません。瞬間を大切にできない人がいくら百年の大計を口にしても、絵にかいた餅もちにすぎない。過去の因も未来の果も、現在の一瞬の諸法実相に凝縮されているのであり、その一瞬の転換

が過去久遠よりの罪障の消滅も、未来に続きゆくであろう永劫の福運も決定していくものです。そのカギが「臨終只今」の信心を確立するかいなかにあるのだという、宿命転換の原理を教えられている御文と拝します。

この法華經勸発品第二十八の文を、文字どおりとった場合は、命終したとき千仏が手を授け、決して恐怖させることもなければ、三惡道、四惡趣に墮とさせることも絶対にないということです。

このように說かれているのは、死んで宇宙に溶け込んでいく生命は、もうみずからの意志ではいかんともできないからです。その人の生命状態そのまままで業果につつまれなければならぬ。絶対的な厳しさです。そのときに、千仏が手を授けて守護する。これほど力強いことはないにちがいない。

また、これはたんに手を授けられるということのみではなく、永遠の生命を確立できるということでもあります。永劫不壞の絶対的幸福をつかめるとおおせなのです。

もちろんそれも、臨終只今の信心の持続があつてこそであり、「心の固きに仮りて神の守り則ち強し」であることを忘れてはなりません。

御本尊への信と唱題もなくて、しぜんに千仏が守りにきてくれるということではないのです。ここは一往、命終した命、すなわち受け身の生命のゆえにこゝにいわれているのであり、根本精神は、あくまで自身が、唱題の行に励むことにより、自分自身の胸中にある千仏の守りをみずからあらわしていくということにあります。

「千仏」とは生命守護の働き

悦ばしい哉一仏二仏に非ず百仏二百仏に非ず千仏まで来迎し手を取り給はん事・歓喜の感涙押え難し

この文は、念仏を打ち破っているところです。念仏においては、念仏を称えて死んだならば、阿彌陀仏の使いとして観音、勢至の二菩薩が、雲に乗って迎えにくると説いている。それを信じていた大衆が多かったから、そのような幼稚な教えで民衆を欺いていた念仏に対する激しい憤りを含めていわれているのです。

一仏とか二仏というようなものではない。まして二菩薩などというのではない。千仏が手を授けて守るのである。ぜんぜん規模が違う。つまり、どんなに三惡道に墮ちる生命であっても、浮上させていくということです。

また「御義口伝」には「千仏とは千如の法門なり」（御書全集七八〇頁）とあります。すなわち、宇宙のあらゆる生命守護の働きが作動して、法華經の行者を守護するのであるという意味になります。

このように、百界千如といわれているのは、「法」の観点からとらえられているのであり、法の原

理にかなうならば、宇宙のさまざまな働きが、その人の生命を守るように働くということ。しかも、その働きを起こさせるのは、一人ひとりの生命力であります。したがって、法華經の精神は眞実の自立を説いているのです。

この「千仏来迎^{ちいぶらいごう}」をさらに身近なものとしてとらえるとき、このようにも考えられます。すなわち「千仏まで来迎し……」とは、人が亡くなったときに葬式をしたり、あるいは追善回向^{えんこう}をするわけですが、そのさい、故人を慕^{した}って多くの友人、知人が、題目を送ってくれるということ。生前、崇高な使命の道とともに歩み、苦しいときも、喜びのときも、嵐^{あらし}のときも、希望の春も、ともに進んできた同志は、多くの尊き同志から題目の回向を受けることができるのです。

信、不信の差異は厳然

法華不信の者は「其人命終入阿鼻獄^{ごにんみょうじゅうにゅうあびごく}」と説かれたれば・定めて獄卒^{ごくそつ}迎えに来て^{きた}て手をやり取り候はんずらん浅^{あさ}猿^{さる}浅^{あさ}猿^{さる}、十王は裁断し俱生神^{くしやうじん}は呵責^{かしやく}せんか

それに比べて法華經を信じない人は、法華經譬喩品^{ひゆほん}にあるとおり、命終したならば、地獄のなかでももっとも重い阿鼻地獄に墮^おちるのであり、千仏が手を授けるのではなくして、獄卒が手を取って迎

えるというのであります。お迎えが獄卒ではやりきれません。妙法を信ずるか、逆に敵対するかは、これだけの決定的な差を生みだすのです。

生きているあいだは、いくら権力をほしいままにしようが、富を蓄えていようが、名声を博していようが、命終したならば、いっさい関係ない。一個の赤裸々な人間です。懸衣翁、奪衣婆によつてはがされてしまう。その人がいかなる行いをしたかという「業」がそのままあらわれて、その果報を受けなければならぬのです。

その告発は俱生神がして、十王が審判するという。俱生神は人が生まれると俱に生ずる神であり、その人の善悪を、もろさず閻魔王に報告するという。いまでいえば検事です。十王は冥途の十人の王で、初七日から三周忌までしだいに裁断するといわれております。閻魔王もその一人であります。これは裁判官です。世間法や国法ではいい逃れできることもあろう。しかし、仏法では絶対にできない。俱生神——同生同名と考へてもいいのですが、生まれたときから監視しているのですから逃れようがありません。

これは仏法が生命の内奥の因果を教えているものであり、嘘が通じないことを示しているのです。一般に、地獄は譬え話であり、生きているあいだの行いを正させるために説かれたものであるとされております。地獄として絵画的に示されている話はそのとおりであるかもしれない。しかし事実はどうであろうと、そういう生命の境界があることは真実である。日々の生活のなかに身を裂かれるような苦しみを味わう等活地獄もあれば、周囲から圧しつぶされるような衆合地獄、身を焼かれる焦熱

地獄等、あらゆる苦しみが充満しているのは、悲しいが嚴然たる生命活動の事実です。

三世が変わらざる時の流れであるならば、死後においても、なんら違ふことはあるはずがない。生命自体が苦樂を受けなければならないのは理の当然でもありません。

懸衣翁や奪衣婆も、永遠の生命の厳しき因果觀からみるならば、あらゆる外見的な虚飾が、死後の生命においてはなんの役にも立たないこと、生命内奥の眞実のみの世界であることを教えているのであり、十王や俱生神も、一瞬一瞬の色心にわたる言動が、すべて業として刻印されていることを教えた、優れた譬えとして理解されるのであります。

この觀点からするならば、妙法への不信誹謗の行為は、自己自身の生命力を損減させる行為であり、やがては生命力をまったく失ってしまつて、繫縛不自在、すべてに縛られて身動きできない泥沼の生命になっていくのです。

いかに恐ろしいといつて阿鼻獄ほど恐ろしいことはない。その地獄のありさまを聞けば血を吐いて死ぬほどであるといわれております。これは地獄の恐ろしさをいったものであるとともに、生命内奥からの不幸は、外見のそれと違って、筆舌に尽くせないものがあるということでもあります。

生きていくということ自体が苦しい、氣力が衰えてくる、希望を失う——これほど哀しく惨めな人生はない。なにをしても、ぜんぶうまくいかない。「聖人御難事」に述べられている「始めは事なきやうにて終にほろびざるは候はず」(御書全集一一九〇頁)とはこのことです。

建物が、外から台風等によつて打撃をうけた場合はよくわかるし、また修理することもできる。し

かし、内から腐っていった場合は、一見してわからない。しかし、着実に崩れていくし、それを直すことはたいへんな困難です。

法華誹謗は、わが身の宮殿を、内部から腐らせていくようなものである。もっとも恐ろしい仕業であります。まさしく獄卒が迎えにきて手を取る恐ろしさに勝るとも劣らないであります。

ゆえに、いかなる苦しいことがあっても、悲しいことがあっても、御本尊からは絶対に離れてはならない。福德を消し、仏種を永く断じてしまうからです。

仏法では臨終という問題を重視している。臨終は、その人の一生の総決算であるとともに、未来世を踏みだす第一歩であるともみているからです。

諸法実相で、その死の瞬間に、一生の善悪の業績が一つも残さず、その相にあらわれる。怖いくらいです。少しのごまかしもきかない。臨終の明暗は、そのまま、今世の姿の諸法実相であり、未来を映しだす鏡であります。

「夫^{それ}以^もみれば日蓮幼少の時より仏法を学び候しが念願すらく人の寿命は無常なり、出る気は入る気を待つ事なし・風の前の露尚譬えにあら^なず、かしこきもはかなきも老いたるも若きも定め無き習いなり、されば先臨終の事を習うて後に他事を習うべし」(御書全集一四〇四頁)とは「妙法尼御前御返事」の一節です。

私は、真剣に、かけがえのない「今世の生」を生きんとする者のあり方を教えられた御文であると拝するのです。

識者も志向する仏法の精髓

「臨終」がなぜ大事かということについては、最近では、欧米でもいろいろな学者が、さまざまな角度からこの点について研究をしています。

シカゴ大学の精神科医学部の教授をしていたエリザベス・キューブラー・ロス女史は、プロテスタントで、死後の生命を信じることはなかった方ですが、最近十一年間に一千人におよぶ患者の死に接するにつれて、どうしても死後の生命を信ぜざるをえなくなってきたと告白しています。

ロス女史は、死んだものと一度宣告された人が蘇生^{そせい}してから、その間になにが起きたかを詳細に語ってもらい、つぎのようにレポートしています。

——肉体的死の瞬間、彼らは物理的な肉体から抜けて浮遊する。彼らは、ベッドに寝ている自分自身の姿を見ることができ、種々の情景を識別できる。だれが部屋へ入ってきたか、どの医師が、どの看護婦が部屋にいたかをぜんぶ知っている。患者は、すでに生命兆候^{ちやうこう}がすべて失われているにもかかわらず、周囲にいる人たちの着物の色まで識別できた——。

このような現実の体験を、ロスに話したという。これは、一種の肉体離脱^{りだつ}体験である。

——また、死ぬときの最初の瞬間は、だれでも気持ちのよい状態になる。(苦痛の極限からのがれられたという意味で)しかし——つぎの瞬間以後が問題である。

たとえば、キリスト教では、天国と地獄を説くが、たしかに、そのような差がやってくる。しかし、キリスト教に述べられている「天国」と「地獄」の様相と、実際に死から蘇^{よみがえ}った人の体験とはまったく異なっている。（その人たちのなかに、キリスト教徒もいた）

死んだ後——生命兆候がなくなった後——彼らは、ひとつの光源をめざしていく。そのとき天国とか地獄といわれるような状態が訪れる。しかし、その状態は、生命の外側から訪れるのではない。彼らは自分の生を反省するように強要されるのである。

ちょうど、テレビの画像を見ているように、その人の眼前に、一生のことが現れては過ぎ去っていく。おこなった行為のみならず、思考の内容まで、走馬灯のように展開していく。

その人が生涯になしたこと、考えたことが、ことごとく見えるのであるから、ある人にとっては天国、また、他の人にとっては地獄を経験するといってもまちがいはない。

しかし、他者（たとえば、絶対神）が、その人を裁くのではない、その人自身が自分を裁くのである——という体験を、死から蘇った人は語るのである。

このような体験をふまえて、なしたことはけっして消えない、という仏法の業論^{ごうろん}は、すばらしい、美しい真理である。自分が種子のなかに注ぎ込んだものは、すべて、その人が刈^かり取るところのものである——私は、ほんとうに、それを信じる。それは、絶対的な法則である、とロスは述べております。

ロスの、仏法の業論への信は、彼女自身の患者と接した長い体験からくるものです。すべて、科学

的に確かめることができる、と彼女はいうのです。

ロスは、自分の考えが、仏法と一致していることを聞いてひじょうにうれしいと述べ「生きているうちにしたこと、悪いことが全部自分に返ってくるのだということを知ることが是非とも必要です」「もし、人びとがこういう体験を知っていたら、生きているうちに、もっと質の違った、高い人生を送りうるができるであろうと考えるからです」とも語っております。

こうした肉体離脱体験の一例として、ヘミングウェイも、ひどい怪我をしたときにみずからが経験したと、文学者らしい表現でつぎのようにいっています。

「わたしは、ちょうどひとが絹のハンカチの片隅をつまんでポケットからひっぱりだすように、自分の魂らしきものが、肉体からすいと出てくるのを感じた。それは飛びまわり、それから帰ってきて、再び体内に入り、そしてもうわたしは死んではいなかった」

彼は、この体験をそのまま「武器よさらば」で使っています。

評論家の松田道雄氏の編集した「死」と題する書のなかに、死の幻影をみたという体験があります。小林勝氏という作家の体験です。

長い体験記録なので、内容を要約しながら紹介してみましよう。

生死にかかわる手術をして、その後、麻酔が切れはじめたところから、その手記は始まっています。「十日の深夜から意識がもどってきたが、それと共に苦痛が来た。それは怒濤といってよかった。それに襲われると眼の前も頭の中も、真っ赤になった。血の色である」

「そして痛みの極みに達した時、私はすうっと飛びはじめたのを感じた。私はその時、私の姿をはっきり見た。私がこなごなに割れて、燃えつきた黒いかたまりになって、果てしない空間を、とてつもない速さで飛んでいくのである。私は地球を離れたと感じていた。(中略)私は空間を飛びながら、ああ、おれの地球はあたたかだった、と思っていた。

とてもつめたい。いっそうつめたいところへ飛んでいく。そして私の前方は無限の宇宙空間であり、うす青い色からしだいに濃い青へ、そして黒々とした色へとつづいていく。そうだ、このまま飛びつづけて、あそこへおちこんだ時(中略)これが死なんだ、と私ははっきり思った」

「そこにはもう、ただ一つのことを除いては、どのような人間感情も存在しなかった。(中略)私の親しい人々に対しても、また私自身についてすら、喜んだり悲しんだりするすべての感情はもはや消滅していた。これはいまにして思えば全く予期しないことであつた。親しい多くの人々と別れて、淋しいとかつらいとか悲しいとか、そういった感情はここにくると、もう存在しなかったのである。

ただ一つだけ、最後まで残っていた感情がある。それは、何とも云えない無念さであつた。こうやってついに生命に別れを告げるのか、という確認と同時に、かつて人間であり、ただ一度の生を生きたというその証拠を、自分がこうしてバタツと消えるにしても、やはりつづいていくであろう人間の歴史の上に、たとえどんなかな爪あとしとしてでも刻むことなくして飛び去らなくてはならないという無念さであつた。

これは、意外だつた。自分なりに精いっぱい生きてきたつもりだつたのに最後にそんなものが残る

とは夢にも思わなかった」

「生のまさに終えんとするそのどたん場で、はじめて愕然^{がくぜん}として云い知れぬ無念な思いを抱いて死に突入するほど、凝縮された絶望はほかにあるまいと思えるのである」

喜怒哀楽の感情さえも消えたあとで、ただ一つ残る無念さという感情——生命それ自体からわきあがる生命感でありましょう。

人類の歴史に貢献できなかったという無念さが、ひきかえすことのほとんど望みえない生と死の境で、死にゆく生命を凝縮された絶望に陥^{おとし}れる。この生命感の体験は、きわめて貴重であるように思うのです。

真実の生き方を凝視

つぎに哲学的な側面からは、生の哲学者ベルクソンも、身体と心の深い考察から、死後の生命を肯定するにいたっています。またアーノルド・トインビー博士は、不死の海である宇宙本源の「精神的實在」に帰ることが死であると信じ、一人の学者として、高等宗教、とくに、仏教の「空」に、生と死の解答を求めておられました。

「死という現象は、われわれが心身統一^{みか}体として見慣れている人間存在のうち、肉体面の分解をとまなうわけですが、しかしそれは「實在それ自体」からみれば、じつは人間の知的着想力の限界から生

じる幻想にすぎないことになります。(中略)私は、『實在それ自体』には時間もなければ空間もないと信じています。といって、それが時間と空間に束縛そくばくされたこの世界から、全く遊離まったくして存在するものだとは思っていません」

「生命は、はたして死後も存続するのか。また、肉体が無機物の世界へと還元かんげんされてしまった後、精神はどこへ行くのか。——要するに、これらの疑問は、空間とか時間の基準からは答えられず、空、ないし、永遠」の概念によって初めて答えられるのだと信じます」

さらに、死を見すえての生に関して、ガンで亡くなった作家の高見順氏は、その著「死の淵ふちより」のなかに「過去の空間」と題する詩を載せております。

「手ですくった砂が

痩やせ細った指のすきまから洩もれるように

時間がざらざらと私からこぼれる

残りすくない大事な時間が

.....

時間の洩れる音だけがいそがしく聞きこえてくる」

この詩には、残り少ない時間を愛惜あいせきしながら、永遠の生への限りない悲願がよみこまれています。時の一秒は、血の一滴よりも貴い——これが、この世に生をうけた人間の真実の生き方でありまし

う。しかし、人は、死をつきつけられるまでは、あまりにも、時をむだに過ごしているようです。

これもガンに倒れたある有能なルポ・ライターの話ですが、ガンと診断され、死期の迫りつつあることを宣告されてからというものは、その人はカレンダーを「日めくりのカレンダー」にかえたということです。残された貴重な一日一日を思えば、年間あるいは月間の月日がその他大勢といったふうにならば、一日が終わろうとするとき、その日の日付をいとおしむように破りとる、そして「ああ、今日一日も生命があったか」と、生の膚^{はだ}ざわりをしみじみと感じたというのです。

「人間は死への存在である」といったハイデッガーの言葉をまつまでもなく、生の底には死が流れています。いや、瞬間ごとに死に接し、死から生へと蘇^{よみがえ}っているといえます。

こうした死の自覚こそが、生を限りなく豊かにし、充実させるのです。死の自覚なきところに、真実の生もあります。充実した時間を送れるはずありません。ここに死はそのまま生の問題なのです。死を解決しないところに、生の確立もないといえるのではないのでしょうか。

四年前の春、トインビー博士から招請をうけ、第二回の対談のためロンドンに行き、五日間の対談を終え、パリに寄り、列車で二時間、平和な田園の詩情あふれるロワールの谷を訪れたときのことです。

緑の岸辺を洗う清流、牧羊の群れ、なだらかな丘陵、古城の尖塔^{せんとう}、小鳥がさえざる小径^{こみち}、深閑^{しんかん}とした森、咲き乱れる花、歳月を刻んだ石造りの農家……。そんなつた草におおわれた館^{やかた}の一つに、ルネ

サンスの巨匠レオナルド・ダ・ヴィンチが晩年を過ごした家がありました。ダ・ヴィンチがその偉大な生涯を閉じた寝室に、彼の言葉が銅板に刻まれていました。

「充実した生命は 長い

充実した日々は いい眠りを与える

充実した生命は 静寂な死せいじやくを与える」

スイスのC・G・ユングはっています。

「人生の半ばから先は、生きながら死ぬ覚悟のできている人だけが、本当に生き生きと生きているといえる」(「死の意味」)

ユングは、人生の後半をとくに重視してこの言葉をはいたのでしようが、人生そのものに、生きながら死ぬ覚悟もある面では必要かもしれません。その覚悟のある者のみが、真実の生きいきとした生を生きぬいたことになるということもいえるかもしれません。

トインビー博士はっています。

「生のさなかにわれわれは死のなかにいる。誕生の瞬間から、つねに人間にはいつ死ぬかわからない可能性がある。そしてこの可能性は、必然的におそかれ早かれ既成事実きせいじつになる。理想的には、すべての人間が人生の一瞬一瞬を、つぎの瞬間が最後の瞬間となるかのように生きなければならない」(「生きる」と死ぬこととのあいだの関係」と。

しかし、この理想状態で生きぬくことはむずかしい。——としながらも、トインビー博士は、つぎのように結論しています。

「確信をもって云いうるのは、人間がこの理想の精神状態を手に入れるところへ近づけば近づくほど、それだけ立派な、そして幸福な人間になるということである」と。

つぎに、この生と死の問題について、自然科学者の側からみた一つの眼を紹介してみましょう。大阪大学の名誉教授で物理学者の岡部金次郎博士は「人間は死んだらどうなるか」という著で、ユニークな見解を述べられています。岡部博士は、自然科学の法則を土台にしながら、そこから一步、推理を進めて死の問題を説こうとする。岡部氏の提唱する推理科学であります。

——物質の科学では、不生不滅の法則が成立する。つまり、エネルギーや物質が、なにも無いところから突然に出現したり、反対に現に存在するエネルギーや物質が、完全に跡形もなく消滅してしまうことはありえない。

人間の魂は、超物質的、超エネルギー的なもので、五感でとらえることはできない。

しかし、人間の魂なるものを認めなければ、人体を構成する物質は、新陳代謝によって、何年かのうちにぜんぶ入れ替わってしまうのであるから、現在の自分と子供のときの自分はまったく別人になつてしまう。たんに、ある程度、形質が似ているだけということになる。

そこで、現在の自分と子供のときの自分との「自己同一性」を認めるとすれば、人間の魂なるものを認めざるをえないであろう。

魂のようなものも、それが存在するものとすれば、不生不滅の法則があてはまるであろう。つまり、死によって、人間生命が消滅してしまうのではない。なんらかの状態で存続するのであると推測せざるをえない。

魂の中心を魂の核と呼ぶ。生ときは、魂の核が肉体と一体不二であり、種々の機能を発揮している。つまり、活性状態にあると考えられる。死においては、魂の核が非活性状態になるのである。つまり、死の生命では、生きているときのような機能を発現することはない。しかし、生命のなかに、その人間としての機能を潜在^{せんざい}させているのである。

そして、生命が死から生へと蘇^{よみがえ}ると、再び、魂の核の機能を発揮するようになるであろう。

このように、人間の生死は、魂の核が活性状態であるか、非活性状態になっているかの違いであり、魂の核そのものは生死にわたって存続するのである——。(要旨)

岡部氏のいう魂、魂の核とは、通常の靈魂ではないと私は思う。靈魂という考え方は、仏法においても、涅槃経において、徹底的に否定されています。私は、氏のいつている魂の核とは、仏法における「自己同一性」をもたらし生命の「我」に通ずるものがあるように考えるのです。

ともあれ、人生においてなにが大事か。それは生きる目的観であり、生死の問題であり、この根本義をはずして、いかに他事に心を奪われても、しょせんそれはむなしい。なにも悲壯感にとらわれることはないが、死を見つめ、生を緊張して生きる、求道の嚴肅^{げんしゆく}な姿勢を失ってはならないのではないでしようか。

現代人は、そして現代文明は「生の奢り」に浸っているのではないか、と憂える識者の声もあります。死の重みを忘れた輕薄な生は、真の意味での生の充実をもたらさない。「臨終只今にあり」の言は、混迷の一途をたどる今日の時代において、千鈞の重みをもつものと、私は思います。

今日蓮が弟子檀那等・南無妙法蓮華經と唱えん程の者は・千仏の手を授け給はん事・譬えば蘇
夕顔の手を出すいすが如くと思し食せ

「是人命終為千仏授手」の法華經勸発品の文は、まさしく、末法の大白法を信受し実践する日蓮大聖人の弟子檀那にあたるのであるといわれております。ウリやユウガオの蔓がからむように、千仏が、御本尊を持つ私たちを、全力をあげて支えてくれるとのおおせであります。

このことを前提としたうえで、今度は指導者としてのあり方を考えてみたい。仏が衆生を守るのは、手をさしのべて、地獄へ墮とすまい、恐怖を味わすまいとする精神に立っているという法華經の文からするならば、私たちもまた、同志に対しても、また友人に対しても、この精神に立たなければならぬと思うのであります。

どうすれば皆が喜んで人生を満喫できるか、悲しい思いをしないでいけるかをつねに考えていくこと、すなわち同志愛、隣人愛、人類愛こそ、「令不恐怖不墮惡趣」の仏の精神であり、そのために手

をさしのべて協力し、励ましていくのが「千仏授手」であります。

人間、崩れるときもあれば、沈むときもあります。そのときにこそ、千仏、すなわち周囲の人々が励まし、支えあっていくなかに、その人自身の蘇生も、ひいては地域の発展もあると私は思う。またつねに私は、このことを念頭におきつつ接しているつもりであります。

現在の一念が洋々たる未来開く

過去に法華經の結縁強盛けちえんかうじょうなる故に現在に此の經を受持す、未来に仏果を成就じようじゆせん事うたがい疑有るべからず

心地觀經しんじかんぎように「過去の因を知らんと欲せば其の現在の果を見よ未来の果を知らんと欲せば其の現在の因を見よ」とあります。この文に照らしてみるならば、過去において御本尊への結縁が強盛であったというのは「過去の因」であります。現在に御本尊たもを持ったというのは「現在の果」となる。しかも、御本尊を受持していることは、そのまま「現在の因」であり、「未来に仏果を成就せん」すなわち「未来の果」を決定づけているのです。

私たちがいま御本尊を受持しているということは、また広宣流布、一生成仏をめざして実践してい

るといふことは、まことに不思議なことであります。それは過去にそれだけの因を積んでいたからにちがいない。「さいざいしよふつど じようよし ぐじよう在在諸仏土常与師俱生」の原理からするならば、つねに御本尊のもとに妙法弘通に挺

身してきた「因」のゆえでありましょう。そのゆえにいま、御本尊にあえたという「果」がある。

しかし、御本尊を受持できたということを、たんに「果」としてのみとらえるのではなく、その「果」をそのまま「因」としていつてこそ、つまり未来への発条はねとしていつてこそ、未来のさらに輝かしい開花があると知っていたいただきたいのであります。

「現在に此の経を受持す」の「受持」において、「受」とは過去の因による果でありましょう。しかして「持」とは、未来の果をめざしての因でなければならない。不断の精進、不屈の信仰の連続のなかに「持」の一字があると心得ていただきたい。「受くるは・やすく持たもつはかたし・さる間・成仏は持もつにあり」(御書全集一一三六頁)とあるのも、この意であります。

このように、過去の結縁が現在の受持とあらわれ、その現在の受持が未来の仏果となることは疑いないという、三世にわたる種熟脱しゅじゅくだつの原理を示されたのがこの文であります。それでは、現在において信心を起こすことのできない人は、過去に結縁がないのであって、そういう人は諦めるあきら以外にないのかというと、けっしてそうではありません。

現在のこの人生で仏法の話を書くことができたということも「過去の結縁」そのものになります。そして、人間は過去世の業によってのみ縛しばられ動かされていく存在ではなく、現在の一念によって、未来をどのようにでも変えていける主体的存在でもあります。厳密にいうならば、過去の結縁が強盛

であったかどうかは、だれにもわからないことである。ただ、現在の諸法実相が根本であり、もっとも大事なのです。「諸法実相抄」の「地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目なり」（御書全集一三六〇頁）と同じであります。地涌の菩薩だから唱えているのではない。題目を唱えているからこそ地涌の菩薩であるということです。

したがって、過去に日蓮大聖人の本眷属^{ほんけんぞく}として結縁強盛であり、さまざまな国土での妙法流布を誓いつつ、この世に生を受けてきたのだと決めて、現在の一瞬を真剣に行動し、この一瞬一瞬の積み重ねとしてのこの一生を、みずから切り開いていくことが、仏法の根本精神なのです。ですから、広宣流布に現実^{ていしん}に挺身していくことこそ、誓^{ちか}れある地涌の菩薩の証^{あかし}であるという強い決意をもって、日々の精進に取り組みたいと思います。

信仰の持続こそ最も大切

過去の生死・現在の生死・未来の生死・三世の生死に法華経を離れ切れざるを法華の血脈相承とは云うなり

さきに生死一大事の血脈について、妙法蓮華経であるとその体を明かされ、また妙法蓮華経と唱え

ることであるとその実践を示されましたが、ここではその持続のなかにこそ、血脈が連綿と受け継がれていくことを教えられているのであります。

いわゆる「血脈」には、唯授一人の別しての法体の血脈と、総じての信心の血脈とがあります。ここでおおせられているのは、総じての血脈であることはいうまでもありません。

この総じての血脈、すなわち久遠元初自受用報身如来たる日蓮大聖人の御一身に流れる生死一大事の血脈は、親から子へ血のつながるごとく、三世にわたって御本尊を持ち、題目を唱える私たちの生命に受け継がれていくのであるとの御文であります。

これは一往、大聖人の教えを受けるようになってから日の浅い最蓮房に、また、ともすれば理に走りがちなその傾向も感じられて、信仰の持続こそもっとも大切であることを教えられているのであります。

私たちの立場においては、仏の生命と感応道交かんのおうどうこうできる生命の開発、すなわち信心のなかに血脈相承があるのであり、それには生涯、いな三世にわたる持続がなければならない。一生において、一つの信念を貫くことさえ容易ではない。しかるに三世にわたる信心を教えられているのは、簡単なことであるようにみえながら、これほど困難な、またこれほど大切なこともないと教えられていると拝したい。

大聖人の生命にある生死一大事の血脈を、私たちはどうすれば相承できるか。大聖人御自身はすでにおられません。だが、大聖人は人法一箇の当体たる御本尊を残してくださっております。ゆえに純

一な信仰による唱題という実践によって、大御本尊の生命をわが生命に移すのです。というよりも、わが生命のなかにある、大聖人の御生命、仏界の生命を湧現させる以外にないのです。

すなわち、大聖人の命を受けるとは、わが己心の大聖人を湧現させる以外のなにものでもない。空の鳥が御本尊であり、その鳥に呼応して鳴く籠かごの中の鳥が、わが生命の仏界であります。その意味では、信心の血脈相承といっても、いっさいわが生命にあるのであり、それを決定けつじょうさせるのは、したがってみずからの信仰以外にないといえるのであります。

謗法ほうぼう不信の者は「即断そくだん一切世間仏種いっさいせけんぶつしゆ」とて仏に成るべき種子を断絶するが故に生死一大事の血脈これ之無きなり

謗法、不信の者は、みずからの手で種子を断っているものであり、そのゆえに、謗法、不信の者に、生死一大事血脈があるうはずはないと述べられているのであります。

「一切世間の仏種を断ぜん」とは、どこの世界へ行っても救われない、どこへ逃げようとも逃げられないことではない。地獄の世界へ行くということでもあります。

あらゆる衆生の成仏の種子が南無妙法蓮華經であるがゆえに、妙法を信ぜず誹謗することは、一切世間の仏種を断ずることになるのであります。

仏法実践の究極は異体同心

総じて日蓮が弟子檀那等・自他彼此の心なく水魚の思を成して異体同心にして南無妙法蓮華經と唱え奉る処を生死一大事の血脈とは云うなり、然も今日蓮が弘通する処の所詮是なり、若し然らば広宣流布の大願も叶うべき者か

ここは異体同心の人間関係のなかに総じての生死一大事の血脈が流れ通うことを示されたところであり、広く一切衆生が仏に成る血脈を継ぐための具体的実践のあり方を明かされた御文であります。まず「総じて」と述べられていますが、これは、ごぞんじのように「別して」に対する言葉です。別して生死一大事の血脈が流れ通うところを尋ねれば、本抄のはじめに「釈迦多宝の二仏宝塔の中に於て上行菩薩に譲り給いて此の妙法蓮華經の五字過去遠劫より已来寸時も離れざる血脈なり」とありますように、文上においては、釈迦、多宝の二仏から付嘱を受けた上首上行菩薩の生命に、その血脈はある。

したがって再往、文底の立場から拝するならば、法華經文上に垂迹上行菩薩と現れた久遠元初自受用身如来の再誕たる日蓮大聖人の御生命こそが、別しての生死一大事の血脈の当体なのであります。

したがって、この御文は、日蓮大聖人の御生命に流れる血脈が、総じては大聖人門下の異体同心の団結の姿のなかにあらわれると結論づけられた個所なのであります。仏の血脈は、異体同心に題目を唱え、広宣流布をめざしてゆく一人ひとりの生命に脈打つとおおせなのであります。

これは、末法の荒凡夫あらぼんばが成仏できる具体的な道を明かされた重要な依文えもんでもあります。

「今日蓮が弘通する処ところの所詮しよせん是なり」と述べられていますように、大聖人の妙法弘通の元意がんいは、空間的に広げれば全日本、全世界の人々に、また、時間的次元でいうならば、末法万年尽未来際じんみらいさいの人々に成仏の道を開き、仏の血脈を与えようとの大慈悲が、日蓮大聖人の根本の御精神であられるのであります。

ここに正法の伝持を主眼とした正像の授受じゅうじゆのいき方と、全民衆の成仏をめざされた日蓮大聖人の末法折伏のいき方との根本的な相違点があるといえるのであります。

そうした大慈悲のお心から、成仏の根源の当体として大御本尊を御建立くださり、具体的実践、運動の方軌として異体同心の原理を教えてくださいましたのであります。

私どもは、この御遺命ゆいめいに照らし、御本尊を根本として日蓮正宗を外護し、異体同心に妙法流布に励み、人間同士の交流のなかで錬磨れんま、研鑽けんさんを重ねていくことを根本精神としているのであります。

恩師戸田城聖先生は、つねづね「創価学会の組織は戸田の命よりも大切である」といわれておりましたが、それも自他彼此じたひしの心なく異体同心の人間連帯の和を築いていくところに、総じての生死一大事の血脈が厳然と受け継がれ、一切衆生を仏になしゆくカギがあることを知悉ちしつしておられたがゆえで

あると確信するのであります。

一般的にみても、組織というものは、たんなる個の総和としての力をもつだけではない。異体同心の原理によって適材適所の構築がなされれば、想像を絶する力や働きが生みだされ、その組織の目的を成就していくものであります。人間の文化、伝統は、すべてこうした組織のなかにはぐくまれ、継承されているというのが否定しえない事実なのであります。

しかも、創価学会の組織は、個々の会員の人間革命、一生成仏をめざし、ひいては広宣流布をめざして生みだされたものであります。私どもは、戸田先生が遺されたこの創価学会の生命的連帯の組織を、なによりも大切にし、慈しみ、守りぬいていかなくはなりません。

なお、この御文に関連して、異体同心のあり方について、一言申し上げておきたい。というのも、異体同心の和合僧団にしてはじめて、総じての生死一大事の血脈が流れ通うとおおせだからであります。

まず、異体同心を身近な例でいえば、広宣流布のためにつねに寄りあい、御書を学んだり、諸行事を企画したりして、互いに励ましあい、指導しあっていく事実の姿のなかに、その縮図があるといえる。「心ざしあらん諸人は一処いっしょにあつまりて御聴聞あるべし」(御書全集九五二頁)とも説かれているとおりです。

人間の心というものは、時々刻々と変化します。その変転きわまりない当体であるゆえに、集合し

ては信心の呼吸を合わせ、磐石^{はんじやく}な家庭建設のため、地域の繁栄のために離散し、再び仏法求道の座談の場に集いあうのであります。この繰り返しこそが、仏法の真髓を現じゆく事実上の方式であり、「異体同心なれば万事を成ず」との御文も、この姿をさすと拝せる。創価学会の今日があるのも、恩師戸田前会長を中心に、つねにこの異体を同心とする離合集散の実践が営々と持続されていたことに帰着するのであります。

私どもの信心の目的は、みずからの生命の連続革命にあるといつてよい。しかも、私どものめざす広宣流布は、利害や名誉を目的とした世間のそれとはまったく次元を異にする、もっとも崇高^{すうこう}な人類的、宇宙的、永遠的な普遍性をはらんだものであり、これを可能にする根本要因こそ異体同心の団結にあるということ強く申し上げておきたいのであります。

この異体同心の原理で大事な点は、まず第一に、異体を前提としていることでもあります。一人ひとりの個性や立場、特性を最大限に尊重し、その当体を輝かせていくのが、日蓮大聖人の仏法なのであります。

「御義口伝」には「桜梅桃李^{おうばいとうり}の己己の当体を改めずして無作三身^{むささんじん}と開見す」（御書全集七八四頁）とおおせであります。この自体顕照^{じたいけんしやう}の姿をもって広宣流布に戦っていく、そこに自己の人間革命の軌跡^{きせき}があるのであります。

ややもすると、通常、組織集団というものは、異体を拒絶し、同体化をはかって統一したものをつくりだそうとするものであります。その端的な例が、軍隊組織であったし、また世間における閥閥^{けいぼ}の

ようなファミリー集団であるといえましょう。

ファミリー集団は強いようにみえながら、その実は閉鎖^{へいさ}社会を形づくり、やがて時代に即応できなくなってくる。また同体のようでありながら、かえって派閥^{はいわく}化し、阿梨樹^{ありじゅ}の枝のごとき、複雑怪奇な様相を呈してくるものです。やがては腐敗^{ふはい}墮落^{だらく}をきわめ、人間の心に悪心を呼びさます温床ともなっていく。今日までの多くの組織が、血縁関係のファミリー化した組織となり、低迷を余儀なくされている事実にも、このことは明らかであります。

ともかくも、学会員は、個々の特性を最大限に発揮しあい、互いに同志を尊敬しあっていくこの尊い伝統を、どこまでもたもち続けていっていただきたいのであります。

総体革命ですから、さまざまな立場の人が信仰の庭に集い、見事に咲き薫^{かか}っていくのが、その理想の姿です。たとえば、魚屋さんなら魚屋さんばかりが集ったのでは、魚屋さん革命はできても、総体革命はできない。個性の面でも、才能の面でも、多種多様の人々が、自体を顕照^{けんしやう}しつつ、広布という新世紀の山脈をめざしゆくところに、はじめて総体革命は成就されていくのであります。

こうした異体の一人ひとりが、同じ心に立脚して振る舞っていくことが、異体同心の原理の第二点目であり、もっとも大事なポイントであります。

大聖人は「自他彼此の心なく水魚の思を成して」とおおせです。これは、自分という存在、他人という存在、また、彼、此という、さまざまな立場があることは当然であり、それを否定したものではない。問題は、そこに人間の心の通いあいがなく、それぞれが、自己のこのみを中心にものごとを

考え、己の感情のみを根本として行動していくことです。そうした姿勢からは、人間関係はバラバラに分断されてしまいます。こうしたアンバランスで、不統一な人間集団には、もはや、いかなる血脈も通わないというのであります。

これに対して「水魚の思^{おもひ}」とは、魚は魚、水は水としてそれぞれ別の存在でありながら、しかも、魚は水がなければ瞬時も生きていけない。と同じように、自身の存在が、人々の織りなす多様な人間関係に支えられていることを知り、それを大切にしていくなかであります。水とは自身をとりまく人間関係であり、魚とは自分自身をたとえられたといえます。ちょうど魚が水に馴^なれ親しむように、異体同心の和合僧に親しみ、それを構成する一人ひとりを尊重し、敬^{うやまつ}っていく姿が「水魚の思」になるであります。

仏法では報恩ということが強調され、父母の恩、師匠の恩、社会の恩、さらには一切衆生の恩がいわれますが、これは自身の存在を生命的つながりのなかにあるととらえたところに打ち立てられた法門です。自己の存在、他人の存在を、ともに重視していくのが仏法であります。異体同心の原理も、こうした基盤をふまえたうえでのものであることを知らなければなりません。

しかしながら、現実の社会は、利害と打算、反目と憎悪、葛藤^{かつどう}と破壊に明け暮れ、自他彼此の心そのままであります。あたかも、狐狼^{ころう}のような隙^{すき}あらばという姿です。その現実^{じつじ}は現実として、鋭く見すえていかなければならない。

悪に負けたり、利用されてはけっしてならない。社会はけっして甘いものではない。そのなかにあ

って、あらゆる邪悪な勢力を打ち破り、真実の人間勝利の社会を築き上げていく唯一の勢力こそ、御本仏日蓮大聖人のおおせどおりの道を歩む、われらの異体同心の鉄桶の団結以外にないと申し上げておきたいのであります。

こうした「水魚の思」を成していく根源、いいかえれば、異体同心の「同心」とは、御本尊を信ずる心が同じことです。そして御書に「日蓮と同意ならば」、また「わたうども二陣三陣つづきて」とおおせのごとく、広宣流布の大目的を、同じく己が使命とすることであります。

我見と感情とを中心としていけば、そこにはおのずから異体異心となり、不平不満と怨嫉とが渦を巻くことになるのであります。

——彼は彼の立場で懸命にがんばっているな。あの人もあそこで戦っている。この人もここで一歩前進の指揮をとっている。皆、心を洗われるような日々を送り、清新な息吹をたたえている。心から敬意を表したい。私も私の立場で、私の使命を果たしていこう——という姿になるでしょう。こうした生きた組織には、総じての生死一大事の血脈が清冽に豊かに流れ通い、功德の花が瀾漫と咲き薫ることは、必然の道理であると確信するものであります。

有名な「異体同心事」には「殷の紂王は七十万騎なれども同体異心なればいくさにまけぬ、周の武王は八百人なれども異体同心なれば勝ちぬ」（御書全集一四六三頁）と述べられています。

中国古代の王朝の交代劇という、一つの史実を引かれての指導であります。紀元前十一世紀のころの古い事柄であります。時代性、歴史性はともかくとして、人間の振る舞いという点においてみれば

ば、一つの真理がそのなかに含まれております。

司馬遷の「史記」によれば——殷の紂王は悪逆の限りを尽くしている。妲己^{だうき}におぼれ、酒池肉林の宴を張り、自身の意に逆らうものがあれば、あるいは殺し、あるいはその肉を塩辛にし、あるいは干肉^{かんにく}にし、また、諫言^{かんげん}をした忠臣・比干^{ひかん}の胸をえぐる等々であった。当然のことながら、民衆の幸福は一顧^{いっこ}だにされることがなかった。一方、その殷の支配する諸国の一つであった周に文王がおり、善政をしき、諸国の王の信望を集めていた。この文王の跡を継いだのが武王であり、彼は文王の遺志を受けて、暴逆の紂王を討つ軍を起こした。その時を得た軍に、期せずして八百の諸侯が志を同じくして集まり、討伐に向かった。これに対した紂王は、七十万の大軍を繰り出した——と記されております。

武王の軍は諸侯が集ったものであったが、天命のもと、悪を討つとの名分を掲げてその士気は十分に高かった。一方、紂王の軍は七十万と数こそ多いといっても、戦意はまるでなかった。むしろ、心のなかでは武王がやってくるのを待ち望んでおり、いっせいに反乱を起こして武王を迎え入れたという。ここに殷が敗れて、周王朝の誕生をみたのであります。まさしく武王の軍は、民衆の輿望^{よぼう}を担^{にな}い、人々の心をとらえたがゆえに、異体同心の団結が可能となり、大事を成しえたといえるのです。われわれもまた、信心を根本に、異体同心で進むならば、やがて、すべての人々が、ここに唯一の光明を見いだし、陸続と集ってくるでありましょう。

「若し然らば広宣流布の大願も叶うべき者か」との御文は、その異体同心の団結のあるところ、かな

らずや広宣流布は成就されとの御断言であります。

異体同心の実践なくして、ただ時を待っているのみでも、口で唱えているのみでも、広宣流布の実現はないのであります。広宣流布をみずからの使命とし「如来の所遣しよけんとして如来の事を行」じている人々の功德は、まさに「仏の智慧ちえをもってしても測り難しがた」との經文どおりであることはいうまでもありません。この重大な使命と福運に満ちみちた人生軌道を一直線に邁進まいしんして、最高に満足の境涯へと入っていかれますことを心より念願いたします。

我執がしゆう、驕慢きようまんが異心の本源

あまつさ
剩あまつさえ日蓮が弟子の中に異体異心の者之有れば例せば城者として城を破るが如し

異体異心の者は、師子身中の虫であり、最大の敵であるとおおせです。異体同心の團結を乱し、生死一大事の血脈を途絶えさせていくゆえに、その罪は大きい。仏法のうえからいえば、一往は、五逆罪のなかでももっとも重い破和合僧の罪にあたります。しかし、再往これを論ずれば、それにはとどまらず、さらに重い「誹謗正法ひぼうしやうぽう」の罪にあたります。なぜなら、仏法の根源である生死一大事血脈、すなわち妙法蓮華經に背くゆえであります。

この「異心」とは、根本は日蓮大聖人のお心に反することでありますが、だれも最初から大聖人に背こうとして背く人はいないであります。では、なにゆえ異心に陥おちってしまうのか。私は、その異心の本源は、我執であり、自己の利益、自己の感情、慢心を中心としたいき方であると考えております。

大聖人の門下においても、三位房の例があります。彼は日蓮門下でも重きをなした高弟です。だが、彼も和合僧を破り、変死を遂げています。

「三位房が事は大不思議の事ども候いしかども・との殿原ばらのをもちには智慧ある者をそねませ給うかと・ぐちの人をもちなんと・をもちて物も申さで候いしが、はらぐろとなりて大難にもあたりて候ぞ、なかなか・さんざんと・だにも申せしかば・たすかるへんもや候いなん、あまりにふしぎさに申さざりしなり」(御書全集一一九一頁)

ここには、重要な教示があります。三位房について指導し、まちがいをいってあげられない雰囲気がつくられていたという点です。なにかいいづらい。そうしたムードを、弟子たちがいつのまにかつくってしまったのです。

三位房日行は、学はあり、門下の長老でありました。比叡山に遊学もしているし、竜象房りゅうしょうぼうをものに見事に破折する等、学に秀ひでていた。弁も立つ人であった。しかし、才知に慢ずるところがあり、また「御持仏堂にて法門申したりしが面目ななどかかれて候事・かへすがへす不思議にをばへ候」(御書全集一二六八頁)とあるように、世間の權威に弱く、一閭えん浮提だ第一の法門を持する誇りと自覺に欠けて

いた。「日蓮をいやしみてかけるか」(同)と指摘されていますが、京の貴族の権威よりも大聖人の仏法の存在を下にみる心があったようです。

熱原の法難のさい、後輩にあたる日興上人の応援を命ぜられたのですが、行智の奸策かんさくにかかり、日興上人に敵対し「大難にもあたりて候ぞ」という悲惨な死を迎えてしまうことは、皆さん、ご承知のことと思います。後輩が中心になって戦っている。それを応援すべく派遣はけんされたが、それが面白くなかったのではないか、と私は推量しています。

時期は日蓮門下の興亡をかけた戦いのさなかなのに、三位房日行の心を覆おほうものは、自分の出番のないことを不快に思うエゴの一念、しょせんは名聞名利を願う気持ちだけでありました。

もとより、大聖人の大智は、日行の生命傾向を鋭く洞察しておられました。そして、彼の京都弘教のおりに、戒めてもおられる。その学智を惜しみ、それが驕慢きょうまんと退転に結びつかないよう、いくたびとなく注意されようとしたにちがいありません。しかし、それを許さない雰囲気があったことが、かえって、彼の決定的な不幸をまねきよせてしまったのです。

三世各別あるべからずです。今日においても、この教訓はすこしも変わらず生きているわけです。

大聖人滅後においても五老僧に代表されるごとく、違背いはいの流れがあったことはよくご承知のことと
思います。

五老僧は親しく大聖人にお目にかかりながらも、大聖人御入滅後は、残念なことに大聖人の法門を天台門流に同じ、天台沙門と名乗り、離反していってしまった。これは理解がおよばなかったという

よりも、法門を曲げてまで天台仏法という權威のなかに、自己の保身をはかっていた姿であると思うのであります。その權威のために彼らは、仮名文字で書かれた御書を「先師の恥辱ちじよく」であるとして「スキカエシに成し或は火に焼き」までしているのであります。全民衆のために「身命を期と」された大聖人の御精神は、まったく踏みにじられてしまいました。

五老僧のうちの一人、だいこくあじやりにちちう大國阿闍梨日朗は、大聖人のもとにあっては、まさに師弟不二の法戦を展開し、それゆえに入牢の身ともなっております。大聖人がその日朗の強盛な信仰を称賛されていることは「土籠御書」つちろう（御書全集一二二三頁）に書かれているとおりであります。この日朗が、第二祖日興上人の時代に入って違背し、一步後退している事実こそ、私は後世の信仰者が銘記すべき広宣流布への重大な意義が刻印されているように思えてならない。

日蓮大聖人のもとでは活躍したが、日興上人の時代においては背信していることは、当然のこととして「三世各別あるべからず」の御聖訓に背くものであり、この原理はそのまま、現在、未来にも通ずる仏法弘通上の重要な明鏡として拝さなければならぬのであります。

脈打つ民衆救済の大慈悲

日本国は一切衆生に法華經を信ぜしめて仏に成る血脈を継がしめんとするに・還かえって日蓮を種

種の難に合せ結句此の島まで流罪す、而るに貴辺・日蓮に随順し又難に値い給う事・心中思い遣られて痛しく候ぞ

ここからは大聖人の御心境を述べられて、最蓮房を激励されているところです。

大聖人のお心は、ともかく一切衆生に「仏に成る血脈を継がしめんとする」大慈悲以外のなにものでもなかった。そのために誤れる他宗教を厳しく破折され、当時の精神、思想界の指導者と目されていた極楽寺良観へも舌鋒鋭く迫られた。これらはすべて民衆の幸福のために、自身をも顧みず正義を貫いたお心のあらわれです。

しかるに、「還って日蓮を種種の難に合せ結句此の島まで流罪す」とありますが、邪惡の僧たちの奸智と策動にのって、時の幕府が大聖人を迫害し、ついには佐渡流罪にまでいたらしめた。「此の島」とは、佐渡のことです。

佐渡流罪ということは「此の国へ流されたる人の始終いけらるる事なし、設ひいけらるるとも・かへる事なし」(御書全集九一七)とあるように、たいへんな境遇におかれたということなのです。手入れのまったくされていない、荒れ放題の塚原三昧堂で起居し、ところどころ破れた板ぶきの屋根の下で極寒をしのぐ。凡夫であれば、地獄のどん底としか表現しようのない日々でありました。

こうして一国がこぞって大聖人に迫害を加え、憎惡の炎を燃え上がらせているなかで、「而るに貴辺・日蓮に随順し又難に値い給う事」うんぬんとあるように、最蓮房は大聖人に「随順」された。ま

た、それゆえに難も受けた。どのような難であったか詳しくは不明ですが、その心はけなげである。個人的に難を受けたのではなく、大聖人門下全体が弾圧という大難を受けている渦中かちゆうだったので。そのときに、少しもひるまず「随順」していくことは、なみたいいていのことではできないし、逆に根底からその人の信心が試ためされているともいえるでしょう。

この「随順」について「御義口伝」には「随順ずいじゆん是師学しがくの事」に「随順とは信受なり」（御書全集七三九びやう）とあります。また同じく「御義口伝」に「信伏随従」について「随とは心を法華經に移すなり従とは身を此の經に移すなり」（御書全集七六五びやう）とあります。随順または随従とは信受であり、身も心も、つまり色心ともに従うことであります。

大聖人がかつてなかった最大の難を受けたときに、ともに難を受けた最蓮房に対して、大聖人はこのように、あたたかく励まされているのです。

日蓮大聖人の受けられた難は、たんなる非難中傷ではない。せんしやうぞうじやうまん 僭聖増上慢けんしやうぞうじやうまんによる難であり、宗教界の權威が策謀し、権力者を動かし、社会的力をもって制裁を加えたものであります。日本国中が蜂の巣をつついたように騒然として大聖人を憎んでいた。そうした大難のときに大聖人に随順しきり、自身が受けた難にも少しも揺るがなかったがゆえに、大聖人は最蓮房を御信頼になっておられるのであります。

「又難に値い給う事・心中思い遣やられて痛しく候ぞ」との一節に、日蓮大聖人の、弟子に対する厚い思いやりがしのべれます。どれほど恐ろしくも思い、心の葛藤かつとうもあり、無念に思ったであろうかと、

いたわっておられるのであります。大難大苦を受けられている御自分のことよりも、まず弟子を思われるこの深い心こそ、御本仏のお心であると拝するものであります。

つねに正道歩む「真金の人」たれ

金は^{こがね}大火にも焼けず大水にも^{ただよ}漂わず朽^くちず・鉄は^{くろがね}水火共に^た堪えず・賢人^{けんじん}は金の如く^く愚人^{ぐにん}は鉄の如し・貴^{あに}辺^{しん}真金に非ずや・法華經の金を持^たつ故か、經に云く「衆山^{しゆせん}の中に須弥山^{しゆみせん}為第一・此の法華經も亦^{また}復^{また}是^{また}くの如し」又云く「火も焼くこと能^{あた}わず水も漂^{あた}わすこと能^{あた}わず」云云

金は火で焼かれても酸化しない。水にも、重いから流されないし、また朽ちない。それに対して鉄は、火に焼かれても、水の中に沈められても、錆びて、ついにはボロボロに崩れてしまう。この例にあてはめてみれば、賢人とは金のように、どのような大難にあっても、厳しい境遇におかれても、自身の信心において微動だにすることのない人である。愚人とは鉄のように脆^{もろ}くはかない人をいう、とのおおせなのであります。

ここでは、火とか水とかは難をあらわしていますが、もう一步広げて日常の生活のなかで考えてみますと、「八風抄」に基づきのように述べられています。

「賢人は八風と申して八のかぜにをかされぬを賢人と申すなり、利・衰・毀・譽・称・譏・苦といふ逼迫の苦難が、ここであるなり、心を利あるに・よろこばず・をとろうるになげかず等の事なり」(御書全集一一五二頁)と。

このなかの利・譽・称・樂等の名聞名利の誘惑、衰・毀・譏・苦といった迫害の苦難が、ここである火、水の具体的内容といふことができるのであります。これら、諸行無常の世界の毀譽褒貶に紛動されることなく、ひと筋の道をまっすぐに進んでいく人生は、あたかも金のごとく眩しい光を放つていくものであります。

最蓮房は、仏法ゆえの難という大火、大水を身に受けた。しかし、それに屈することなく信心を貫きとおしているがゆえに「貴辺豈真金に非ずや」と御本仏よりほめたたえられたのであります。

戸田先生の青年訓に「愚人にほむらるるは智者の恥辱なり。大聖にほむらるるは一生の名誉なり」との一節がありますが、大聖人から称賛される生涯を、自分らしく着実に送っていききたいものです。「法華經の金を持つ故か」とは、真金の道を歩めるのも、ひとえに法華經という最高の教えをたもつがゆえであるとおおせです。「持たるる法だに第一ならば持つ人随って第一なるべし」(御書全集四六五頁)との御文もありますが、内に懐いた思想の高低浅深がその人生の内容を決定づけるとするものが仏法の原理であります。

私どもは、すでに末法の御本仏日蓮大聖人が「智者に我義やぶられずば用いじとなり」(御書全集二二二頁)と宣言された閻浮提第一の御本尊を根本に奉持しております。あとは、この御本尊を生涯持

ちつづけていくことが肝要であり、そこに黄金の人生道を成就できることは絶対にまちがいないのであります。

「經に云く」、「又云く」とは、いずれも藥王品の文です。「衆山しゆせんの中に須弥山しゆみせん為第一・此の法華經も亦復またまた是くの如し」の文は法をたたえたもので「火も焼くこと能あたわず水も漂ただよわすこと能わず」の文は受持の人の福德を述べたものです。

火とは煩惱ぼんのうの火であり、水とは生死の水であるとされます。御本尊を持たもった一人ひとりの生命が、いかなる水火にも崩されない絶対的幸福を獲得しゆくことは、この經文の原理からも明らかであります。

生涯、広宣流布にわが人生を

過去の宿縁追いかって今度日蓮が弟子と成り給うか・釈迦多宝こそ御存知候らめ、「在在諸仏ざいざいしよぶつとどじようよしぐしよう
土常与師俱生」そらごとよも虚事候はじ

さきにも述べたように、大聖人の御一生のなかにおいてももっとも厳しい大法難のなかで、最蓮房は弟子となった。今世だけの現象的世界を中心とした考え方からすれば、あまりに不思議な存在で

す。ゆえに過去の宿縁によって、いまこのように弟子となったのであらうとおおせです。

「釈迦多宝こそ御存知候らめ」とは、大聖人は、自分は凡夫であるからわからないが、仏である釈迦多宝はごぞんじであらうという意味です。その元意は、三世にわたる生命の深理、仏法の道理からすれば、現在、大聖人の弟子として難をともしにすることは、かならず過去世の深い契りちぎによるものである、との御說法なのであります。

化城喻品けじやうゆほんの「在在諸仏土常与師俱生」の文は有名です。大通覆講だいつうふくこうで十六人の王子が、それぞれに六百万億恒河沙等むひやくごうがしやの衆生に法を説き、師弟の契りを結んでいった。その人々は、その後、諸の仏土もろのぶつにつねに師とともに生じて教えをうけ、ともに仏法を實踐していったというのです。そして、いまこの娑婆世界しやばにあっては、第十六番目の王子であった釈尊が出現し得道したがゆえに、その弟子たちも俱ともに生じて、聞法し、得脱していくのであると、化城喻品には説かれています。

つまり、師と弟子とは、かならずともに生まれて、ともに仏法を行じていくものであるというのであります。この師とは、末法においては御本仏日蓮大聖人であられることはいうまでもありません。

それでは、大聖人滅後、この經文をいかに読むべきでしょうか。大聖人は、そのためにこそ、戒壇の大御本尊を遺されたのであります。また、日興上人にいっさいを御付嘱あそばされたのであります。ゆえに私たちが、戒壇の大御本尊を根本とし、日夜、わが家の御本尊を拝し奉ることは、さながら御在世のごとし、であります。まさしく「在在諸仏土常与師俱生」であります。

そして私たちは、広布の庭に戦っている宿縁深厚の仏法兄弟であります。その絆きずなをより強くしてい

くものは、御本尊への同じ祈りであり、民衆救済、広宣流布への同じ悩みであり、実践であります。皆さんは、順風満帆のときも、逆境のときも、この広布への異体同心の和合のなかで生ききり、つぎの生を再び大御本尊の慈光をうけながら、そこでまた衆生所遊樂の人生を満喫しきっていいこうではありませんか。

この「在在諸仏土常与師俱生」の文は、信心の眼で拝していくなれば、甚深じんじんの意義を含んでいると思う。この文を、どれだけわが身の実践のうえに顕現するかで、日蓮大聖人の本眷属ほんけんぞくであるかいなかが決定的なところといってもよい。

世の中には、さまざまな縁があります。親子、兄弟といった血縁もあれば、知人、友人、上司と部下、教師と生徒という、社会的な縁もある。それらもひじょうに重要な縁であり、それが円滑えんかつにいかどうか、建設的意欲にあふれて交流していくかいなかで、家庭、社会の昇華の成否もあります。

しかし、師匠と弟子、すなわち師弟の関係、宿縁はもっとも深く、重にして大である。人間としていかに完成していくか、どう人生にかかわっていくか、人類史に貢献していくかを教え、研磨けんましあう師弟関係の関係こそ、今世にとどまらず、三世永劫えいこくに、また山海空市さんかいくうしいずれにあっても絶えることのない生命の絆きずなであるからであります。

利害によって結ばれた縁は利害によって離れていく。外から与えられた縁は、条件の変化によって、また時間、空間の推移によって変貌へんぼうしていくのであります。しかし、生命の心奥からの共鳴である師弟不二の協奏曲は、三世にわたり十方に通ずる妙音となるにちがいない。

私たちは、御本仏日蓮大聖人の末弟子であります。そしていま、純信の和合僧団が築き上げられている。この姿こそ人類史上、いまだかつてない最高に麗しい人間関係の精華であると、誇りに満ちて確信していただきたいのであります。

この「在在諸仏土常与師俱生」の文に接するたびに、私には、昭和二十一年十一月十七日における牧口先生の三回忌法要での戸田先生の、烈々たる気迫で語りかけられた言葉が胸につきささってくるのであります。

「あなたの慈悲の廣大無辺は、私を牢獄まで連れて行ってくださいました。そのおかげで『在在諸仏土・常与師俱生』と、妙法蓮華經の一句を、身をもって読み、その功德で、地涌の菩薩の本事を知り、法華經の意味を、かすかながら身読することができました。なんたる幸せでございましょうか」戸田先生は、御本尊を持っていけない牢獄のなかでさえ、御本尊を思い浮かべ、唱題に唱題を重ね「在在諸仏土常与師俱生」の御文のままに、御本尊とともにあるご自身を発見され、そこから、この御本尊を生涯流布していくとの、広宣流布への深い使命感に立たれたのであります。

この「あなたの慈悲の廣大無辺」といい、「なんたる幸せでございましょうか」との叫びといい、ただただ、御本尊への純一な信のあらわれでなくしてなんでありましょうか。ゆえに、この戸田先生の激闘を思うにつけ、いずこであれ、いかなる境遇であれ、信心のなかに「在在諸仏土常与師俱生」を実感できることを知るのであります。

「在在諸仏土」とは、一往は人間の住む世界であります。いっさいの生命が一念三千の当体であるこ

とは当然でありますが、自身の変革をし、仏道へとみずから向かうことができるのは、聖道正器たる人間生命にかぎるからであります。

譬喩品によれば、法華經誹謗の人は、あるときは野良犬として瘦せ衰え人々から卑しまれ、あるときはロバとして杖で打たれながら重い物を背負いつづける一生である。あるときは蛇身となって腹行し、人々から忌みきらわれるのであります。それに比べれば、私たちは永遠に、生命の大空に妙なる音楽が流れ、胸中の花園に遊樂するがとき生を受けるのであり、人間としてもっとも尊い一生を送り、終わることは、今生最高の思い出であります。それだけでも感謝の念をもたなければならぬ。そのゆえにこそ、その一生になにをなしうるかを考えるべきであると思うのであります。

しかし「仏土に生まれる」とは、仏国土があらかじめ存在していて、そこに私たちが生まれるというわけではありません。依正不二の原理からすれば、居住する当体に即して国土がある。ゆえに御本尊とともに仏道を歩むところ、いっさいの国土が常寂光土となるとの意であります。

つぎに「在在諸仏土」の文を、ヨコにみていくならば、十方世界のあらゆるところに仏土があるということをも示しております。よく戸田先生は壮大な宇宙觀を語られながら「この地球上で折伏し広宣流布したならば、また他の星へ行つて働くのだ」と懇談的にいっておられた。仏法は三世十方に仏土ありと説いております。たんに地球上だけというような狭い教えではない。

また、現代の天文学も、この仏法の宇宙觀を支持しているかのようにあります。いま星雲と星雲の間、に漂う微細な宇宙塵が、寄り集まって、生命体のもととなる物質を作りだしている可能性がある

もいわれております。人間のような高等生物が生息している可能性も、無量の星のなかには数多くあると考えてよさそうであります。それを「在在諸仏土」と表現されたとも考えられます。

私たちは、タテに久遠の過去から永遠の未来に、ヨコには全宇宙に広がる仏国土に自在に遊戯しつつ、人間共和の理想郷建設に励む生死であると確信して進みたいのであります。

求道実践で境涯革命

殊に生死一大事の血脈相承の御尋ね先代未聞の事なり貴貴、此の文に委悉なり能く能く心得させ給へ、只南無妙法蓮華經釈迦多宝上行菩薩血脈相承と修行し給へ

最蓮房が「生死一大事血脈」について質問したことに對し、このような大事な問題についての質問は、いまだかつてないことであり、まことにすばらしいことである、と誉められているのです。そして、それについては、この手紙に詳しく書きましたから、これをよくよく心に刻んでいきなさい、と。

その結論は「只南無妙法蓮華經釈迦多宝上行菩薩血脈相承」と修行することであるとおおせです。すなわち、南無妙法蓮華經こそが釈迦、多宝の二仏より上行菩薩に付嘱された血脈相承であると

信じ、修行、実践しなさいということでもあります。

求道ということがいかに大切かということをお大聖人は教えられとともに、求道即実践へと境涯を開かせていく大聖人の深い御指南であらうと拝するのであります。

求道の精神を教えたものとして、雪山童子の修行は有名ですが、それに関して私がとくに強調したいのは、雪山童子が悟り^{きと}を得るにいたった過程であります。

ござんじのとおり、雪山童子は、法を求めて修行しているさなか「諸行無常是生滅法^{しよぎやうむじやうぜしやうめつぽう}」という声を聞く。そのなかに悟りの法があると感じた雪山童子は、目の前に現れた鬼神に法を求めるのであります。これはじつは帝釈天王^{たいしやくてんのう}が化作^{けさ}した姿であります。鬼神というのは恐ろしい、卑しい姿をしている。当時、略奪等^{ひんぼん}が頻繁^{ひんぱん}にあったという歴史的背景もありましょうし、法を求めるのは、外見の荘厳な姿、地位によるのではなく、いかなる「法」をもつかという中身を知っていかなければならないとの教えも込められているのであります。

しかし、私はさらに、もう一步深めてその意味を探っておきたい。

鬼神は雪山童子に、人間の温かな肉を求める。雪山童子はわが身を鬼神に与えることによって、教えを受けることができたのであります。仏法を求めるには不自惜身命の決意がなくてはならないのは当然であります。それにしてもなぜ人間の肉が必要なのか、また、なぜ帝釈は鬼神となって肉を求めたのでありましょうか。そこで雪山童子が鬼神から教えを受けた残りの半偈^{はんげ}を思い出していただきたいのであります。

それは「生滅滅已寂滅為樂」、すなわち「生滅滅し已おわって寂滅を樂と為す」という法門であります。現実の世界における生滅というものを滅し已おわって、生も滅もない寂滅涅槃じやくめつねはんの境地を樂とするという意味であります。これは一往、小乗教の思想であり、法華經の究極、なかんずく日蓮大聖人の南無妙法蓮華經には遠くおよばない法門であります。現実の人生に起こる生や滅に目を奪われ執着するのでなく、その奥にある寂滅の世界を求めなくてはならないことを教えたものとして、不変の真理といえます。

したがって、この法門を真実に聞き、悟るためには、雪山童子がまず、わが身に執着する生命の傾向を脱皮する必要があった。そのために、鬼神が必要だったのであります。考えてみれば、鬼神が現れ、雪山童子に肉を求めたことが、答えでもあったのでありましょう。雪山童子がそれにこたえて、身を捨てる決意をしたとき、後の半偈を受ける資格がそなわった、というより、もはや雪山童子は悟ったのであります。

仏の説法を聞く人のなかには、「諸行無常是生滅法」や「生滅滅已寂滅為樂」という教えを聞いてもわからない人がいる。そういう人にとって、雪山童子の実践の姿自体、法門の内容を教えたものだったのであります。經典に譬たとえが多く説かれるのも、深遠しんえんな哲理を平明に教えようとするゆえでありましょう。

これをさらにいえば、鬼神が肉を求めてから法を説こうとしたことは、仏法の悟達ごだつとは実践のなかにあることを示しております。雪山童子の悟達の高低浅深は別として、人間の行為のなかにしか仏法

はないのであります。もし雪山童子が、身を捨てて法を求めるといふ実践がなければ、いかに高邁こうまいな法に接しても、けっして悟ることはできなかったにちがいない。実践なくして仏法の体得はない。仏法理論は、その悟達のうえに、後に体系づけられていったものであります。

たしかに、仏法には深い生命論の展開があり、それをおろそかにしてはならない。しかし、仏法教義は本来、仏の悟りを展開したものであり、悟りは実践によって体得する以外にない。仏法はなにもむずかしいことをいっているのではない。いかにすればよりよく人生を送れるか、どう生きることが人間にとってもっともかなった道であるのか、わが生命をいかに変革していくかを、力強く説いたものにほかならない。それが人間の真実の生き方になっっているゆえに、深い哲学的な裏づけが発見されるのであります。

ゆえに生死一大事血脈ということも、わが生命のなかに発見するしかないのであります。わが生命の日々刻々の回転とともに、この一書の脈動が伝わってくることを訴えたいのであります。

つぎに「南無妙法蓮華經釈迦多宝」で、釈迦、多宝の二仏並座びやうざのあらわす法華經の体が南無妙法蓮華經であるということ。これは、天台学僧として、最蓮房がともすれば文上の法華經に引きずられる面をもっているのに対して、その法華經の究極が南無妙法蓮華經であると、かさねていわれているのであります。

そしてさらに「上行菩薩血脈相承」で、この法華經の会座えざで付嘱を受けた上行菩薩は、末法弘通の大導師でありますから、これこそが末法今時の唯一の正法であることを示された言葉と拝せまします。

「五大」は妙法五字の力用

火は焼照^{やきてあらず}を以て行と為し・水は垢穢^{くたい}を浄^{きよむ}るを以て行と為し・風は塵埃^{じんあい}を払ふを以て行と為し・又人畜草木^{じんちく}の為に魂^{たましい}となるを以て行と為し・大地は草木を生ずるを以て行と為し・天は潤^{うる}すを以て行と為す・妙法蓮華經の五字も又是^{また}くの如し・本化地涌^{ほんけじゆ}の利益^{りやく}是なり

地水火風空の五大の働きを示し、それが妙法蓮華經のあらわす用^{よう}であり、本化地涌の利益にほかならないことを述べられたところであります。

地水火風空は、宇宙万物を構成する要素であり、これを五大といいますが、五大はそのまま妙法蓮華經であります。

「三世諸仏総勸文教相廃立」に「釈迦如来・五百塵点劫^{じんてんごう}の当初^{そのかみ}・凡夫にて御坐^{おわ}せし時我が身は地水火風空なりと知^しめして即座に悟^{さと}を開き給いき」(御書全集五六八頁)と述べられている「我が身は地水火風空なり」ということも、「我が身は妙法蓮華經なり」との意にはかなりません。

ともあれ、万物究極の法たる妙法蓮華經は、この現象の世界を離れたどこかにあるのではなく、現実の物質世界を形成している地水火風空それ自体であると喝破^{かつぱ}したところに、仏法の偉大な卓見があ

の力、地涌の利益としてみた場合、どのような意味になるかということです。

「火は焼照^{やきてらす}を以て行と為し」とは、物を焼くのと、まわりを照らすのと、この二つの働きが火にはあるということですが、その仏法哲理からの意義については、「御義口伝」——序品の「阿若憍陳如^{あにぎょうじんによ}の事」(御書全集七一〇頁)に詳説されております。

そこで、火とは法性の智火であり、照らすほうは「随縁真如^{ずいえんしんによ}の智」、焼くほうは「不変真如^{ふへんしんによ}の理」で、この照焼の二徳を具えているのが南無妙法蓮華經である、と。

そして、私どもが妙法を唱えるならば「生死の闇^{しゆゐ}を照し晴して涅槃^{ねはん}の智火明了^{みよりうりよう}なり」、すなわち「生死の闇」を照らすことになる。また「煩惱^{ぼんのう}の薪^{たきぎ}を焼いて菩提^{ぼだい}の慧火^{えか}現前するなり」、すなわち「煩惱の薪」を焼くのである、とおおせであります。

この「火」は、上へ行くがゆえに、四菩薩のなかでは、上行菩薩をあらわしています。

つぎに「水は垢穢^{くえ}を浄^{きよむ}るを以て行と為し」とは、宿業^{しゆくごう}の垢^{あか}、五濁^{ごじよく}の穢^{けが}れを浄めるということであります。すなわち妙法という生命本源の力のもっている、生命浄化の働きを象徴しているわけであります。これが、四菩薩のなかでは浄行菩薩にあたることはいうまでもありません。

御本尊を受持したとき、過去の悪業^{あくごう}によって未来、長いあいだにわたって受けていくべき苦しみが、今世に集約されて軽いかたちで出てくる——いわゆる転重軽受という原理は、ここからあらわれてくるのであります。

あたかも、古いホースの中につまった汚れが、水を流すといっきよに出てくるようなもので、当座

の力、地涌の利益としてみた場合、どのような意味になるかということです。

「火は焼照^{やきてらす}を以て行と為し」とは、物を焼くのと、まわりを照らすのと、この二つの働きが火にはあるということですが、その仏法哲理からの意義については、「御義口伝」——序品の「阿若憍陳如^{あにやきょうじんによ}の事」(御書全集七一〇頁)に詳説されております。

そこで、火とは法性の智火であり、照らすほうは「随縁真如^{ずいえんしんによ}の智」、焼くほうは「不変真如^{ふへんしんによ}の理」で、この照焼の二徳を具^{そな}えているのが南無妙法蓮華經である、と。

そして、私どもが妙法を唱えるならば「生死の闇^{やみ}を照し晴して涅槃^{ねはん}の智火明了^{みよりうりよう}なり」、すなわち「生死の闇」を照らすことになる。また「煩惱^{ぼんのう}の薪^{たきぎ}を焼いて菩提^{ぼだい}の慧火^{えか}現前するなり」、すなわち「煩惱の薪」を焼くのである、とおおせであります。

この「火」は、上へ行くがゆえに、四菩薩のなかでは、上行菩薩をあらわしています。

つぎに「水は垢穢^{くたい}を浄^{きよむ}るを以て行と為し」とは、宿業^{しゆくごう}の垢^{あか}、五濁^{ごじよく}の穢^{けが}れを浄めるということであります。すなわち妙法という生命本源の力のもっている、生命浄化の働きを象徴しているわけでありま

す。これが、四菩薩のなかでは淨行菩薩にあたることはいうまでもありません。

御本尊を受持したとき、過去の悪業^{あくごう}によって未来、長いあいだにわたって受けていくべき苦しみが、今世に集約されて軽いかたちで出てくる——いわゆる転重軽受という原理は、ここからあらわれ

てくるのであります。

あたかも、古いホースの中につまった汚れが、水を流すといっきよに出てくるようなもので、当座

は苦しい思いをするかもしれませんが、それを出しきってしまえば、あとはゆうゆうと福德を積み重ねゆく人生となるのです。

「風は塵埃を払ふを以て行と為し」とは、この人生においてふりかかってくるあらゆる苦難、また信心の途上に起こってくる障魔の克服をたえております。風が塵や埃を吹きとばしてしまいうように、力強い、朗々たる題目によって、いっさいの障魔や人生の苦難は打ち碎き、吹きとばしていくことができるのであります。この「風」にたとえられているのが、四菩薩のうち、無辺行菩薩です。

また、この「風」が「人畜草木の為に魂となる」とおおせられているのは、古来、風は宇宙自然の生気の象徴とされ、風が吹くことによって、万物に生気を吹き込むと考えられたのによるようであります。

つぎに「大地は草木を生ずるを以て行と為し」とは、あらゆる生命に、その安定性を与えていく働きをいったものであります。考えてみると、生命の営みほど複雑、微妙なものはない。たとえば、私どもの体温は平均三十六・五度前後ですが、ほんの二、三度上がっただけでも、たいへんな苦痛を味わいます。いったい、どのようにして、ほぼ一定の温度に保たれているのか、そのシステムは不思議としかいようがない。心の働きも、瞬間ごとに変化しながら、しかも統一性が保たれている。この心身にわたる安定性をもたらしているのが、四菩薩のうちの安立行であります。

「天は潤すを以て行と為す」——この「天」とは、地水火風空の「空」に相当すると考えられます。

それは、四菩薩とは別に、妙法蓮華経それ自体の象徴であります。天空が雨を降らして万物を潤すよ

うに、妙法蓮華經が一切万法を利益し、万法の働きの根源となつてゐるということでもあります。

この「生死一大事血脈抄」の御文と同じ意味の御文が、「御義口伝」の一節にあります。

「今日蓮等の類たぐひ南無妙法蓮華經と唱え奉る者は皆地涌じゆの流類るいなり、又云く火は物を焼くを以て行とし水は物を淨むるを以て行とし風は塵垢じんくを払うを以て行とし大地は草木を長ずるを以て行とするなり四菩薩の利益是なり、四菩薩の行は不同なりと雖いふとも、俱ともに妙法蓮華經の修行なり、此の四菩薩は下方に住する故に釈に『法性之淵底玄宗之極地』と云えり、下方を以て住处とす下方とは真理なり」(御書全集七五一頁)

火が物を焼くのも、水が物を淨きよめるのも、風が塵垢じんくを払うのも、大地が草木を育てるのも——それ自体、本然ほんねんの作用であります。これは、大自然の働きに地涌じゆの菩薩ぼさつを配した場合であります。

自発の意志が地涌の菩薩の本分

さらに、人間の営為として地涌の菩薩を論じていくならば、つぎのようにいえると思います。

みずからの生命を燃焼しながら人々の幸福のために戦つていくのも、自他ともに生命を浄化させていく生命変革の活動も、いかなる醜い世間の塵埃も風の吹くがごとく払いさつていく振る舞いも、人が安心して依処としていく信頼の柱となつていく姿も、地涌の菩薩の本然の発露であるということがあります。

だれからいわれるというものでもない。だれから押しつけられたというのでもない。自発の意志で、人のため、世のため、社会のために、妙法という最高の哲理をもって活動していくことは、地涌の菩薩の本分なのであります。

内より、地涌の菩薩という生命は発動してきます。それは、どこからか。わが胸中のいずれに、地涌の菩薩の本拠地はあるのでしょうか。

日蓮大聖人は、それを、天台の釈を引用して「法性之淵底玄宗之極地^{ほつしょうのえんでいげんしゅうのごくち}」といわれています。法性の淵底も、玄宗の極地も、生命の奥底、生命の根源の意味であります。すなわち、南無妙法蓮華經という真如の都こそ、地涌の菩薩の住処であります。

南無妙法蓮華經と唱えたとき、南無妙法蓮華經を内より開いていったとき、真如の都を顕現し、内なる生命の力を社会と人生に発揮しながら、地涌の菩薩の使命を全^{まこと}うしていくことができるのであります。これは、しょせん地涌の菩薩は妙法蓮華經の作用であるということです。

してみるならば、自身が南無妙法蓮華經の当体とあらわれたとき、その所作として地涌の菩薩の振る舞いとなるのであります。私たちは、久遠の流れに棹^{さか}さして生きる地涌の菩薩の眷属^{けんぞく}の集いであります。

地涌の菩薩ということだと思ひ出されるのは、恩師戸田城聖先生の獄中における二つの体験であります。なかんずくその二回目の使命の自覚であります。

昭和十九年元旦を期して、大石寺の大御本尊を思い浮かべながら唱題の響きのなかに、法華經を読むことを始められました。三月の初め、法華經の開經である無量義經德行品第一のなかにある、十二行の偈げの三十四の否定から「仏とは生命の働きなんだ!」と、込み上げてくる感動を抑おさえることができなかったとのことです。これが第一回目の体験であります。

それから、牢獄の春が過ぎ、夏も去り、秋もゆかんとしていました。恩師は、戦時中の凍こるような独房のなかで、骨と皮だけの衰弱した体ながらも、激烈な思索を続けられていた。十一月中旬のある日、恩師は法華經の從地涌出品第十五の偈を想い出しておられた。

——是もろもろの諸の菩薩、釈迦牟尼しやかむに仏の所説おんじょうの音声おんじょうを聞いて、下より発来はつらいせり。一一の菩薩、皆是れ、大衆の唱導の首なり。各六万恒河沙等の眷属けんぞくを將ひきいたり、況や五万、四万、三万、二万、一万恒河沙等の眷属を將ひきいたる者をや。況や……

恩師はいつのまにか、虚空にある自身を発見されていた。数かぎりない六万恒河沙の大衆のなかで莊嚴無比な大御本尊に合掌がっしょうしている自分、その自分がある厳肅な久遠の儀式を鮮明に体験されていたのでした。狭い粗末な獄舎のなかで、朝日を浴びて、喜悅の感動に茫然ぼうぜんとなりながら、熱い涙をぬぐおうともされませんでした。「確かに自分は地涌の菩薩であったのだ!」という、深い激しい生命の大歡喜は、筆舌には尽くせないものがあったことでしょう。

戸田先生は、地涌の菩薩としての使命を自覺され「これでわが一生は決まった。きょうの日を忘れない。この尊い大法を流布して、わが生涯を終わるのだ!」と一大決心をされたのであります。

ちょうど、この同じころ、別棟の独房におられた戸田先生の人生の師・牧口常三郎先生は、七十三歳という老齢の身でありながら軍部権力の弾圧に一步も退くことなく戦っておられました。ついにその尊い殉教の生涯を閉じられたのでありました。昭和十九年十一月十八日のことです。まさに牧口先生の死と戸田先生の地涌の菩薩としての自覚は、時を同じくしていたのであります。

この戸田先生の体験、そこから得られた御本尊への確信、広布への大情熱が、戦後の創価学会の発展の基点となったことを銘記すべきであります。戦前の創価学会においても、広宣流布への使命感がなかったわけではありません。しかし、ひとたび弾圧の嵐が吹くや、もろくも崩れ去っていった事實は、その使命感の弱さを物語るものでありました。戸田先生の叫びは、獄中という最悪の事態のなかで、御本尊を思い浮かべての唱題による法悦と感謝報恩の念で、地涌の菩薩の眷属としての自覚から広宣流布を叫ばれたところに、深い意義があるのであります。

この一念は、いかなる波浪のなかにも厳として揺るがぬ広宣流布への強い自覚であります。この一点において、創価学会の折伏弘教の団体としての大発展の道は開かれたのであります。

恩師は「創価学会の歴史と確信」において、つぎのようにいわれています。

「ちょうど、牧口先生のなくなったころ、私は二百万べんの題目も近くなって、不可思議の境涯を、ご本仏の慈悲によって体得したのであった。その後、取り調べと唱題と、読めなかった法華経が読めるようになった法悦とで毎日暮らしたのであった」

まさしく、まんまたるエネルギーを秘めながら、後に大地より湧きいずるであろう多くの地涌の

集いを、因果俱時として決定づけた一瞬であったといつてよいのであります。

四十五歳の戸田先生は、このとき「四十二シテ惑まどハズ、五十二シテ天命ヲ知ル」との孔子の言に比して「彼に遅るること五年にして惑わず、彼に先だつこと五年にして天命を知りたり」と叫ばれました。

そして、翌年七月、出獄され、焼け野原に一人立たれて、学会再建の第一歩を踏みだされたのであります。師は死して獄門を出、弟子はいま、生きて同じ門を出たのであります。生死の二法は一心の妙用みょうようであります。戸田先生の胸中には、万惑の思いがかけめぐったことでありましょう。ここに、今日の学会の広布弘教の源流があったことを、けっして忘れないでいただきたいのであります。

大聖人こそ末法万年の闇照らす御本仏

上行菩薩・末法今の時此の法門を弘めんが為に御出現之れ有るべき由・經文には見え候へども如何いかが候やらん、上行菩薩出現すとやせん・出現せずとやせん、日蓮にっれん先まづ粗はな弘め候なり

南無妙法蓮華經の法門を弘めるため、上行菩薩が末法の今の時に出現されるであろうということ、法華經の文には説かれているが、どうなのであろうか。上行菩薩が出現されているにせよ、出現

されていないにせよ、その上行菩薩が弘められる法を、日蓮大聖人はまず、ほぼ弘めているのである、ということです。

いうまでもなく、日蓮大聖人の御自覚は、外用の辺において——すなわち行動、実践においては、御自身が上行菩薩の再誕にはかならないということにあります。内証すなわち奥底の本地は、久遠元初の自受用報身如来であられます。しかし、一般的に示された御書においては、この外用・上行再誕ということすらも、ひじょうに遠回しに表現されている。

「先ず」「先立ちて」等といわれ、御自分がその当人であるとは、なかなかおっしゃらない。これは、上行といえば、法華經によると、本門の釈尊でさえも色あせてみえるほどの堂々たる大菩薩群の本化地涌のなかにあって、もっともすぐれた上首である。それに対し、大聖人の現実のお姿は凡夫僧であられる。このことから、もし大聖人が自分こそ上行であるといっても、人々はよけいに疑いを起こし、謗法の罪を深くするのを心配されて、直接的表現を避けられたと考えられます。

だが、もし、仏法の眼からみるならば「日蓮先ず粗弘め候なり」とのお言葉に、明らかに、大聖人御自身が上行であるとの元意がうかがわれるのであります。

なぜかならば、法華經がなんのために説かれたか、という一つの目的は、本化地涌を召しいだして、滅後末法の弘通を付嘱することにあつたからであります。ゆえに、神力、嘱累の付嘱が終わるや、十方の諸仏はみな本土に還り、多宝の塔も元へ戻って、莊嚴な虚空会の儀式は、靈山会に復帰するのであります。

これだけたいへんな力を入れて本化地涌、そのなかでも別して上首上行への付嘱がなされたのに、いま末法にいたって、上行菩薩の弘めるべき法を日蓮大聖人が弘められている。もし、大聖人が上行ではない、まったく別人だとしたら、あの法華經の儀式はなんのためだったのかということになってしまいうわけであります。多宝如来の出現も、十方諸仏の来集も、意味を失うことになってしまいうのであります。そんなことがあるわけがない。

この明白な道理のうえからも、日蓮大聖人御自身が、一往外用の辺において、上行菩薩の再誕であり、しかも内証においては末法万年の闇を照らす新たな大仏法建立の仏、すなわち久遠元初の自受用報身如来であられることが知れるのであります。

信心の血脈なくば法華經も無益

相構え相構えて強盛の大信力を致して南無妙法蓮華經・臨終正念と祈念し給へ、生死一大事の血脈此れより外に全く求むることなかれ、煩惱即菩提・生死即涅槃とは是なり、信心の血脈なくんば法華經を持つとも無益なり、委細の旨又又申す可く候、恐恐謹言。

「相構え相構えて」とかさねていわれているところに、これこそがもつとも肝要な結論であるとお

心がうかがわれます。まさしく最蓮房にとって、もつとも苦境のさなかにあり、成仏へと向かうかどうかのもっとも重要な時を迎えていました。なんとかこの一人の人間に、大聖人の生命の血脈を継がせたいとの強い御一念が拝せられます。生死一大事の血脈といっても、強盛な大信力を出して、南無妙法蓮華經と唱えること以外にない、ということでもあります。

「強盛」といい「大信力」といい、大聖人が全生命をふりしぼって一個の人間の信力を奮い立たせられようとしているお気持ち伝わってきます。

「臨終正念」とは、死に臨んで、この妙法に対する信心の心を乱さないこと、妙法を信受しえたことを無上の喜びとし、これで思い残すことはないという満足しきった心境で、一生を終わる姿であります。

したがって「南無妙法蓮華經・臨終正念と祈念し給へ」とは、死に臨んだとき、南無妙法蓮華經がわが正念であるように、いまからしっかり祈念していきなさい、ということであり、同時に、ただ今が臨終であるとの自覚で真剣に祈っていきなさい、ということでもあります。

臨終正念の祈念に立ったとき、己心の奥底の妙法が湧現して、宇宙に遍満する妙法と冥合する。ここに、生死の一大事が脈々と流れるのであります。これ以外に、信心の生死一大事血脈をわが身に具現する道はないということでもあります。そのとき、わがこの凡夫の身そのまま妙法の当体とあらわれ、したがって煩惱即菩提、生死即涅槃となるのです。

それゆえに、本抄の総結論として「信心の血脈なくんば法華經を持つとも無益なり」と厳しくお

せられているのであります。結局、信心に始まり、信心に帰結する。

「信心の血脈なくんば法華經を持つとも無益なり」——法華經という法のみでは、真実の成仏の道には入れない。法華經を身をもって読み、人法一箇の当体とあらわれてくださった日蓮大聖人以来の正統の信心——これが「信心の血脈」なのであります。この人法につながった信心でなくては、いかに法華經をたもっているといっても無益なのです。

この文は、信心のなかにこそ御本尊の仏力、法力も顕あらわれるという御指南でもあります。

有名な「日女御前御返事」の一節に「此の御本尊全く余所よそに求る事なかれ・只我れ等衆生の法華經を持ちて南無妙法蓮華經と唱うる胸中の肉団におはしますなり……此の御本尊も只信心の二字にをさまれり」(御書全集一二四四頁)とある。

御本尊も信心の二字におさまっているとの大聖人の明言であり、信ずるなかにこそ御本尊の力は顕現されるということなのです。

日寛上人は「観心本尊抄文段」において「我等この本尊を信受し、南無妙法蓮華經と唱え奉れば、我が身即ち一念三千の本尊、蓮祖聖人なり」といわれ、「故に唯仏力・法力を仰ぎ、まさに信力・行力を励むべし。一生空むなしく過して万劫悔ばんこうくゆることなかれ」と結論されているのであります。

このように「信心の血脈なくんば法華經を持つとも無益なり」とは、じつに嚴肅な御指南なのであります。信力、行力がなければ、仏力、法力は顕れませんし、もったいなくもわが身が即一念三千の当体とあらわれるはずもないのであります。「血脈」とは「信心」である——ということに、いっさ

いはつきるのであります。

さらに、この信心の血脈ということに関して、第九世日有上人の「化儀抄」には、つぎのように述べられています。

「信と云ひ血脈と云ひ法水と云ふ事は同じ事なり……高祖已来の信心を違へざる時は我れ等が色心妙法蓮華經の色心なり、此の信心が違ふ時は我れ等が色心凡夫なり、凡夫なるが故に即身成仏の血脈なるべからず」と。

この「化儀抄」を解説した堀日亨上人の「有師化儀抄註解」には、つぎのような説明を加えられています。

「信心と血脈と法水とは要するに同じ事になるなり、信心は信行者にあり・此信心に依りて御本仏より法水を受く、其法水の本仏より信者に通ふ有様は・人体に血脈の循環する如きものなるに依りて・信心に依りて法水を伝通する所を血脈相承と云ふが故に・信心は永劫にも動揺すべきものにあらず・攪乱すべきものにあらず、若し信が動けば其法水は絶えて来ることなし、爰に強いて絶えずと云はば其は濁りたる乱れたる血脈法水なれば・猶仏法断絶なり、信心の動かざる所には・幾世を経とも正しき血脈系統を有し仏法の血液活潑に運行す」と。

また「仏法の大師匠たる高祖日蓮大聖開山日興上人已来の信心を少しも踏み違へぬ時、末徒たる我等の俗悪不浄の心も・真善清浄の妙法蓮華經の色心となるなり此色心の転換も只偏に淳信篤行の要訣にあり、若し此の要訣を遵奉せずして・不善不浄の邪信迷信となりて仏意に違ふ時は・法水の通路

徒らに壅塞せられて・我等元の儘の粗凡夫の色心なれば・即身成仏の血脈を承くべき資格消滅せり、悲しむべき事どもなり」とも峻厳に記録しておられます。

すなわち「信心の血脈」とは、日蓮大聖人、日興上人以来の信心を、すこしも踏みたがえぬところに受け継がれるものであることが明確であります。ここに、遣使還告唯授一人の代々の御法主上人の尊きお立場があられる。

そして「仏法の血液活潑に運行す」とあるごとく、私たちが、日蓮大聖人御遺命の広宣流布に向かって、正しき信心を貫くとき、もったいなくも、大聖人の御生命が流れ通うのであります。

しかして、その信心とは日蓮大聖人、および日興上人に学ぶのであり、大聖人の御書に学び、日興上人の遺誠置文を肝に銘じつつ、御法主上人の御指南をうけて、広宣流布のため不惜身命の実践を貫く信心のなかに、御本仏の血脈が「活潑に運行」していることを断言するものであります。

文永九年 壬申二月十一日

最蓮房上人御返事

桑門 日蓮花押

「生死一大事血脈抄」を著された文永九年二月十一日という日について申し上げておきたい。この日

は、奇しくも、日蓮大聖人が「立正安国論」において、また前年の九月十二日の竜口法難たつのくちのさいにも、幕府に対して厳しく予言し警告されていた「自界叛逆難じかいはんぎやくなん」、すなわち内乱が勃発ぼつぱつした日でありま
す。

「今年二月十一日十七日又合戦あり……薬師経に云く『自界叛逆難』と是なり、仁王経に云く『聖人
去る時七難必ず起らん』云云、……日蓮は此関東の御一門の棟梁とうりやうなり・日月なり・亀鏡なり・眼目げんもくな
り・日蓮捨て去る時・七難必ず起るべしと去年九月十二日御勘氣ごかんきを蒙りし時大音声だいおんじやうを放てよばはりし
事これなるべし纔わずかに六十日乃至百五十日に此事起るか」(御書全集九五七ページ)と、事件直後の三月二
十日に「佐渡御書」のなかでおおせのように、大聖人の予言が的中したのであります。

当時、京都の六波羅南探題ろくはろみなみたんだいだった時宗の庶兄しよけい・時輔ときすけが、弟の時宗を倒して執権の地位を奪おうとの
陰謀いんぼうをたくらんだことが発覚し、その一味とされた教時、盛直らを、時宗が先手をうって討滅したも
のであります。同族あい食む死闘が展開されたが、やがて時輔の一族が全滅して、戦いは終わった。
これが「二月騒動」です。

大聖人は、この内乱の勃発が間近いことを、すでに一か月ほど前の一月十六日に、塚原問答の終了
後、本間六郎左衛門尉じやうに対して指摘し、警告されているのであります。

したがって、大聖人は本抄を執筆されているとき、騒然たる内乱に日本中が動揺していることを予
感しておられたにちがいない。そのなかで悠然ゆうぜんと永劫の未来を眺望ちやうぼうしつつ、令法久住の血脈を残そう
とされたのであります。

また「桑門^{そうもん}」とは、沙門^{しゃもん}のことであり、静志、貧道、動息^{こんそく}などとも訳します。善法を修して悪法を破すという意味で、出家して仏道を修行する者をいう。

大聖人は、文永十年四月の「観心本尊抄」では「本朝沙門日蓮撰^{ほんちようせん}」とされており、また、同じ文永十年閏五月の「願仏未来記」でも「桑門日蓮之を記^{しる}す」としたためられております。「桑門」とは「扶桑沙門^{ふそうさもん}」の意味で、すなわち「本朝沙門」と同意で用いられているとも考えることができます。

本尊抄で「本朝沙門」とされたのは、天台沙門に対する言葉であり、じつは大聖人の強い御確信のうえからの表現であります。つまり本朝、すなわち日本国こそ、末法万年の民衆を救済される御本仏出現の地であることを示しており、末法における最高の善法を修し、悪法を破される日蓮大聖人こそ、まさにその御本仏であることを明かされているともいえます。

以上、「生死一大事血脈抄」をとおして、私の感ずるままを述べてまいりました。

最後に、わが同志よ、わが久遠の友よ、広宣流布の道を進んでいく私たちの実践こそ、そのまま総じての生死一大事血脈なりとの、強く深い確信を持続して、新世紀をめざし凛々^{りんりや}しくわが道をスクラム組んでいこうと申し上げ、講義を終えさせていただきます。

（昭和五十二年四月「聖教新聞」掲載　ここでは総本山第六十六世日達上人御監修の改訂版を収録いたしました）